

前途程遠馳思於雁山之暮雲。後會期遙霑纓於鴻臚之曉淚。

鴻臚館に於いて北客に餞別するの序。

〔譯〕 前途程遠くして思を雁山の暮の雲に馳せ。後會期遙にして纓を鴻臚の曉涙に霑ほす。
〔大意〕 あなたの御旅路はまだなか／＼です。幾日幾夜を經過おしまひに御國の雁山につかれる頃はそんな様子でどんな想ひを爲さることかとお嬉しさが思ひやられます。處が今かうしてお訣れをしたら後いつ會へることかと思ふと悲しくて冠の紐もしごとになるまで惜別の涙の禁する能はざるものがあります。

花

菅 三 品

誰謂水無心。濃艷臨兮波變色。誰謂花不語。輕漾激兮影動脣。

〔譯〕 誰か謂ふ水に心なしと。濃艷臨んで波色を變ず。誰か謂ふ花語はずと。輕漾激して影脣を動かす。

〔大意〕 誰か水を無心と云ふ。煙波楚々として形容和めり。誰か花を啞者と云ふ。そよぐを風に朱唇翻々たるに。

山中 有 三 仙 室

菅 三 品

桃李不言春幾暮。烟霞無跡昔誰栖。

〔譯〕 桃李ものいはず春幾ばくか暮れし。烟霞跡なし昔誰か栖みし。

〔大意〕 仙室仙者なくして昇天してから幾春秋を経たことか桃李もの云はねば問へど答へず。烟霞徒にあたりをこめて遊子をして模索に苦しましむ。

天 子 萬 年

保 胤

長生殿裏春秋富。不老門前日月遲。

〔譯〕 長生殿の裏には春秋富めり。不老門の前には日月遅し。

〔大意〕 長生殿不老門何れも目出度い名まへで幾百千の齡をかさねても老いず死なすの結構なところだから我大君は千代に八千代の末かけて榮ねますことであらう。

不 出 門

菅 原 道 真

都府樓纔看五色。觀音寺只聽鐘聲。

共 八 朗 詠

三六三

〔譯〕 都府樓は纔に瓦の色を看。観音寺は只鐘の聲を聴く。

〔大意〕 罪はなくて君の御咎を受けた身は謹慎幽居してゐなければならんから太宰府の役所は近くても只室内から屋根を望むだけなり。又観音寺も程遠からねど只朝夕の鐘の聲を聴くだけで一步も門外に出て散歩逍遙するやうなことは敢てしない。

賦 項 羽

橋 相 公

燈暗數行虞氏淚。夜深四面楚歌聲。

〔譯〕 燈暗うしては數行虞氏が淚。夜ふけては四面楚歌の聲。

〔大意〕 燈ほの黒し。虞美人暗涙にむせんで涙闌干たり。夜は深更なり。敵壘四方を圍みて管絃皆楚聲あり。

〔是項羽が最後の出陣に虞美人とのわかれを惜んだところで本書「力拔山兮氣蓋世」の咏と對照すればよく悲壯の意をくみとることが出来る。

雲

紀 齊 名

山遠雲埋行客跡。松寒風破旅人夢。

〔譯〕 山遠くして雲行客の跡を埋め。松寒うして風旅人の夢を破る。

〔大意〕 山は遙にして道行く人は幾重の雪に埋められ松風さむく夜はたけて旅寢の枕幾たびか歌てられて夢圓かならず。

花 先 水 上 浮

菅 三 品

螢日螢風高低千顆萬顆之玉。染枝染浪表裏一入再入之紅。

〔譯〕 日に螢じ風に螢する高低千顆萬顆之玉。枝を染め浪を染む表裏一入再入の紅。

〔大意〕 これは冷泉院の池のはたの花木をほめた詩で花は日に映ね風に映ね枝を染め波を染めして或は萬顆の珠の如く亦再入のこしほそめたる紅の如し。どの意。

春 者 無 氣 力

菅 公

羅綺之爲重衣妬無情於機婦。管絃之在長曲怒不關於俗人。

〔譯〕 羅綺の重衣たるは情無きことを機婦に妬み。管絃の長曲に在るは關はらざることを俗人に怒る

〔大意〕 柳腰織手の美姬羅衣をさへ重しとして無情を機織女にかこち管絃長くして舞踊につかれ「早くやめてくれよばよいが」と俗人の長い奏樂をねたむ。

遺文三十軸。 軸々金玉聲。 龍門原上土。 埋骨不埋名。

(譯) 遺文三十軸。軸々金玉の聲あり。龍門原上の土。骨を埋むれども名を埋めず。

(大意) 我友元少尹が遺文三十卷あり。何れも金玉の文字を並べたる名文傑作にしてその存在を不朽にするに足る。龍門原上墳墓の土はよしやその骨肉を埋むともその名は千載に埋むることを得じ。

七 夕

李 白

憶得少年長乞巧。 竹竿頭上願絲多。

(譯) 憶ひ得たり少年に長く乞巧せしことを。竹竿の頭上に願絲多。

(大意) 七夕の夜に子供が澤山の色紙短冊をそなへてゐるのを見て自分も少年の時あの様にして七夕様をお祭りしたことを思ひ出した。

曉 賦

賈 島

佳人盡飾於晨粧。 魏宮鐘動。 遊子猶行於殘月。 函谷鷄鳴。

(譯) 佳人盡く晨粧を飾れり魏宮に鐘動く時。遊子猶殘月に行く函谷鷄鳴くとき。

(大意) 魏王宮中美人朝の化粧にいそがはしき頃孟嘗君は殘月に鞭をあげて函谷關で鷄の鳴きまねの上手な家來のおかげで萬難を免れてあわたくしく故國を指して歸りつゝあつたであらう。

氣霽風梳新柳髮。 冰消浪洗舊苔鬚。

(譯) 氣霽れては風新柳の髮を梳り。冰消ては浪舊苔の鬚を洗ふ。

(大意) 氣は晴れて春風柳の荒芽の髮をとき氷が消れて浪はふるい苔の髮のやうに雜艸をまじへてゐるのをサラ／＼と洗つてゐる。

今日不知誰計會。 春風春水一時來。

(譯) 今日知らず誰か計會せんことを。春風春水一時に來る。

(大意) 春風春水一時におどづれ來つて何とも云へぬ可い氣持がする。一跡誰がかう云ふ風に一時に二つの景物が出くばすやうにしたことであらう。

雞人曉唱聲驚明王之眠。 兔鐘夜鳴響徹暗天之聽。

其 八 期 詠

（譯） 雞人曉に唱へて聲明王の眠りを驚かし。鳧鐘夜鳴つて響暗天の聴きに徹す。

（大意） 時守り夜あけを知らずれば聖主夢をさまして政治を見給ひ時鐘夜鳴つて響き滿朝の耳をおどろかし上下を擧げて治世に勉勵ならしむるもの一に時計の効と謂ふべし。

竹馬島 作 都 其 香

三千世界眼前盡。 十二因縁心裏空。

（譯） 三千世界は眼前に盡き。 十二因縁は心の裏に空し。

（大意） 竹生島の山上に登りて鴉の海面見渡せば此世の眺めこゝに盡き諸種の迷ひもあとかたなく晴れた。

八月十五日夜禁中獨直對月憶三元九一 李 白

三五夜中新月色。 二千里外故人心。

（譯） 三五夜中新月の色。 二千里の外故人の心。

（大意） 今宵は名にし負ふ十五夜の月に對して想ひを江陵に在る知人に馳すればいごとどなつかしさに得堪へぬものがある。

上 陽 人 李 白

秋夜長。 夜長無眠天不明。 耿耿殘燈背壁影。 蕭蕭暗雨打窓聲。

（譯） 秋の夜は長し。 夜長うして眠ること無ければ天も明けず。 耿耿たる殘の燈は壁に背いて影あり蕭々たる暗の雨は窓を打つて聲あり。

（大意） 上陽人玄宗皇帝の寵衰へて一室に幽居しさらぬだに秋の夜長のつれなくを殘んのごもしきかきたて、壁に恨みの影長う失戀懊惱の中に夜をあかすことも幾日つゝいたことであらう。

白 居 易

松樹千年終是朽。 槿花一日自爲榮。

（譯） 松樹は千年なるも終に是朽ち。 槿花は一日なるも自ら榮を爲す。

（大意） 松樹の千年も遂に朽つることあり。 槿花の短命なるも一日の咏あり。 短くとも太く暮らすがいよ。

遊三雲居寺一贈三穆三十六地主 白 居 易

勝地本來無定主。 大都山屬愛山人。

（譯） 勝地はもとより定まれる主なし。 大よその山は山を愛するの人に屬す。

其 八 期 詠 三六九

(大意) 景色よき土地は誰と定まつた持主があるわけではない。大抵の勝地は之をもてはやす人に依て領せらるゝ譯である。

馬

白

居

易

盛夏不消雪。終年無盡風。引秋生手裏。藏月入懷中。

(譯) 盛夏消せざるの雪。終年盡くるなきの風。秋を引いて手裏に生じ。月を藏して懷中に入る。

(大意) 扇は夏の盛にも消れない雪とも謂ふべく年中盡くることのない風とも謂ふべく一たび煽げば涼秋手のうちに在り。明月胸襟に入るの趣がある。

晚

春

白

居

易

留春春不駐。春歸人寂寞。厭風風不定。風起花蕭索。

(譯) 春を留むれども春駐らず。春歸つて人寂寞たり。風を厭へども風定まらず。風起つて花蕭索たり。

(大意) 留むれど術なし。暮れゆく春のあとは行人そぞろに數へりうらめごかひなし。吹きくる風のはらはら〜花吹雪。

白

居

易

願以今世世俗文字之業狂言綺語之誤。翻爲當來世世讚佛乘之

因轉法輪之緣。

(譯) 願はくは今生世俗文字の業狂言綺語の誤りを以て。翻して當來世々讚佛乘の因み轉法輪の緣と爲し給へ。

(大意) 詰らない外道の文字文章言ひ艸でも構はないからそれに因つて佛道に歸依する動機としたい

申

文

直

幹

瓢箪屢空草滋顏淵之巷。藜藿深鎖雨濕原憲之樞。

(譯) 瓢箪屢々空しうして草顏淵が巷にしげく。藜藿深く鎖して雨原憲が樞を濕ほす。

(大意) 私はまことに不遇にして彼の顏淵が草の庵にわび住居してすきな瓢箪酒もからになり勝であつたことや原憲が家にはあかざの草が茂つて雨はどぼそを洩り勝であつたと云ふ此二人の賢なくして此二人の苦を嘗めて居ります。どうか然るべく御引立ての程を願ひます。

交

友

白

居

易

陽春曲調高難和。淡水交情老始知。

(譯) 陽春曲調高くして和し難し。淡水交情老いて始めて知る。

(大意) 陽春の曲は高くして和するに難けれど汪々たる淡水の高潔なる交情は老いて始めて體得し得た

其 八 期 詠

雪似鷺毛飛散亂。人被鶴氅立徘徊。

〔譯〕雪は鷺毛に似て飛んで散亂し。人は鶴氅を被て立つて徘徊す。

〔大意〕雪は鷺鳥の羽のやうにちらばらに飛び人は雪をかついでまるで鶴の毛衣を着たやうになつてその邊をうろくしてゐる。

落花不語空辭樹。流水無心自入池。

〔譯〕落花語らずして空しく樹を辭し。流水心無くして自ら池に入る。

〔大意〕自然の風物一去一來皆斯の如し。

題二仙遊寺

林間煖酒燒紅葉。石上題詩拂綠苔。

〔譯〕林間に酒を煖むるに紅葉を燒き。石上に詩を題するに綠苔を拂ふ。

〔大意〕仙遊寺の裏手に遊んで酒を爛するに紅葉を燒き詩興湧けば苔を拂つて石に記し自然の風趣誠にみやびの極をつくした。

第三部 散文學

第三部 散文學

其一 王朝文學

王朝文學の主なる者は韻文の古今集と散文の源氏物語とである。一體物語とは始めて當代に發達した小説のこゝで此に竹取物語のやうな傳奇的ロマンチックなもの源氏物語のやうな小説の色彩イデオロギを帯びたものがあるが何れも其骨子を男女の戀愛關係にこり迂餘曲折當代生活のパノラマとも謂ふべき趣がある。物語の外に隨筆があり日記があり雜史がある。

隨筆は今日の題名法の漫筆とか折にふれてとか折々草とか小品文集とか云ふ様なもので清少納言の枕の草紙が先例となつてゐる。已に隨筆であるからには終始一貫の想なく脈絡貫通の態を爲さずと雖も各章には各章特殊の面白味があつて恰も繪畫展覽會を觀てあるくやうな興趣がある。

日記はもと漢文で記されたものを紀貫之が土佐日記以來和文で記したものが多く出てそれ等作者の生活を知るには最も有趣的資料となつてゐる。單に日記と云ふけれども之には靜動二つの別があつて例

へば紫式部日記や中務内侍日記の如きは靜的な純粹の日記で土佐日記や更科日記や十六夜日記の如きは動的な紀行文である。

雜史とは史實を脚色して國文を以て記したもので花やかな王朝生活を憧憬した大鏡や榮華物語の作者が其先蹤となり今鏡水鏡増鏡彌世繼月の行く方池の藻屑など見るべきもの多く之を歴史小説と云つてはあまりに脚色乏しく之を純粹の歴史と云つてはあまりに美文的であると云つた風のものである。

かくや姫の昇天 (竹取物語)

返事はなくて屋の上へ飛車をよせて、「いざ、かくや姫、きたなき所にいかで久しくおはせん」と云ふ立てこめたる所の戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも人はなくして開きぬ。姫抱きて居たるかくや姫外に出でぬ。わごとむまじければ、たださし仰ぎて泣き居たり。竹取心まどひて、泣き伏せるどころに寄りて、かくや姫いふ。「こゝにも心にもあらでかくまかるに、昇らんをだに見送り給へ」といへども「何しに悲しきに見送り奉らん。我をば如何にせよとて、棄てては昇り給ふぞ。具して率ておはせぬ」と、泣きて伏せれば、御心まどひぬ。「文を書きておきてまからん。戀しからんをりくとり出でて見給へ」とて、うち泣きて書くことは、

この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで、侍るべきを侍らで、過ぎ別れぬること、返す返す本意なくこそ侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらん夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも、おちぬべき心地す。

と書きおく。天人の中にもたせる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。ひとりの天人云ふ。壺なる御藥奉れ。きたなき所のもの聞し召したれば、御心地あしからんものぞとて、もてよられたれば聊嘗め給ひて、少しかたみとて脱ぎおく衣に、包まんとすればある天人包ませず。御衣を取出でて着せんとす。その時にかくや姫しばし待てと云ひて、衣着つる人は、心異になるなり。物ひと言ひひおくべきことありと云ひて、文かく。天人おそしと心もとながり給ふ。かくや姫、物知らぬことなの給ひそとて、いみじく靜におほやけに文奉り給ふ。あわてぬさまなり。

かくあまたの人をたまひて留めさせ給へど、許さぬ迎まうで来て、どり率てまかりぬれば、口をしく悲しきこと、宮仕つかうまつらすなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得す思召しつらめども、心強くうけたまはらすなりにしこと、なめげなるものに思召し、とどめられぬるなん心に、とまり侍りぬるとて、

今はとて天の羽衣きるときぞ君をあはれと思ひいでぬる。

(解) 返事はなくて屋根の上へ飛車をもつてきて「サアお姫様こんなきたない所にくすくすしては

いけません」と云ふ。かと思ふく立てこめてあつた格子も戸も一度にクワラリと開いて婆さんが抱いて居た姫は早や外へ出てしまつた。それを婆はどうすることも出来ずただ仰ぎ見て泣いてをつた。竹取も心取亂れてうつつぶして泣いてゐる。と姫は「わたしだつて自分がすきこのんで昇るのぢやありませんんお名残をしいは山々ですのにせめては御見送り下さいましな」と云はれたけれども「この悲しいのに何で見送りが出来ませう。わたし等二人をどうなれとおつしやるのです。いつそのこと一緒に大空へ連れて率つて下さい」と竹取が歎くと姫も流石に心まどはれて「それではせめて手紙なりと差上げませう。私のことを思ひ出して下さるとき折にはそれを御らん下さい」と云つて涙ながらに書くことは

妾若し此國の者ならば充分心おきなく御二方の老先を見届けますのにそれもかなはで今茲でお別れをすることは誠につらうございます。着物一枚おき土産としておきますから此をば記念として下さい。又月大空に澄む夜なくは必ず私のことを思召して下さい。噓かうして昇天はするものゝ下に心が引かされて何だか落ちさうでなりません

と。天人の中に箱を持つてゐるものがあつてその中には彼の有名な天の羽衣や不死の薬が入つて居た。ひとりの天人が云ふには「壺のお薬を姫にすゝめよ。下界の汚れた所にゐられたのだから定めて御心地もお悪いことだらう」とそばへ持つてくると姫は少し嘗めて此も記念にとて脱いだ着物に包まうとせられると天人の一人がつとめて包ませないで羽衣を取出して着せやうとした。姫は「一寸待つて」とさしどめて「羽衣を着るともうすつかり心が天女になつてしまふのだから此人間の氣である中に一言書きたい」と云つて又手紙を書かれた。天人は「エ、じれつたい」と云ふ。姫は「そんな薄情なことを云ふもんぢやありません」と云つておちつきはらつた態度でみかどに宛て、

此様に澤山の人をおさしつかはしになつてお留め下さいましたにも拘らず宮仕を得いたしませなかつたのは斯うした身分……天女となつて昇天しなければならぬ身なのですから……それをも知らし召さぬ我君様には嘸や恩知らず義理知らず情知らずの無禮な奴と思召すこととございませう。私はそれが何より氣がかりでなりません。私と書いて尙歌を一首をへられた。

サア今昇天するとて羽衣を着る段になつて一番私の心に悩みを感じるのは御志あつかつた我君様の御事です。

ふりわけ髪 (伊勢物語第二十一節)

昔田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出で、遊びけるを、成人おとなになりければ、男も女もは

ぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めとおもひ、女もこの男をこそと思ひつゝ、親のあはす
ることも聞かでないありける。さてこの隣の男のもごよりかくなん。

つゝあづ、井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしなあひ見ざるまに。

女かへし。

くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずしてたれかなづべき。

かくいひくゝて、遂に本意の如くあひにけり。さて年ごろふる程に、女の親なくなりて、たよりなく
なるまゝに、諸共にいふかひなくてあらんやはとて、河内國高安郡にいき通ふ所いで來にけり。さり
けれどこのもとの女、悪しと思へるけしきもなくて出しやりければ、男ごごゝろありて、かゝるに
やあらんと思ひ疑ひて、前裁の内にかくれ居て、河内へいぬるかほにて見れば、この女いどうけさ
うじて、うちながめて、

風吹けば沖つしらなみたつた山よはにや君がひこり越ゆるん

とよみけるを聞きて、かぎりなくなしと思ひ、河内へも通はずなうにけり。

(解) 昔田舎まはりの行商人の子ども同士が井戸端に出て遊んで居たがだん／＼大人びて互に一緒に
遊ぶことを極りわるがるやうになつたけれども男はなんでも此娘を妻にと思ひ女も亦夫に持つなら彼

の方と思ひ親が外の結婚談を持ち出しても一向にとりあはなかつた。さて隣の男の方からはこんな歌
を詠んでおこした。

昔井筒にバラリとかけたそなたの髪も大分延びて美しく成人せられたことでせう。永らく逢はない
間に

と。そこで女は早速返歌をした。

如何にもあなたと井戸端でどつちが長いなんか云つて比べ合ひなごした振分髪も今は肩すぎるまで
延びました。だげど此を結はせて人妻の姿にしてくれる人はあなたより外に誰がありません。

かうした情交がだん／＼順當に進行してどう／＼芽出たく結婚をした。さて追々と暮らす中に女の親
が死んで生活上の後援を失つた處からお互にたよりないもの同士では面白くないではないかなど云つ
て男は又河内の國高安郡の方に情婦をこしらへてそこへ通つてをつた。にも拘らずこちらの女はそれ
をちつとも心わるさうにもせず「サアいらつしやい」と心よく送り出すもんだから男さてはアイツも
亦留守中にどんなことをしてゐるんだかわからぬと疑つて河内へ行く振をして庭さきに隠れてじつと
様子を考へてゐると女は大さう慎ましやかに嗜みを崩さず物思はしげに

あゝ我夫の君は此夜半に立田の山を越わまして河内の國へ通はせられるがヒヨツと山の中で山賊な

んかに遇はれうかどそれが心配で危ぶまれる。

とよんだので男は「ナントしほらしいとしい女もあつたもんだ」と思つてそれからは河内通ひはラツ、リやめてしまつた。

小野の山 (伊勢物語第八十節後段)

思ひの外に御ぐしおろさせ給ひて、小野といふ所にすみたまひけり。正月にをがみ奉らんとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いとたかし。強ひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく候ひて、いにしへの事など思ひ出できこわさせけり。さてもさふらひてしがなと思へど、おほやけごとどもありければ、わ候はで夕暮にかへるとて、

わすれては夢かどぞおもふおもひきや雪ふみわけて君をみんとは

とてなんなく／＼來にける。

〔解〕 意外にも御剃髪遊ばして小野と云ふ所にお住ひになることになつた。正月にお訪ねしやうと云ふので小野へいつたのに處は比叡の山すそのこととて雪はうづたかく積つてゐる。それをば無理にふみわけて御室に參つてお目にかゝるとつれづれと物さびしく暮らしてゐられたからなかくお邪魔して昔語りに移した。もつと長くと思つたが公務の都合もあることとて夕暮に御暇することにして

わすれては夢かどぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは
とよんで泣く／＼まかり出た。

雨夜の品定め (源氏物語帚木の卷)

第一 殿

霖雨晴間なきころ、内裏の御物忌さしつゝきて、いとど長居侍ひ給ふを、大殿には覺束なくうらめしと思したれど、萬の御よそひ、何くれとめづらしきさまに調じ出で給ひつゝ、御子息の君たち、唯この御宿直所の宮仕を勤め給ふ。宮腹の中將は、中に親しく馴れ聞ひ給ひて、遊戯をも、人よりは心やすく、なれ／＼しくふるまひたり。右大臣のいたはりかしづき給ふ住處は、この君もいとものうくして、好色がましきあだ人なり。里にても、我かたのしつらひまばゆくして、君の出入し給ふに、うちつれ聞ひ給ひつゝ、晝夜學問をもあそびをも諸共にして、をさ／＼立ち後れず。何處にてもまつはれ聞ひ給ふほどに、おのづからかしまりをもおかす。心の中に思ふことをも隠しあへずなん、むつれ聞ひ給ひける。

〔解〕 五月雨絶えずふりつゞくころ宮中の御物忌が引つゞきあつて源氏は長らく退出せないで御殿に居られたので本妻葵の上は心もとなく怨めしく思はれたけれどもそれでも何かと氣をつけて葵の上の

御兄弟はたゞ此の君の御心を飽かせまいと宮仕へをさく／＼怠りなかつた。葵の上の御兄頭の中將は兄弟の中でも源氏とは一番心やすい方であつた。父右大臣がアレコンと目星をつけらるる女は此君もいやで好色の点に於いても先は源氏と似たりよつたりであつた。里方にゐても始終源氏と一緒に學問もしあそびをもして凡べての生活が共通であるだけに親しみもふかくて氣むつかしい禮儀作法はお互にのきにしての交際振であつた。

第二 段

つれ／＼と降りくらしして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさく／＼人すくなに、御宿直所も、例よりはのどやかなる心地するに、御殿油近くて、書なども見給ふついでに、近き御厨子なる、いろ／＼の紙なるふみごもをひき出で、中將わりなくゆかしがれば、さりぬべき少しは見せん。かたはなるべきもこそと、ゆるし給はねば、そのうちとけて、片腹いたしと思されんこそゆかしけれ。押しなべたる大かたのは數ならねど、ほご／＼につけて、かきかはしつゝも見侍りなん。おのがじうらめしき折々、待顔ならん夕暮などのこそ、見所はあらめと怨すれば、やんごごなく、切に隠し給ふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などに、うち置きちらし給ふべくもあらず。深くとり隠し給ふべかめれば、これは二のまちの心やすきなるべし。片端づゝ見るに、かくさま／＼なるものごもこ

そ侍りけれとて、心あてに、それかかれかなど問ふ中に、言ひ當つるもあり。もてはなれたる事をも思ひよせて、疑ふもをかしと思せど、言すくなにて、とかく紛はしつゝとり隠し給ひつ。足下にこそ多く集へ給ふらめ。少し見ばや。さてなんこの厨子も心よく開くべきとの給へば、御覽じ所あらんこそ難く侍らめ、なご聞ね給ふ序に、女のこれはしもと、難つくまじきは難くもあるかなと、やう／＼なん見給へ知る。

(解) つれ／＼と淋しく降る雨の夜殿上人すくなくいつになく静かなことと燈近くひきよせて源氏は書見をしてゐられると頭の中將はかたへの厨子棚からふるい手紙なんかを引張り出して「ヤアこりや面白いものがある」などと云ふと君は「差支のないのは見せても可いがちつと字の拙いのはのけておかう」ととり上げやうとせられると「イヤその拙いと云はれるのにお安くない筋があるのでせう差支のないのは普通平凡ので私等だつて随分もつてをりますけれどさもなくともい／＼物怨じをする夕暮待つて居たに何としてなご云ふておこしたのが面白いんだのに」と怨み顔なもんだから仕方なく「それでは」と見せられた。とは云ふものたつて秘密を要するものならばこんな人目に觸れるところに置かれるわけではないから此はマア／＼情婦の中でも特等や一等ではなくて二等株のそれであらう。そこで片ツ端から見っていくと「ヤアどうも色々あるな。御艶福誠に羨しうござる。サテ此は確に見覺

わがある。オウサウ〜〇〇からのでせう。ナニ違ふと……では〇〇かなあ」など言ふ中には當るのもあり外れるのもあり中には途方もない當てすつばうを言つて思はず噴き出されるやうなこともあつたが源氏はなるべく言葉少なにあしらつて實際を打ちあかさずに居られた。「兄さんこそ澤山お持ちでせう。拜見したいものです。あなたがお見せ下すつたら私も此厨子を開放させよう」と云はれると「イヤもう持つてもお目にこまるやうなのは一つもありません」と云つてサテ此迄自分に文を起した女のごとごもを思ふと誰一人として完全無缺なものはないと云ふことが思はれる。

第三段

唯うはべばかりの情に、手はしりかき、折節の答心にて、うちしなごばかりは、随分によろしきも多かりと見給ふれど、そも誠にその方も取り出でんわらびに、必ず漏るまじきはいとかたしや。我心得たる事はかりを、おのがじ、心をやりて、人をばおとしめ、片腹痛き事多かり。親など立ち添ひてもてあがめて、おひさき籠れる窓の内なる程は、唯片才を聞き傳へて、心動かす事もあめり。容貌をかくしうちおほごき、若やかにて紛るゝ事なき程、はかなきさびをも、人真似に心を入るゝ事もあるに、おのづから一つよしづけてし出づる事もあり。見る人後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をば繕ひて、まねび出すに、それしかあらじと、そらにかは推し量り思ひください。誠かど見

もて行くに、見劣りせぬやうはなくなんあるべきと、うめきたる氣色も耻かしげなれば、いとなべてはあらねど、我も思し合ふることやあらん。うちほゝゑみて、その片才もなき人はあらんやこの給へば、いとさばかりならんあたりには、諸かは誘され寄り侍らん。取る方なく口惜しきはと、優なりと覺ゆばかり、勝れたるごは、數等しくこそ侍らめ。人の種姓貴く生れぬれば、人にもてかしづかれて隠るゝ事も多く、自然にそのけはひこよなかるべし。中の品になん、人の心々、おのがじの立てたる趣も見えて、わかるべき事かたゝ多かるべき。下の刻といふ極になれば、殊に耳たゝすかしとていと限なげなる氣色なるも、ゆかしくて、その品々やいかに、いづれを三の品におきてか分くべき。もとの種姓貴く生れながら、身は沈み、位みじかくて人げなき、又直人の上達部などまでなりのほりたる、我はがほにて家の内を飾り、人に劣らじと思へる、その差別をばいか別くべきと問ひ給ふ程に、左馬頭、藤式部丞、御物忌に籠らんとて参れり。世のすきものにて、物よく言ひ通れるを、中将待ちとりて、この品品辨へ定め争ふ。いと聞き惜き事多かり。

(解) 唯外面的に観ると字は立派なり。應答は爽やかなり。一寸見て如何にも氣のきいた女は随分あるけれどもさて愈々妻としてきめる段になると必ず當選すると云ふことはむつかしい。自分の得手なことばかりを持出して人をやりこめたり辱かしめたりして随分見苦しいことが多い。それでは両親に

おほしたてられて深窓の中に人となつた女はイヤ箏がうまいの手が上手のと一藝一能に秀いでてゐると云ふ噂だけで人をゆかしがらすこともあるやうだ。容貌をかしく大様で若やかでつまらない遊びまでも人のするのを熱心に見かねて果は自身で工夫して上手になることもある。それをば見る人はその短所は云はないでよい方のかさにかさかけて大袈裟に言ひ傳へるのを妻にとて迎へる本人はさうして風袋と正味との區別をつけることが出来やう。そこはす氣色もやや羞かみ氣味なのにそんなにおきまりの平凡な女に言ひがかりはないけれども多少は心當りもあると見れて少しホホ笑んで「その一藝にさへ達しない女もあるだらうか」と云はれると「そんなつまらない女に誰がチャームされませう。木で鼻くくつたやうに知らぬ顔ですわ。優しいのと氣のきいたのとはマア同等のなみでせうか。上流の子女は下々のおへつらひに利子つけられて缺點でもかばはれる場合が多く自然噂の上では立派な女として傳へられませう。マア中流の子女こそ缺點も長所も最も赤裸々に紹介せられて採るべき女が多いでせう。下流の子女となつては沙汰の限りです」と云つてエヘンと云つた顔つきもなか／＼興あり「サアその品の部類わけはどうしてするのです。何を標準になさいます。生れは貴くてもだん／＼になり下り今は逆境に沈んでゐる人の娘もあらうし又卑しい地下人で鰻上りに上達部位までも仕あげて我こそ云はぬばかりに家の裝飾などハイカラ振つたことをしてゐる人の娘もありませう。それ等の

區別はどうしてつけたものでせう」と云つてをられるところへ左馬頭や藤式部丞が御物忌に籠らうと云ふのでやつてきた。何れ劣らぬ女性通ばかりのこごとで中將は「よいところへ来た」と云ふもんで此品々について色々議論を始めた。それには私ども(紫式部自身が云ふ)女には随分耳のいたいことが澤山あつた。

第四段

なりのぼれども、素よりさるべきすぢならぬは、世の人の思へる事も、さはいへど猶異なり。又もとはやんごとなきすぢなれど、世にふる便たがすくなく、時世うつろひて、おぼね衰へぬれば、心はこゝろとして事足らず。わろびたる事ども出で来るわざなめれば、どり／＼にこことはりて、中の品にぞ置くべき。受領オウリョウと言ひて、人の國の事にかゝづらひいとなみて、品定まりたる中にも、又階級キヤクありて、中の品のけしうはあらぬ、わり出づべき頃はひなり。なま／＼の上達部よりも、非參議の三四位どもの世のおぼね口惜しからず。もとの根ざし賤しからぬが、安らかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬ事などはたなかめるまゝに、省かず。まばゆきまで、もてかしづける女なごの、おとしめ難くおひ出づるも數多あるべし。宮仕に出で立ちて、思ひかけぬ幸福さいわい、とり出づる例たれしども多かりかしなごいへば、すべて賑はしきに、よるべきなめりどて笑ひ給ふを、他人の言はんや

うに、心得ず仰せらるゝとて中將にくむ。もとの種姓、時世のおぼわうちあひ、やんごとなきあたり
の、内々のもてなしけはひ、後れたらんは更にもいはず。何をかく生ひ出でけん、いふかひな
く覺ゆべし。うちあひて勝れたらんも道理、これこそはさるべき事とおぼわて、珍らかなる事と、心
も驚くまじ。某が及ぶべき程ならねば、上かはうち置き侍りぬ。さて世にありと人に知られず、淋
しくあばれたらん葎の門に、思ひの外にらうたげならん人の、閉ぢられたらんこそ、限りなく珍らし
くは覺ゆめ。いかではたかゝりけん、思ふより違へる事なん、怪しく心とまるわざなべき。父の年
老い、物むつかしげにふどりすぎ、兄の顔にくげに、思ひやり異なる事なき聞の内に、いといたく思
ひあがり、はかなくし出でたる事わざも、故なからず見わたらん、片才にても、いかゞ思ひの外にを
かしからざらん。勝れて疵なき方のわらびにこそ及ばざらめ。さるかたにて捨て難き物をばとて、式
部を見やれば、我妹ごもの、よろしき聞あるを思ひての給ふにや、とや心得らん、物も言はず。

(解) 左馬頭が云ふには「素性卑しくして成り上がつたものはいくら上品ぶつても世間は矢張り成り
上り物成金氣質と云ふ眼で見ます。もとは立派で今衰へてゐる家は成程心ばわの見るべきはありませ
うけれども第一經濟方面に於いて弱点がありますからどうしても中等に据ゑるべき品物でせう。又地
方官の受領などと相場のきまつたものにも其實は色々の階級がありますが先は中等の品として苦しか

らず。愈々選擇する場合には有力なる候補者の一つでありませう。上達部々々つて云ひますけれど
もい加減な上達部よりも非參議の三位か四位で世間の氣受けがよくつて家柄も可なりと云つた筋の
方がサツパリとして親類づき合ひなどするには此方がよろしい。何事も至らぬ限なく周到な注意を受
けて本人の立派な上に尙もみがきをかけると云ふ風なのも廣い世間のことですから随分あるでせう。
又それ等の子女が宮仕へしてみかどのお胤を宿したりして氏なくして玉の輿に乗るためしもありませ
う」と云ふと源氏は「やつぱりよい方がよいな」と云つて笑はれると中將は「自分のことは棚へあげて
まるで人事のやうに」と憎む。

生れもよく評判もよくつてさて愈々宮仕へして君の御覺ね斜めとなつては却つて大なる悲哀のもとで
「何しに女に生れて來たらう」とひごくメランコリーに陥ることせう。幸に君の御意にかなつて時め
いたとしてもそれはあたりまへのごとで何も齋が鷹生むだと云ふ譯ではなしとなつて左程嬉しいもの
ではありますまい。到底私ごもが及びもつかぬことですから上の上の部なんかは申しますまい。世間
からはあまりその存在を認められずあたり淋しき葎屋に存外美しい女が靜に暮らしてゐるのは最も注
目に値するものです。こんな女がこんな處にどうしてゐることだらうと云ふクエツション附きの處が
即ち此女の人を引きつける武器なのです。おやちは老いばれのポツテリ物で兄だつて物騒な日の暮れ

顔でどこにもとりわがない家庭に育ちながら本人の氣品は大きう高くて一寸するわざにも並ならぬ上手が閃めくと云ふことはよしや一藝とは云へ見所の多いものです。無論完全無缺のそれには及びませぬけれども満更見捨てたものでもありませんまい」と云つて式部の方を見ると「ハハアこれはテツキリ我妹のことだな」と思つてだまつて口を噤んだ。

春 は 曙 (枕草紙卷頭)

春は曙、やう／＼白うなりゆく。山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜、月の頃は更なり。闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山際いと近くなりたるに、鳥のねごころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて風のおと蟲の音など、いとあはれなり。冬は雪の、ふりたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒き火など、急ぎおこして炭もてわたるも、いとつきん／＼し。晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃、火桶の火も白き灰がちに、なりぬるはわろし。

(解) 四季の興趣を叙したもので徒然草の佳章「折ふしの移りかはり」の先驅をなすものである。

春は曙の景色が一ばんよい。だん／＼と夜が白むにつれて山際が少しボツとあかるくなつて紫匂ふ横

雲が細くかすかに舞いてゐる有様はたどふべき物もない。

夏は夜の景色がよい。月の夜は勿論さうでなくても闇夜を縫うて飛ぶ螢や雨一しきり颯と降つて涼味の掬すべきをもたらずなど共に面白い眺めの一つだ。

秋は何といつても夕暮に限る。夕陽は西に傾きつつはなやかな残光を大地に投げて時をいそぐ群鳥の三つ四つ二つとちらばらに飛びかふ様も面白く殊に竿さし渡る雁がねが大空高く有るか無きかの様に小さく並んでゐる様は大へんにをかしいものだ。日が入つた後も萩の上葉を訪ひ來る風千草にすだく蟲の聲などとり／＼にあはれ深いものだ。

冬の景物としては雪のふる事は勿論霜のあしたも面白く、でなくても大きう寒い朝、火など急ぎ起して炭を持つてかしここの室へ往く様もなか／＼景氣のよいものだ。唯晝頃になつてだん／＼其火がたつて炭櫃(角火鉢)火桶(丸火鉢)の上が白い灰で石灰をかふせたやうになつたのはあまり感心しない

宣耀殿の女御 (枕草紙「家」の一節)

村上の御時、宣耀殿の、女御と聞けるは、小一條の左大臣殿の御女におはしましければ、誰かは知り聞わざらん。まだ姫君におはしける時、父大臣かたはらの聞かせ給ひけるは、一つにはおん手を習ひ給へ次にはきんの御琴をいかで、人にひきまさらんとおぼせ。さて古今の歌二十卷を、皆浮べさせ給はん

を御學問にはせさせ給へどなん、聞かせ給ひける。

(解) 宣耀殿の女御芳子は御髪の長く美しいので有名な方で大鏡にはその御髪の一筋をとつてみちの紙の上に紋々を作つたら紙一面にひろがつてまだあまつてゐたと云ふ風の記事がある。此章はその女御の生ひたちを叙したもので以て王朝時代の上流女子教育の一端を知ることが出来ると思ふ。

村上天皇の御時宣耀殿の女御芳子の君は小一條の左大臣師尹公の御姫君でゐらせられたから誰一人として知らぬものはないであらう。さて此方がまだ御興入にならない先に父君師尹公が御さとしになつて云はれるには「第一には文字を上手に書くやう習字に骨を折れ。第二には七絃琴を一所懸命に練習して何でも人並以上になることをつとめよ。第三には古今集二十卷の千首を片つ端から暗記するやうに勉めよ。」とさうさとされた。

こころゆくもの (枕草紙)

よくかいたる女繪の、詞をかしうつゝいておほかる。物見のかへさにのりこはれて、男ごもいと多く牛よくやるもの車走らせたる。白く清げなる檀紙ふたのくみに、いと細う書くべくもあらぬ筆して文書きたる川船のくだりざま。齒黒めのよくつきたる。調ばみに調多くうちたる。うるはしき糸のねりあはせぐりしたる。物よく言ふ陰陽師かんやうしして、河原にいでてすを積たかしたる。夜寝起きて飲む水。

(解) 氣持のよいものは巧みに書かれた墨繪の草がきに繪詞をかしう長々とつけたもの。物見遊散のかへりに副乗りの男の乗りあまされて牛を達者に御するもの牛車にのつた有様。白くきれいな檀紙に大へんに細い線でうまく文を書きつけたもの。川船の悠容と下つて行く様。お齒ぐろがよくついたもの。調食みのあそびをして同じ目が毎度出たもの。美しい糸を練つてよりあはせたもの。物をはきくぐと云ふ立派なまじなひ師をたのんで河原で自分の呪咀まじなひをされた時さては夜の寝ざめに起きて飲む冷水も氣の晴々とする一つに計へたい。

遠くて近きもの (枕草紙)

極樂、船の道、男女の中、

(解) 清女が警句には往々ツルゲネフのその如きものがある。その一例としては蓋此語なんかが適當であらう。

極樂淨土は西方十億萬土にあると云ふと如何にも遠いやうだが之に達するには唯稱名念佛して南無阿彌陀佛と云へば直ぐに行かれるから遠くて近いもの、一つである。

佐渡は四十五里波の上など云つても日毎に移る島山の景色に心慰められていつか知らぬ間に望みの港につくからこれも遠いとは云ふもの、近いものだ。

男女七才にして席を同じうせずなど云ふとお互ひに接近する機会はないやうにあるが一首贈答途上の
一瞥尙よく百年の契を結ぶを見れば此亦遠いやうで近いもの、一つと謂つてよからう。

大井の行幸 (大和物語)

亭子の帝の御供に、大政大臣、大井に仕う奉り給へるに、紅葉小倉の山に、いろ／＼いとおもしろかりけるを、限りなくめで給うて行幸もあらんに、いと興ある所になんありける。必ず奏してせさせ奉らんなど申し給うて、ついでに、

小倉山みねのもみち葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなん

となんありける。かくて歸り給うて奏し給うければ、いと興ある事なりとて、大井の行幸といふ事始め給うける。

(解) 眞信公が宇多天皇の御供をして大井に行かれたのに小倉の山の峯の紅葉が大さう面白かつたから「こんなところへ行幸あらせられたならばさぞ興あることぞせう。是非に私が段取りをいたしまして御供いたしませう」など云はれた序に「汝小倉山の紅葉よ若し心あらばもう一度我君がおこしになるまでは散らすにそのまゝで居よ」とよませられた。斯くて宮にかへつてそのことを取計らはれたからそれは大變面白いことだと云ふので此時から大井の行幸といふことが始まつた。

おちくぼの君 (落窪物語巻頭)

今はむかし、中納言なる人の、女あまた持ち給へるおはしき。大君、中の君には聲ごりして、西の對東の對に、花々しく住せ奉り給ふ。三四の君にも裳着せ奉り給はんとて、かしづきぞし給ふ。また時々かよひ給うける。王家統流腹の君とて、母もなき御女おはす。北の方、心やいかおはしけん。仕うまつる御達の數にだにおぼさず。寢殿の放出の、又一間なる、落窪なる所の、二間なるになん住せ給うける。君達ともいはず。御方とはましていはたませふべくもあらず。名をつけんとなれば、さすがに、大臣のおぼさん心あるべしと、つゝしみ給うて、おちくぼの君といへこの給へば、人々もさいふ。

(解) 昔或中納言に澤山の娘があつた。大君と中の君とはそれ／＼聲君を迎へて西の對と東の對とに花やかな生活をしてゐられる。三の君四の君にも御裳着の式をさせやうと云ふので何かと準備してゐられる。これにもそれ／＼ふさはしい殿方がお通ひになつてゐるやうである。又別にさるお宮家筋の御腹に母上のない姫君がゐられたが中納言の奥方と云ふのがちと心ばへのひがんだ方で此腹違の姫君にわけへだてをして母屋の放出の一間の低い室にばかり住まはせてゐられた。そして呼ぶにも君達とも云はずまして御方などは更にも云はれず。さればとて中納言の手まへもあることとて流石に憚つ

て「落ちくぼの君」といへど云はれたもんだから誰も彼もさう云ふことになつた。

姫君の御さち (住吉物語卷末)

姫君このよしを聞き給ひて、むつまじかりし人なればとて、むかへ奉りて、過ぎにし方の世のふしぎなる事どもかたらひ、あかしくらし給ひける。大將もよき事とて、大事のことにぞ思ひ給ひける。年月ゆくほどに、大將殿にはちち關白ゆづり給ひぬ。いよ／＼末の世たのもしくぞ侍りける。わか君は元服せさせたまひて、三位中將とぞ申しける。姫君は十八にて女御にまゐり給ひける。侍従はおとな女にて、よろづに大事の人にぞ思はれて内侍になりぬ。見聞く人うらやみあへり。大將姫君するまで繁昌して、めだたくぞおはしける。さて繼母、見聞く人々にうごまれ、朝夕はねをのみ泣きたまひて世の中おとろへて、つひにはかなくなりたまふ。むくつけ女、あさましきありさまにて、まごひありきけるとかや。むかしも今も、人にはらくろなる人はかゝることなり。これを見聞かん人々は、かまひて人々よかりぬべきなりとぞ。

(解) 姫君は義理の妹君たちの不しあはせなことを聞かれて「たとひ義理でも姉妹のことだから」と云つて迎へどつて昔の幼な物語などして暮らされた。夫の君の大將もそれをうべなうて心よくあしらつてをられた。だん／＼と月日がたつて大將は父のあとをついで關白職につかれていよ／＼末たのもしく

榮ゆるせられることになつた。お出来になつた若君は元服せられて三位中將とならせられ娘君の方は十八才で宮仕へせられかしづいてをつた女は世事馴れて萬事に重寶がられて果は内侍になつた。此を見聞く人は誰も皆羨ましがつてゐた。それに引かへ繼母の方は人から排斥されて泣きの涙でくらしでとう／＼不遇の中に終つてしまはれた。彼のをころしい女も世にあさましい姿して方々をうろつきあゐるいてゐたとか。昔も今も心よくない人は皆かうしたものだ。この書をよむ人は必らず／＼わるる氣などを起してはならぬ。

男もすご云ふ日記 (土佐日記)

男もすご云ふ日記といふものを、女もしてみんとてするなり。その年十二月しほすの廿日あまり、一日の戌の時に門出す。そのよしいさゝか物にかきつく。

(解) 男子の書くもんだと云ふ日記とか云ふものを女だてらに一つまねてみやう。承平四年十二月廿一日八時頃に土佐の國府を出發して上京の途についた。そのことを少々こゝに書きつけやう。

廿四日、講師馬の餞しに出でませり。ありとある上下、童まで酔ひしれて一文字をだに知らぬものしが、足は十文字を踏みてぞ遊ぶ。(本文)

(解) 廿四日土佐國分寺の講師が餞別をもつてこられた。ありとあらゆる上下少年に至るまで酔ふた

んぼになつて目には一文字をさへ知らぬものが足は十文字にふんで遊んでゐる。

二六

菅公の左遷 (大鏡卷二の一節)

このおとごは基經のおとごの御太郎なり。御母四品彈正尹人康親王の御娘なり。醍醐のみかどの御時このおとご左大臣の位にて、としいとわかくておはしき。菅原のおとご右大臣の位にておはします。そのをりみかど、御年いとわかくおはします。左右大臣に世のまつりごとを、おこなふべき宣旨くださしめ給へりしに、そのをり左大臣御歳廿八九ばかり、右大臣御歳五十七八にやおはしけむ、ともに世のまつりごとうちせしめ給ひしあひだ、右大臣ざねも世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても、ことのほかにかしこくおはしまし、左大臣は御歳もわかく、ざねもことのほかに、おとり給へるにより、右大臣御おぼね殊の外におはしましたるに、左大臣やすからずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけむ。右大臣の御ためによからぬ事、いできて昌泰四年正月廿九日、太宰権帥になしたてまつりてながされ給ふ。

(解) 時平公は大臣基經公の御長男です。母君は人康親王の御女で醍醐の朝に仕へて早く左大臣となられました。當時菅公は右大臣となられましたが天皇はまだ御年が若くていらせられましたので天下の政務を擧げて兩大臣に任かせられる様に仰せがありました。時平公は廿八九歳菅公は五十七八

才にならせられてをりましたが相並んで朝廷に立たれる段になると菅公の方は學問才識ともにすぐれ身だしなみも非常に慎ましやかでいらせられるのに時平公の方は凡ての點に於いて大分劣つてゐられるところから天皇の御信用もおのづと菅公の方に傾かせられて時平公は始終不安に思つてゐられたが此が前世の約束事でも申すのでせうか菅公の御爲に面白からぬことがふつてわいて昌泰四年正月廿九日に太宰権帥に貶せられて筑紫へ配流の身となせられました。

このおとごの子ども、あまたおはせしに、女君たちはむごりし。男君たちは、みなほごにつけて位ごもおはせしを、それもみなかたくなにながされ給ひて、かなしきに、をさなくおはしける男君女君たち、したひなきて、おはしければ、ちひさきはあへなむと、おほやけもゆるさしめ給ひしかば共にゐて下り給ひしぞかし。みかどの御おきて、極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを、おなじかたにだにつかはさざりけり。かたくなにいと悲しくおぼして、おまへの梅の花を御らんじてこちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなして春なわすれを。又亭子のみかどに、聞かせ給ふ。

ながれゆくわれはみくづとなりはてぬきみしがらみとなりてごごめよ。(本文)

(解) 菅公には澤山の子達があつて其中姫君はそれ／＼御結婚になり男の御子もめい／＼位がありま

したがみんな別々のところに流されることになつて誠にお痛はしいことになりました。小さいお子様たちがあまりにいちらしく父上を慕はれるのでそれだけは連れて行つても差支はないと云ふ御沙汰があつてそこで九州へお連れになつた譯なのです。當時朝廷の法令は誠に都合悪く出来てゐましたので大きな子達をば皆別々に配流せられたのです。それと云ひ此と云ひいと悲しさの遺漸なくて御庭の梅を御覧になつて。

こちふかばにはひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ
と御咏みになりました。又宇多上皇に御哀訴になつては

ながれゆくわれはみくづとなりはてぬきみしがらみとなりてとごめよ。

とお咏みつかはしになりました。

なき事により斯く罪せられ給ふを、からくおぼしなげきて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれ心はそく思されて、

君がすむ宿のこすゑをゆくもかくるゝまでにかへりみしはや。(本文)

(解) 無實で此様に罪に落ちたことをひどく嘆かせられましたやがて山崎まで来てそこで御出家遊ばされました。だん／＼と馴れし都を後にして故郷遠くなるまゝに心ほそく思はれまして奥方の處へ宛

てたつもりで

君がすむ宿のこすゑをゆくもかくるゝまでにかへりみしはや。
とお咏みになりました。

又播磨の國におはしつきて、明石のうまやと云ふところに、御やごりせしめ給ひて、うまやのをさの
いみじう思へるけしきを御らんじて、つくらしめ給へる詩、いとかなし。

驛長無驚時變改。 一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしましつきて、あはれに心ほそく思さるゝ夕、をちかたに所々けふりたつを御覧じ
て、

夕されば野にも山にもたつけふりなげきよりこそもねまさりけれ。(本文)

(解) 又播磨の國にお着きになつて明石のうまやに御泊りになつてその長が大さう意外らしい面持を
御覧じては

驛長驚く無れ時の變改。 一榮一落は是春秋。

とよまれました。

斯ていよ／＼筑紫の配所にお着きになつて或晩殊に物あはれな夕暮の景色を御覧になつて

夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそもねまさりけれ
とお詠みになりました。

又雲のうきてたゞよふを御らんじても、

山わかれとびゆく雲のかへりくるかげ見る時ぞなほたのまるゝ。

さりとも、世をおぼしめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までもきよき心は月ぞてらさむ。

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし給はめどこそはあめれ。まことにおどろおどろしきことは、さるものにて、かくやうの歌や詩などをさへ、いとなだらかに、故々しういひつづけ給ふと、見きく人々あさましく、あはれにも、まもりゐたり。物の故知りたる人なども、むげに近くゐよりて、ほかめせず見聞くけしきどもを見て、いよ／＼はへて物をくり出すやうに、いひつゝくる程ぞ、まことにけうなるや。繁樹涙を拭ひつゝ興じゐたり。(本文)

(解) 又浮雲の漂うてゐるのを御覧になつては

いつか我身もあのやうに都に歸る日もあらう。

どの意をおよみになりました。一時に此様に罪におちても亦浮ぶ瀬もあらうと思召してのことでした

らう。又月のあかるい一夜

我心元來一点の汚れなし。明月心あらばそれこれを照覽せよ。

どの心を歌はれました。誠にそのお歌の通りで公が純潔の心は人は知らずとも月の神様日の神様だけは御存じであつたらうと思ひます。

(以下は作者の地の文)

「これはまあ驚くべく記憶の確かなことは勿論、こんな歌や詩までもよくも流暢に話しつつづけたもんだ」と見聞く一座はあきれて世繼の顔を見つめてゐた。相當有識の人らしい者までも無闇とつめかけて熱心に傾聴する様を見とつていよ／＼張合がついてまるで物を繰り出すやうに滔々と語りつづける有様まことに面白げである。繁樹はあまりの感興に涙さへ出してゐた。

筑紫におはします所の御門も、かためておはします。大貳のゐところは、はるかなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御らんじやられけるに、又、いとちかく、観音寺と云ふ寺の、ありければ、かねの響をきこしめして、つくらせ給へる詩ぞかし。

都府樓纒看瓦色。 観音寺只聽鐘聲。

これは文集白居易、遺愛寺鐘歌枕聽。香爐峯雪撥簾看といふ詩にも、まささまにつくらしめ給へり

ごこそ、むかしのはかせどもは申しけれ(本文)

(解) 筑紫に在つてはいつも門をしめて謹慎幽居してゐられました。太宰府の役所は大分間があるけれども屋根の瓦などがほのく見わたるますし又近くに観音寺の鐘樓から無常を告げる鐘の音が響きますのでその二つをとりあはせて

都府樓は纔に瓦の色を見。観音寺は只鐘の聲を聴く。

ごよまれましたが此はかの唐の白樂天が

遺愛寺の鐘は枕を歌てて聴き。香爐峯の雪は簾を撥げて看る。

と詠んだ詩にもまさつて上手に作られてあるごむかしの學者たちは申してをります。

かの筑紫にて九月十日、菊の花を御らんじけるついでに、まだ京におはしましたし時、九月のこよひ内裏にて、菊の宴ありしに、このおとごつくらしめ給へりける詩を、みかどかしこく感じ給ひて、御衣たまはせ給へりしを、筑紫に下らしめ給へりければ、御らんするにいとゞ、そのをりおぼしめし、いでてつくらせ給ひける。

去年今夜侍_三清涼_一。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在_レ此。捧持毎日拜_三餘香_一。

この詩いごかしこくつくられたりと人々かんじ申されき。(本文)

(解) 九州で九月十日菊の花を見られた序にまだ京に居られた時丁度今宵宮中で菊見の酒宴を催された時公が作られた詩をば天皇は非常に御ほめになつて褒美に御衣を下されましたのを今此筑紫のはてにしてその御衣を見るにつけて萬感胸に溢れて「去年の今夜」の詩をお作りになりましたが此詩も亦大さう人々の感歎する處となつてをります。

其一二 鎌倉室町文學

鎌倉室町文學の主なる作品としては鎌倉時代の軍記物語と室町時代の謠曲狂言とがある。

軍記物語はかの王朝の物語が源平時代に入つて急に武装したものである。漢語佛語の雄勁体と國文の優婉体とを巧みに折衷して勇士の奮闘振や名將の陣立や父子兄弟君臣夫婦の義理と人情公義と恩愛とを寫し戰擾爭奪の慘禍を一讀の間に髣髴せしむるは此種得意の筆致となつてゐる。

謠曲は室町時代に發達した「能」と云ふ武家式樂の臺詞である。其修辭法はつづれの錦のやうに古歌古句の流暢なるものつぎ合せで一面から見ると木に竹をついだやうなところが又餘りに非寫實的で千里の道も一二行の道行で済ましたところなどがありわざとらしいロマンチックな作意が見わすいてゐるやうな嫌がないがかうした美辭麗句とアンナ悠暢な能の舞踊とに一日の歡を盡くした室町情調は現代の焦躁に對してよいコンツラストと謂ふべきである。

狂言、くはしくは間の狂言と云ふ。能の悲劇的なものにはさまつて滑稽諧謔の所作事を演じて觀衆の肩のこりを直したものでここに謂ふ狂言とはそれにつかふ臺詞である。此とて其着想も極めて荒唐無稽なものであるが併し我邦で變にもはれにも唯一の喜劇とも謂ふべく加ふるにその用語は當時の俗語

其まゝであるから言語學史の上から觀ても決して輕視すべきものではない。

以上三種の文學の外繼承文學ではあるが兼好の隨筆徒然草と著者は不明だが後鳥羽天皇から後醍醐天皇に至るまでの歴史を取材した増鏡と北畠親房が兵馬倥傯の間に筆を執つた神皇正統記と南朝の遺臣翁が筆、吉野拾遺とは随分現時に於ても愛讀されてゐるからここにもその佳章の幾分を掲ぐることにした。

隱岐の御幸 (増鏡)

先帝は今日、津の國のこや野の宿といふ處につかせ給ひて、夕づく夜、ほのかにをかしきをながめおはします。

命あればこやの軒端の月もみつまたいかならむゆく末の空。

こや野より出でさせ給ひて、武庫川、神崎、難波、住吉など過ぎさせ給ふとて、御心のうちにおぼすすちあるべし。廣田の宮のわたりにても、御輿ごごめて、拜み奉らせたまふ。あしやの里、すすめの松原、布引の瀧など、御覽じやらるゝも、ふるき御幸ごも、おぼしいでらる。生田の森をば、とはで過ぎさせたまひぬめり。湊川の宿につかせ給へるに、中務宮は、こやのの宿におはします程、間近く

聞き奉らせ給ふも、いみじうあはれに悲し。宮、

いとせめてうき人やりの道ながらおなじとまりと聞くぞうれしき。

福原の島より、宮は御船に奉る。御門は和田のみさき、菟藻川をうちわたして、須磨の關にかゝらせたまふ。かの行平の中納言が、「關ふきこゆる。」といひけむは、浦よりをちなるべし。あはれに御覽じわたさる。源氏の大将の、「なくねにまがふ。」と、のたまひけむ浦なみ、今もげに、御袖にかゝるこゝちするも、さまざま御涙のもよほしなり。

播磨の國へつかせ給ひて、しほや、たるみといふ所をかしきを、問はせたまへば、「さなむ。」と奏するに、「名を聞くより、からき道にこそ。」このたまはせて、さしのぞかせたまへる御さまかたち、ふりがたくなまめかし。けちかきかざりは、あはれにめでたうもと思ひ聞ゆべし。大くら谷といふところ、少し過ぐるほどにぞ、人麿のつかはありける。明石の浦をすぎたまふに、嶋がくれゆく船ども、ほのかに見わて、あはれなり。

野中のしみづ、二見の浦、高砂の松など、名ある所々御らんじわたさるゝも、かゝらぬ行幸ならば、をかしうもありぬべけれど、よろづかきくらす御みだり心に、御目とまらぬも、我れながら、いたうくんじにけるかなとおぼさる。いと高き山の峰に、花おもしろく咲きつづきて、白雲をわけゆく心

ちするも艶なるに、都の事かすく思し出でらる。

花はなほ浮世もわかすさきてけりみやこも今やさかりなるらむ。

十七日、美作の國におはしましつきぬ。御心ちなやまして、この國に、二三日やすらはせたまふほど、かりそめの御やどりなれば、物深からで、候ふかざりのものゝふども、おのづからけちかく見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君も、おもほしつづくる事ありて、

あはれとはなれも見らむわが民を思ふこゝろは今もかはらず。

おはしますに續きたる軒のつまより、煙の立ちくれば、「いほりにたける。」と、うち誦んせさせ給へるも、艶なり。

よそにのみ思ひぞやりし思ひきやたみの籠をかくて見むとは。

廿一日、雲清寺といふ所にて、いとおもしろき花を折りて、忠顯少將奏しける。

かはらぬを形見となしてさく花の都はなほものばれにける。

御かへし。

色も香も變らぬしもぞうかりけるみやこの外の花のこするは。

又、小山の五郎とかやいふ武士に、おなじ花をやるこて、少將、

うきたびと思ひははてじ一枝の花のなさけのかゝるをりには。
かくて、なほおはしませば、來し方は、そこはかどかすみわたりて、あはれに遠くもきにけるかな、
と日數にそへて、都のいとど隔たりはつるも、心ほそうおぼさる。ほのかに咲初むと見わし花の梢さ
へ、日數も、山も、重なるにそへて、うつろひまさりつゝ、登り下るつづらをりに、いと白く散りつ
もりて、むらぎわたる雪のこゝちす。

花の春また見むこのかたきかな同じ道をばゆきかへるとも。

いとかたしとおほすものから、猶、さりともたひらかにだにあらば、おのづから、御本意遂ぐるや
うもありなむなど、御心もて、慰めおほすもはかなし。

久米のさら山といふところ、越わさせたまふとて、

聞きおきしくめの皿山越ゆかむ道とはかねて思ひやはせし。

吉野の宮 (吉野拾遺)

先帝の御時、世の中うつりかはりもできて、吉野の假宮にわたらせ給ひ、うかりし年も事のさわざの
中にくればてて、春たつといふばかりなる御節會のさまも、いと悲し。きさらぎの半ば過ぎゆくほど
に、御庭の櫻のやう／＼咲出でたるを御覽せさせ給ひて、勾當内侍に仰せられる御歌、

こゝにても雲のさくら咲きにけりたゞかりそめの宿とおもへど。

同じ御時、山のさくらをながめさせ給ひて、勾當内侍に、「折ふしのうつりかはるにこそ。昔の歌に、

おしなべてこのめもはると見ぬしよりはなになりゆくみよし野の山。

とよみつる時は、この山をまだ見ざりき。今はまたこゝに住みなれて、その折ふしの戀しくおもひ出
でらるゝはいかに。」と宣はすれば、ともに打泣き給ひて、

いにしへをしのぶなみだはみよし野のよしのの山のはなのしたつゆ。

と奏し給へば、いといたう、あはれがらせ給ひけり。誠にかぎりなきなみだのいとしくこそ見ね侍
りけれ。折ふし雁の通りければ、おなじ内侍に、「心なく雁こそかへれ。」とのたまはせ給ひければ、

雁がねにわが身をなさばみよし野の花も見すててかへらざらまし。

同じ内侍に、故郷の妹の君のかたより、「山のうちの御住居おもひやられて、いとかなしうこそ。」とあ
りける御文の返事に、

春は花秋はもみちをみよし野の山のかひあるすまひとをしれ。

同じ御時、五月雨のいと久しう降りつゝきたりけるころ、かんだちめあまた御前にさもらひ給ひて、
御遊のおはしましけるに、實世卿の、「川音高きさみだれに、いはもと見ねぬ瀧のけしきこそこよなう。」

と申させ給ひければ、「さもこそあらめ、空さへはれなば。」とのたまはせて、その明の日、とりあへず
行幸ありけるに、観音堂のほとりまでわたらせ給ひけるに、空のけしきいとおそろしくなりて、
又かきくらしのをつくが如くふりいでければ、御堂にしばらく立ちやすらはせ給ひて、

こゝは猶丹生のやしろに程ちかしいのらば晴れよさみだれの空。

と詠せさせ給ひければ、時にとりて晴れけるのみかは、日影うらゝかになりて、それより降らざりけ
り。

帝徳のいみじうわたらせ給へるを、人々もたのしくおもひあひけるに、同じ八月の初め頃より、秋
霧におかされさせ給ひけるが、かねて時をもしろしめしけるにや、同じき十五日の夜、親王を左大臣
經忠公の亭にうつし奉らせたまひ、三種の御寶を譲りおはしまし、御行末のこといとこまやかに仰せ
おかれて、御劔と法華經とを左右の御手にものし給ひ、いざよひの月ごともに、雲がくれさせ給ひけ
るに、つきしたがひ奉りし人々は、たゞやみちにまよふこゝちなんし給ひける。

御すがたをあらため奉りて、如意輪寺の御堂のうしろのかたにをさめ奉り、御おくりして人々はかへ
り給ひけれども、さらに人ごちもなかりければ、御廟の前に泣きあかして、しのゝめ過ぐるほどを
まちて、かしらおろし、かしこき御影のあたり近く、草の庵をむすびて、なき御跡までつかうまつり

けるに、その長月の十日あまりの月、いどさやかに見ゆるに、むかしの御事などおもひ出でて、

いまははや忘れはつべきいにしへをおもひいでよとすめる月かな

といひて、すこしまごろみけるに、御廟の前に百官袖をつらねてなみる給へるを、おぼつかなくおも
ひて、資朝卿のよろづはからはせ給ひておはします御袖をひかへて、問ひ奉るに、「こゝにては舊都に
程遠くして、御本意をどげさせ給はん御はかりごともなりがたければ、龜山の仙洞に行幸ならせ給へ
るにこそあれ。」とのたまひもあへぬに、御屏のひらき給へるに見奉れば、そのきはの御姿にて、玉の
みこしにめされければ、伶人樂を奏し、百官供奉し奉りけると見てうち驚きけるに、松吹く風に音楽
のなほきこゆる物から、いつゝの色の雲御廟よりいでて、北のかたへ長うたなびきて見ゆるに、さら
になみだもごいまらで、御影も今はこゝにおはせぬにやと、いどかなしくて過し侍りけり。
ほど経て、おなじき夜に舊都にいます夢窓和尚の夢に、君龜山の舊都に行幸ならせ給ひて、群臣とご
もに宴させ者へると見給ひて、武家に心をあはせて御寺をいとなみ給へるよし傳へ聞きてけるに、
今さらのやうにおもひ出でられて、みな袖をしばり侍りき。

人臣の道 (神皇正統記)

凡そ王土に生れて、忠を致し、命を捨つるは、人臣の道なり。必ず、これを身の高名と思ふべからず

されど、後の人を勵し、その跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下として、きほひ争ひ申すべきにあらぬにや。まして、させる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから危うするはしなれど前車の轍を見ることは、まことにありがたきならひなりけむかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して、身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

鳥羽院の御代にや、「諸國の武士の、源平の家に屬することを停むべし」といふ制符、たび／＼ありき源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜りて、諸國のつはものを徴し具しけるに、近代となりて、やがてかたはるゝやから多くなりしによりて、此の制符を下されにき。果して、今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりけり。

この頃の諺には、一度軍にかけあひ、或は家の子、郎従、節に死ぬるたぐひもあれば、「わが功におきては、日本國を賜へ」もしは、「半國を賜るとも足るべからず」などぞ申すめる。まことにさまで思ふ事にはあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしどもなり、また朝威のころ／＼しさも推し量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり」ともいへり。あからさまにも、君を蔑なげにし、人に驕おごることはあるまじき事にこそ。「堅き氷は、霜をふむよりいたる」ならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのは

じめ心、詞を慎まざるより出でゑるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心のあしくなりゆくを、末世とはいへるにや。昔、許由といふ人は、帝堯の國を傳へむとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父さうふこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らざりき。その人の五臟六腑の變るにあらじ、よく思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ、行末の人の心、おもひやるこそあまされ。大かた、おのれ一身は、愚に誇るども、萬人の怨を残すべきことをば、なごかへりみざらむ。君は萬姓の主にてましませば、かぎりある地をもちてかぎりなき人に頼たせたまはむことは、推してもはかり奉るべし。もし一國づつを望まば、六十六人にてみなふさがりなむ。一郡づつといふども、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬の人はよろこばじ。いはんや日本の半を心ざし、みながら望まば、帝王はいづくを知らせたまふべきにか、かゝる心の萌して、言葉にも出で、面にも恥づる色のなきを、謀叛のはじめとはいふべきなり。昔の將門の、比叡山に登りて、大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけむ。昔は人の心正しくして、將門に見も懲り、聞きも懲りけむを、今は人々の心、かくのみなりにたれば、此の世はいよ／＼衰へぬるにや。

漢の高祖の天下をとりしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑と

いふぞ。中にも、張良は高祖の師として、「籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するは、この人なり」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留どいひて、すこしきなる所を望みて封せられにけり。あらゆる功臣、おほく滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き世のことぞかし頼朝の時までも、文治のころにや、奥の泰衡を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が先陣にて、その功すぐれたりければ、五十四郡のうち、いづくをも望むべかりけるに、長岡郡とて、きはめたる少なき所を望み賜りけりぞ。これは人に廣く賞をも行はしめむためにや。かしこかりけるをのこにこそ。

舊都の月 (平家物語)

六月九日の日、新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど今の都は繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。秋もやう／＼半ばになり行けば、福原の新都にまし／＼ける人々、名所の月を見んとて、或は源氏の大将の昔の蹤をしのびつ、須磨より明石の浦づたひ淡路の追門をおし渡り、繪島が磯の月を見る。或は白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂、尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり。舊都に残る人々は、伏見、廣澤の月を見る中にも、徳大寺の左大臣實定の卿はふるき都の月を戀ひて、八月十日あまりに福原よりぞ上り給ふ。

何事も皆變りはてて、稀に残れる家は、門前草深くして庭上露滋し。蓬が柚、淺茅が原、鳥のふしごと荒れ果てて、蟲のこゑ怨みつゝ、黃菊、紫蘭の野邊とぞなりにける。今故郷の名残とては、近衛河原の大宮ばかりぞまし／＼ける。大将その御所にまわり、まづ隨身を以て、總門を敲かせらるれば内より女房の聲にて「誰ぞや、蓬生の露うち拂ふ人もなきところに。」と答むれば、「これは、福原より大将殿の御のぼり候ふ。」と申す。「さはべらば總門は、錠のさゝれて候ふぞ、東の小門より入らせ給へ。」と申しければ、大将、「さらば。」とて、東の小門よりぞ參られける。大宮は御つれ／＼に、昔をや思召し出でさせ給ひけん、南面の御格子上げさせ、御琵琶あそばされけるところに、大将つと參られたれば、暫く御琵琶をさし置かせ給ひて、「夢かや、現か、これへ、これへ。」とぞ仰せける。源氏の宇治の巻には、優婆塞の宮の御女、秋の名残を惜しみつゝ、琵琶を調べて夜もすがら、心をすまし給へるに、有明の月の出でけるを、猶足らずや思しけん、撥にて招き給ひけんも、今こそ思召し知られければ、小侍従と申す女房も、この御所にぞ侍はれける。大将この女房をよび出でて、昔今の物語ごもし給ひて後、小夜もやうやう更け行けば、ふるき都の荒れゆくを今様にこそ諒はれけれ。

ふるきみやこそ

きて見れば、

あさちが原とぞ

なりにける。

月のひかりは

くまなくて、

あきかせのみぞ

身にはしむ。

とおしかへし／＼三反謠ひすまされたりければ、大宮をはじめ奉りて、御所中の女房たち、皆袖をぞ濡らされける。さる程に、夜もやう／＼明け行けば、大將暇申して福原へぞ歸られける。

忠度の都落の事 (平家物語)

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけむ、侍五騎童一人、わが身ともにひた兜、七騎とつてかへし、五條の三位俊成の卿のもとにおはして見給へは、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名のり給へば、落人歸り來れりて、其内さわざあへり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、みづから高らかに申されけるは、「これは三位殿に申すべき事あつて、忠度が參つて候。たとひ門をばあけられずとも、このきはまで立ち寄り給へ。申すべきことの候」と申されたりければ、俊成の卿「その人ならば苦しかるまじあけて入れ申せ」とて、門をあけて對面あり。この體何となう物あはれなり。

薩摩守申されけるは、「先年申し承つてより後は、ゆめ／＼疎略を存せずとは申しながら、この二三箇年は、京都のさわぎ、國々の亂れ出で來、あまつさへ當家の身の上にかかりなつて候へば、常に參りよることも候はず。君すでに帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日はやつきはて候。それにつき候

ひては、撰集の御沙汰あるべきよし、承つて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らうと、存じ候ひつるに、かかる世の亂れ出で來て、その沙汰なく候條、たゞ一身のなげきと存候。この後、世しづまつて撰集の御沙汰候は、これに候ふ巻物の中に、さりぬべき歌候は、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しと存候は、遠き御守とこそ、なり參らせ候はむすれ」とて、日頃詠みおかれたる、歌どもの中に、秀歌とおぼしきを、百餘首書きあつめられたりける巻物を、今はとて打立たれける時、これを取つて持たれけるを、鎧の引合より取り出でて、俊成の卿に奉らる。

三位これを開いて見給ひて、「かかる忘れがたみどもを賜り候ふ上は、ゆめ／＼疎略を存じまじう候。さてもたゞ今の御わたりこそ、なさけも深う、あはれも殊にすぐれて、感涙おさへがたうこそ候へ」とのたまへば、薩摩守「屍を山野にさらさばさらせ。うき名を西海の波に流さば流せ。今は浮世に思ひおくことなし。さらば暇申して」とて、馬に打乗り、兜の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後を、遙に見送つて立たれたれば、忠度の聲とおぼしくて、「前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳す」と高らかに、口ずさみ給へば、俊成の卿も、いとどあはれにおぼれて、涙をおさへて入り給ひぬ。その後世しづまつて千載集を撰せられるに、忠度のありし有様、いひおきしことの葉、今更思ひいでて、あはれなりけり。件の巻物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、その身勸勤の人なれ

ば、名字をばあらはされず故郷の花と云ふ題にて、よまれたりける歌一首ぞ、「よみ人知らず」と入れられる。

さいなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山櫻かな。

その身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずといひながら、うらめしかりしことどもなり。

落花の雪 (太平記)

俊基朝臣は先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下りたまひしかども、様々に陳じ申されし趣、實にもと赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、専ら隠謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて關東へ送られたまふ。再犯赦さざるは法令の定むるところなれば、何と陳すとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひまうけてぞ出でられける。

落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着てかへる嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも旅寝となればものうきに、恩愛のちぎり浅からぬわが故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし九重の帝都をば今を限りと顧みて、思はぬ旅に出でたまふ心の中ぞあはれなる。

憂きをばとめぬ逢阪の關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱。沖を遙に見わたせば、鹽ならぬ海

にこがれ行く身をうきふねの浮き沈み。駒もどいろと踏みならす勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみちや、世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふかどあはれなり。

時雨もいたくもる山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くるみちを過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見わかす。物を思へば夜の間にもおいそものり、下草に、駒を留めて顧みる故郷を雲や隔つらん。番場、醒ヶ井、柏原、不破の關屋は荒果てて、猶もるものは秋の雨。いつかわがみのをはりなる熱田の八劍伏し拜み、沙干に今やなるみがた。かたむく月に道見わて明けぬ暮れぬと行く道の末はいづこととほたふみ、濱名の橋の夕沙に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふぐれの晩鐘鳴れば、今はとて池田の宿に着きたまふ。

旅館の燈幽かにして鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶わて天龍川をうち渡り、さやの中山越ね行けば、白雲路を埋み来て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつゝ、二度越ねし跡までも、うらやましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日巳に亭午にのほれば、餉進らす程とて輿を庭前に昇き止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし谷に依りて、光親卿關東へ召下されしが此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水。 汲下流而延齡。

今東海道菊川。 宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川のおなじながれに身をやしづめん。

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷓首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田、藤枝にかゝりて岡邊の岡真葛畏枯れて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越ね行けば、葛かづらいと茂りて道もなし。昔業平の中將の住所を覓むとて、東の方に下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも斯くやと思ひ知られたり。清見潟を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいと涙を催され、向ひはいづこみほが崎。興津、蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見たまへば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見わた、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や淺き、船見ぬ、おりたつ田子のみづからも浮世を遶る車返。竹の下道行きなやむ足柄山の巔より大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き

給ひけれ。

兒島高德 (太平記)

明くれば三月七日、千葉介貞胤、小山五郎左衛門、佐々木佐渡判官入道道譽、五百餘騎にて路次を警固仕つて、先帝を隱岐國へ遷し奉る。供奉の人とは一條頭大夫行房、六條少將忠顯、御介錯は三位殿御局ばかりなり。其の外は皆甲冑を鎧ひて弓箭を帶せる武士ども、前後左右を打圍み奉りて、七條を西へ東洞院を下り御車を輓らすれば、京中の貴賤男女、小路に立雙びて、「正しき一天の主を下して流し奉る事の淺猿さよ。武家の運命今に盡きなむ」と憚る所なく云ふ聲巷に満ちて、(只赤子の母を慕ふが如く)泣き悲みければ、聞くに哀を催して、警固の武士も諸共に、皆鎧の袖をぞぬらしける。櫻井の宿を過ぎさせ給ひける時、八幡を伏拜み、御輿を昇きすすませ、二度帝都還幸の事をぞ御祈念有りける。八幡大菩薩と申すは、應神天皇の應化、百王鎮護の御誓新なれば、「天子行在の外までも、定めて擁護の御眸をぞ廻さるらむとたのもしく」こそ思召しけれ。湊川を過ぎさせ給ふ時、福原の京を御覽せられて、「平相國清盛が四海を掌に握りて、平安城を此の卑濕の地に遷したりしかば、幾程も無く亡びしも、偏に上を犯さむとせし侈の末、果して天の爲に罰せられしぞかし」と思召し慰む端となりけり。印南野を末に御覽じて須磨の浦を過ぎさせ給へば、昔源氏の大將の此の浦に流され、三

年の秋を送りしに、『波只此處もとに立ちし心地して、涙落つとも覺ぬに枕は浮くばかりに成りにけり』と、旅寢の秋を悲みしも理なり』と思召され、明石の浦の朝霧に、遠く成り行く淡路方、寄せ來る浪も高砂の、尾上の松に吹く嵐、跡に幾重の山川を、杉坂越えて美作や、久米の佐羅山さら／＼に今は有るべき時ならぬに、雲間の山に雪見わて遙に遠き峯あり。御警固の武士を召して、山の名を御尋ねあるに、『是は伯耆の大山と申す山にて候ふ』と申しければ、暫く御輿を止められ、内證深心の法施を奉らせ給ふ。或時は難唱抹過茅店月、或時は馬蹄踏破板橋霜一行路に日を窮めければ、都を御出有つて十三日と申すに、出雲の見尾の湊に着かせ給ふ。爰にて御船を艤して、渡海の順風をぞ待ち給ひける。

其の比、備前國に、兒島備後の三郎高德と云ふ者あり。主上、笠置に御座しましし時、御方に參じて義兵を揚げしが、事未だ成らぬ先に、『笠置も落され、楠木も自害したり』と聞わしかば、力を失ひてもだしけるが、『主上隠岐國へ遷させられ給ふ』と聞きて、二心無き一族どもを集めて評定しけるは、『志士、仁人無_レ求_レ生_レ以_レ害_レ仁_レ有_レ殺_レ身_レ以_レ爲_レ仁_レといへり。されば、昔衛の懿公が北狄の爲に殺されて有りしを見て、其の臣に弘演と云ひし者、之を見るに忍びず、自ら腹を掻き切つて、懿公が肝を己が胸の中に收めて、先君の恩を死後に報いて失せたりき。見_レ義_レ不_レ爲_レ無_レ勇_レいざや臨幸の路次に參

り會ひ、君を奪ひ取り奉つて大軍を起し、縦ひ戸を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へむ』と申しければ、心ある一族ども、皆此の議に同せり、『さらば、路次の難所に相待ちて、其の隙を伺ふべし』とて備前と播磨との境なる舟坂山の巔に隠れ臥し、『今や／＼』とぞ待ちたりける。臨幸餘りに遅かりければ、人を走らして之を見するに、警固の武士、山陽道を経ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり、遷幸を成し奉りける間、高德が支度相違してけり。『さらば、美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。此處にて待ち奉らむ』とて、三石の山より直達_{ナサチカヒ}に道もなき山の雲を陵ぎて、杉坂へ着きたりけるに、『主上早や院の庄へ入らせ給ひぬ』と申しけるあひだ、力無く、此處より散々に成りけるが、『せめても此の所存を上聞に達せばや』と思ひける間、微服潛行して、時分を伺ひけれども、然る可き隙も無かりければ、君の御坐ある御宿の庭に、大いなる櫻木有りけるを押し削りて、大文字に一句の詩をぞ書き附けたりける。

天_ナ莫_{カレ}空_{クニ}勾_{コウ}踐_{セン}。時_ニ非_ズ無_ニ范_{ハン}蠡_{レイ}。

御警固の武士ども朝に之を見附けて、『何事を如何なる者が書きたるやらむ』とて讀みかねて、則ち上聞に達してけり。

徒然草

五四

第十九段

おりふしの移りかはるこそ、物ごとにあはれなれ。ものゝあはれは秋こそまされど、人ごとにいふれど、それもさる物にて、今ひときは、心もうきたつものは、春の景色にこそあんめれ。鳥の聲なども、殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌むいづる頃より、やゝ春ふかく、霞みわたりて、花もやう／＼景色だつ程こそあれ。折しも雨風打つゝきて、心あわたしくちりすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづに唯心のみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ。なほ梅の匂ひにぞ、いにしへの事も、たちかへり、戀しう思ひ出でらるる、山吹のきよげに、花のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきことおほし。灌佛の頃、祭の頃、わか葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも、人の戀しさも、まされど人のおほせられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめ吹く頃、早苗さる頃、水鶏の叩くなんど心細からぬかは、六月の頃、あやしき家に、夕顔のしろじろ見へて、蚊遣ふすぶるもあはれなり。六月ばらへ、又をかし。七夕まつるこそなまめかしけれ。やう／＼夜寒になる程、雁なきてくる頃、萩の下葉色づく程、わさ田刈りほすなんど、とりあつめたることは、秋のみ

ぞおほかる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞければみな、源氏物語枕草紙なんどに、事ふりにたれど、おなじこと、又今更にいはいはじにもあらず。おほしき事いはぬは、腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬がれの景色こそ、秋にはおさ／＼をさるまじけれ。汀の草に紅葉のちりとごまりて、霜いと白うおける朝、遣水より煙のたつこそをかしけれ。年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる、すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けくすめる、廿日あまりの空こそ、心ほそき物なれ。御佛名荷前の使立つなんどぞ、あはれにやんごとなき公事ごもしげく、春のいそぎにとり重ねて、もよほし行はるゝ様ぞいみじきや。追灘より四方拜に續くこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松ごもともして夜半過ぐるまで、人の門叩きはしりありきて、何事にかあらん事事しく罵りて、あしを空にまごふが、曉方よりさすがに音なくなりぬること、年の名残も心細けれ。なき人のくる夜とて、魂まつる業は、此頃都にはなきを、あづまのかたには、なほすることにてありしこそ、あはれなりしか。かくてあけゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見ねど、ひきかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま松たてわたして、はなやかに、うれしげなるこそ、またあはれなれ。

第二十五段

五六

あすか川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、樂しび、かなしび、ゆきかひて、はなやかなりしあたりも、人住まぬ野らごなり、かはらぬすみかは、人あらたまりぬ。桃李もの言はねば、誰と共にか昔を語らん。

第三百三十六段

花は盛に、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくゑしらぬも、猶あはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢、散りしほれたる庭なんごこそ、見所おほけれ。歌の詞がきにも、花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければとも、さはることありて、まからでなんごも書けるは、花を見てご云へるに、劣れる事かは。花の散り月の傾くを、慕ふならひはさる事なれど、ごにかたくななる人ぞ、此枝かの枝ちりにけり。今は見ごころなしなごはいふめる。

第四百七十五段

世にはこゝろぬ事の多きなり。ともある事にはまづ酒を勸めて、しる飲ませたるを興とする事、いかなるゆゑもこゝろぬす。飲む人の顔いと堪へがたげに、眉をひそめ人めをはかりて、捨てんとし逃げんとするを、とらへて引きごめて、すゝろに飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりて

をこがましく、息災なる人も、目の前に大事の病者となりて、前後も知らずたふれふす。祝ふべき日などは淺ましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、物食はずに酔ひふし、生をへだてたるやうにして昨日の事覺わす。おほやけ、わたくしの大事をかきて、煩ひとなる。人をしてかかるめを見する事、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かく辛きめにあひたらん人、ねたくくちをしと思はざらんや。ひごの國にかゝる習ひあめりと、これらになき人事にて、傳へ聞きたらんは、怪しく不思議に、おぼれぬべし。人のうへにて見たるだに心うし。思ひ入りたる様に、心にくしと見し人も、思ふごころなく笑ひののしり、詞おほく、ねばうしゆがみ、紐はづし、脛高くかゝげて、よういなき景色、日來の人とも覺えず。女は額髪はれらかにかきやり、まばゆからず、顔打さゝげて打笑ひ、盃もてる手にごりつき、よからぬ人は肴ごりて、口にさしあて、みづからも、くひたるさまあし。聲のかぎり出だして、をのゝ謠ひ舞ひ、年老いたる法師めし出されて、くろくきたなき身をかたぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへ、疎ましくにくし。あるはまた、我身いみじき事ごも、かたはらいたく言ひきかせ、或は酔ひなきし、下さまの人は、のりあひいさかひて、あさましくをそろし、止めがましく心うき事のみありて、はてはゆるさぬものごもおし取りて、椽より落ち、馬車より落ちて過しつ。物にも乗らぬきは、大路をよろほひ行きて、築土門の下なんごに向きて、ねもいはぬごごも

し散らし、年若い袈裟かけたる法師の、小童のかたをおさへて、聞ねぬ事どもいひつゝ、よろめきたるはいとかはゆし。かゝる事をして、此世も後の世も、益あるべきわざならば、いかゞはせん。世にては、あやまちおほく、財を失ひ病をまうく。百薬の長とはいへど、萬の病は酒よりこそおこれ憂を忘るとはいへど、酔たる人を過ぎにしうさをも、思ひ出でて泣くめる。後の世は人の智慧をうしなひ、善根を焼くこと、火の如くして、悪を増し、萬の戒を破りて、地獄におつべし。酒をとりて人に飲ませたる人、五百生が間、手なき者に生るところ、佛は説き給ふなれ。

謠 曲

其 一 高 砂

元 清 作

ワキ次第「今をはじめの旅衣、日もゆくするぞ久しき、詞」そもくは是は九州肥後の國、阿蘇の宮の神主、友成とはわが事なり、われいまだ都を見ず候ふほどに、此度思ひたち、都に上り候ふ、又よき次なれば、播州高砂の浦をも、一見せばやと存じ候ふ、道行「旅末はるくくの都路を、けふ思ひたつ浦の波、舟路のどけき春風も、いく日來ぬらん跡末も、いさ白雲のはるくくと、さしも思ひし播磨がた、高砂

の浦に着きにけり。

シテツレ一壁「高砂の松の春風ふき暮れて、尾上の鐘もひやくなり、ツレ」波は霞の磯がくれ、二人「音にうしほの満干なれ、シテヤシ」誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、過ぎ來し世々は白雪の積りくつて老の鶴の、ねぐらに残る有明の、春の霜夜の起き居にも、松風をのみ聞き馴れて、心を友と菅菴の、思ひを述ぶるばかりなり、二人歌「おどづれば、松に事問ふ浦風の、落葉衣の袖そへて、木蔭の塵を搔かうよ、所は高砂の、尾上の松も年ふりて、老の波もよりくるや、木の下蔭の落葉かく、なるまで命ながらへて、猶いつまでか生の松、それも久しき名所かな、ワキ詞「里人をあひまつどころに、老人夫婦きたれり、いかに是なる老人に、尋ねべきことの候ふ、シテ詞「こなたの事にて候ふか、何事にて候ふぞ、ワキ「高砂の松とは、いづれの木を申し候ふぞ、シテ「唯今木蔭を清め候ふこそ、高砂の松にて候へ、ワキ「高砂住の江の松に、相生の名あり、當所と住吉とは、國をへだてたるに、何とて相生の松とは申し候ふぞ、シテ「仰せの如く、古今の序に、高砂住の江の松も相生の、やうに覺れどあり、さりながら此尉は、津の國住吉のもの、是なる姥こそ當所の人なれ、知る事あらば申させ給へ、ワキ「ふしぎや見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國をへだて、住むといふはいかなる事やらむ、ツレ「うたての仰せ候ふや、山川萬里を隔つれども、たがひに通ふ心づかひ

の、妹脊の道は遠からず、シテ「まづ案じても御覽せよ、シテツレ」高砂住の江の松は、非情のものだにも、相生の名はあるぞかし、ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は松もろとも此年まで、相生の夫婦となるものを、ワキ「いはれを聞けばおもしろや、さて／＼さきに聞わつる、相生の松の物語を、所にいひおくいはいはなきか、シテ「昔の人の申し、は、是はめでたき世のためしなり、ツレ」高砂といふは、上代の萬葉集のいにしへのぎ、シテ「住吉と申すは、いま此御代に住み給ふ延喜の御事、ツレ」松とは盡きぬ言の葉の、シテ「榮ねは古今あひ同じと、シテツレ」御代をあがむるたどへなり、ワキ「よく／＼聞けばありがたや、今こそ不審春の日の、シテ「光やはらぐ西の海の、ワキ「松の色そろひ、シテ「春も、ワキ「のごかに、地「四海波しづかにて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや、あひに相生の、松こそめでたかりけれ、げにや仰ぎても、言もおろかや斯かる世に、住める民とてゆたかなる、君のめぐみぞありがたき。

ワキ詞「なほ／＼高砂の、松のめでたきいはれ、くはしく御ものがたり候へ、地ク「それ草木こゝろなしとは申せども、花實の時をたがへず、陽春の徳をそなへて、南枝花はじめて開く、シテサシ「然れども此松は、そのけしきとこしなへにして、花葉時を分かす、地「四つの時至りても一千年の、いろ雪のうち深く、又は松花のいろ十かへりとも云へり、シテ「かゝるたよりを松が枝の地「言の葉草の露

の玉、心をみがく種となりて、シテ「生きとし生けるもの毎に、地「敷島のかげによるとかや、ワセ「しかるに長能が言葉にも、有情非情のその聲、みな歌にもるゝ事なし、草木土砂風聲水音まで、萬物のこもる心あり、春の林の東風にうごき、秋の虫の北露になくも、みな和歌の姿ならずや、中にも此松は、萬木にすぐれて十八公の、よそほひ千秋の緑を爲して、古今の色を見ず、始皇の御爵にあづかるほどの木なりとて、異國にも本朝にも、萬民これを賞翫す、シテ「高砂の尾上の鐘の音すなり、地「曉かけて霜はおげども、松が枝の葉色は同じ深みどり、立ちよる陰の朝夕に、かけども落葉の盡きせぬは、まことなり松の葉の、散りうせすして色は尙ほ、正木のかづら長き世の、たどへなりける常盤木の、中にも名は高砂の、末代のためしにも、相生の松ぞめでたき。

ロンギ地「げに名を得たる松が枝の、老木の昔あらはして、その名を名のり給へや、シテツレ「夫婦と現じ來りたり、地「ふじさやさては名ごころの、松の奇特をあらはして、シテツレ「草も木も、地「わが大君の國なれば、いつまでも君が代に、住吉にまづ行きて、あれにて待ち申さむと、名波のみぎはなる、海人の小舟にうち乗りて、追風にまかせつゝ、沖の方に出でにけりや、沖の方にいでにけり、ワキ歌「高砂や此浦舟に帆をあげて、月もろともに出でしほの、波の淡路の島蔭や、遠くなるをの沖すぎて、はや住の江に着きにけり。

後シテ「われ見ても久しくぬ住吉の、岸の姫松いくよ経ぬらん、むつましと君は知らずや瑞籬の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すしめ給へ宮つこたち、地「西の海あをきが原の浪間より、シテ「あらはれ出でし神松の、春なれやのこんの雪の朝香がた、地「玉藻かるなる岸蔭の、シテ「松根によつて腰をすれば、地「千年の緑手に満てり、シテ「梅花を折つて頭にさせば、地「二月の雪ころもに落つ。

ロンキ地「ありがたの影向や、月すみよしの神遊び、御影を拜むあらたさよ、シテ「げにさまの舞姫の、聲もすむなり住の江の、松影もうつるなる、青海波とはこれやらん、地「神と君との道すぐに、都の春にゆくべくはシテ「それぞ還城樂の舞、地「さて萬歳の、シテ「小忌衣、地「さすかひには悪魔を拂ひ、をさむる手には壽福をいただき、千秋樂は民を撫で、萬歳樂にはいのちを延ぶ、相生の松風颯々の聲ぞたのしむ。

其二 熊野

元 清 作

ツキ詞「是は平の宗盛なり、さても遠江の國、池田の宿の長をば熊野と申し候ふ、久しく都にごいめおきて候ふが、老母のいたはりごと、度々いごまを乞ひ候へども、此春ばかりの花見の友とおもひ、留めおきて候、いかに誰かある、トモ詞「御前に候ふ、ツキ「熊野きたりてあらば此方へ申し候へ、トモ「畏

つて候ふ。

ツレ次第「夢の間をしき春なれや、咲く頃花を尋ねん、サシ「是は遠江の國、池田の宿、長者の御内に仕へ申す、朝顔と申す女にて候ふ、詞「さても熊野、ひさしく都に御入り候ふが、此程老母の御いたはりごと、度々人を御のぼせ候へども、更に御下りもなく候ふほごに、此度は朝顔が御むかへのぼり候道行「此程の旅の衣の日もそひて、いく夕ぐれの宿ならん、夢もかすそふかり枕、あかしくらして程もなく、都に早く着きにけり、詞「急ぎ候ふ程に、是ははや都に着きて候ふ、是なる御内が、熊野の御入り候ふ所にてありげに候ふ、まづ案内を申さばやと思ひ候ふ、いかに案内申し候ふ、池田の宿より朝顔が参りて候ふ、それ／＼御申し候へ。

シテサシ「草木は雨露のめぐみ、養ひわては花の父母たり、況んや人間に於てをや、あら御心もこなや何ごか御入候ふらん、ツレ詞「池田の宿より朝顔がまわりて候ふ、シテ詞「なに朝顔と申すか、あらめづらしや、さて御いたはりは、何ご御入りあるぞ、ツレ「以ての外に御入り候ふ、是に御文の候ふ、御らん候へ、シテ「あらうれしや、先々御ふみをみうするにて候ふ、あら笑止候ふ、此御ふみのやうも、頼みすくなう見わて候ふ、ツレ「左様に御入りて候ふ、シテ「此上は朝顔をもつれて参り、又此ふみをも御目にかけて、御暇を申さうするにてあるぞ、こなたへ來り候へ、誰か渡り候ふ、トモ詞「誰にて渡り候

ふぞ、や熊野の御まゐりにて候ふ、シテ「わらはが参りたる由、御申し候へ、トモ」心得申し候ふ、いかに申し上げ候ふ、ゆやの御参りにて候ふ、ワキ詞「こなたへ來れど申し候へ、トモ」畏つて候ふ、此方へ御参り候へ、シテ「いかに申し上げ候ふ、老母のいたはり以ての外に候ふとて、此度は朝顔にふみをはせて候ふ、びんなう候へども、そと見参にいれ候ふべし、ワキ」なにと故郷よりのふみと候ふや、見るまでもなし、それにてたからかによみ候へ。

シテ「甘泉殿の春の夜の夢、心をくだくはしとなり、驪山宮の秋の夜の月、をはりなきにしもあらず、末世一代、教主の如來も生死の掟をば、遁れ給はず、過ぎにし二月の頃、申し、如く何とやらん、此春は年ふりまさる朽木櫻、ことしばかりの花をだに、待ちもやせじと心よわき、老の鶯あふ事も、涙にむせぶばかりなり、たゞ然るべくは、よきやうに申し、しばしの御いとまを賜はりて、今一度まみねおはしませ、さなきだに、親子は一世のなかなるに、おなじ世にだにそひ給はずば、孝行にもはづれ給ふべし、唯かへすくも命の内に、いまひと度見まわらせたくこそ候へとよ、老いぬれば去らぬ別れのありといへば、いよく見ま、ほしき君かなと、ふることも思ひ出の、涙ながら書きとむ、地、そも此歌と申すは、在原の業平の、其身は朝にひまなきを、長岡に住み給ふ老母の、よめる歌なり、さてこそ業平も、さらぬ別れのなくもがな、千代もといのる子の爲と、よみし事こそあはれ

なれ、シテ詞「今はかやうに候へば、御暇を賜はり東に下り候ふべし、ワキ詞「老母のいたはりはさる事なれども、さりながら、この春ばかりの花見の友、いかでか見すて給ふべき、シテ」御詞をかへせばおそれなれども、花は春あらば、今に限るべからず、是はあだなる玉の緒の、ながき別れとなりやせん唯御暇を賜はり候へ、ワキ「いや／＼左様に心よわき身に、任せてはかなふまじ、いかにも心をなぐさめの、花見の車同車にて、ともに心をなぐさまんど、地「牛飼車よせよとて、是も思ひの家のうち、はや御出とす、むれど、心はさきに行きかぬる、足よわ車の力なき、花見なりけり。

シテ「名も清き、水のまに／＼とめくれば、地「河は音羽の山櫻、シテ「東路とても東山、せめて其方のなつかしや、地「春前に雨あつて、花の開くる事早し、秋後に霜なうして、落葉遅し、山外に山有つて、山盡きす、路中に道おほうして、道きはまりなし、シテ「山青く山白くして、雲來去す、地「人樂しみ人愁ふ、是れ皆世上の有様なり、誰かいつし春の色、げに長閑なる東山、地「四條五條の橋の上老若男女貴賤都鄙、いろめく花衣袖をつらねて、ゆくすゑの雲かど見わた、八重一重さく九重の花ざかり、名に負ふ春のけしきかな。

ロンキ地「河原おもてを過ぎゆけば、いそぐ／＼の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よとふしをがむ、シテ「観音も同座あり、闍提救世の方便、あらたにたらちねをまもり給へや、地「げにや守りの

末すぐに、頼む命はしら玉の、愛宕の寺もうちすぎぬ、六道の辻とかや、シテ「實におそろしや此道は冥途に通ふなるものを、心ほを鳥部山、地「煙のするもうす霞む、聲も旅雁のよこたはる、シテ「北斗の星のくもりなき、地「御法の花も開くなる、シテ「經書堂は是かどよ、地「其たらちねを尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば、シテ「春のひま行く駒の道、地「はや程もなく是ぞこの、シテ「車宿り、地「馬留めこ、より花車、おりるの衣はりまがた、しかまのち路清水の、佛の御前に念誦して、母の祈誓を申さん。

ワキ詞「いかに誰かある、トモ詞「御前に候ふ、ワキ詞「熊野はいづくにあるぞ、トモ「いまだ御堂に御座候ふ、ワキ「何とて遅なはりたるぞ、急いでこなたへと申し候へ、トモ「畏つて候ふ、いかに朝顔に申し候ふ、はや花の本の御酒宴の始まりて候ふ、急いで御参りあれどの御事にて候ふ、其よしおほせられ候へ、ツレ「心得申し候ふ、いかに申し候ふ、はや花の本の御酒宴の始まりて候ふ、急いで御参りあれどの御事にて候ふ、シテ「何とてはや、御酒宴の始まりたるぞ申すか、ツレ「さん候ふ、シテ「さらば参らうするにて候ふ。

シテ詞「のうく皆に近う御参り候へ、あらおもしろの花や候ふ、今を盛りと見て候ふに、なにぞて御當座などをも、あそばされ候はぬぞ、ク「實にや思ひうちになれば、色ほかにあらはる、地「よしやよしなき世のならひ、歎きてもまた餘りあり、シテサシ「花前に蝶舞ふ紛々たる雪、地「柳上に鶯飛ぶ片々たる金、花は流水に随つて香の來る事とし、鐘は寒雲を隔て、聲の至る事遅し、クセ「清水寺の鐘の聲、祇園精舎をあらはし、諸行無常の聲やらん、地主権現の花の色、娑羅双樹のことわりなり、生者必滅の世のならひ、實にためしある粧ひ、佛も元は捨てし世の、なかばは雲に上見ぬ、鷲のお山の名を残す、寺は桂の橋柱、立ちいで、峯の雲、花やあらぬ、初櫻の祇園林下河原、シテ「南をはるかにながむれば、地「大悲擁護の薄霞、熊野権現のうつります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋、又花の春は、清水の唯たのめ頼もしき、春も千々の花盛り、シテ「山の名の音羽、あらしの花の雪、地「深き情を人やる、シテ詞「妾御酌にまわり候ふべし、ワキ詞「いかに熊野、一さし舞ひ候へ、地「深き情を人やる。

シテ詞「のうく俄に村雨のして、花の散り候ふはいかに、ワキ詞「げにくく村雨のふり來たつて、花を散らし候ふよ、シテ「あら心なの村雨やな春雨の、地「ふるは涙か櫻花、ちるを惜しまぬ人もある、ワキ詞「よしありげなる、ことばの種とりあげみれば、いかにせん都の春もをしけれど、シテ「なれしあづまの花や散るらん、ワキ詞「げに道理なり、あはれなり、早々暇ごらすぞ東に下り候へ、シテ「何御いとまご候ふや、ワキ詞「中々の事、とくく下り給ふべし、シキ「あらうれしやたうどやな、是れ觀音

の御利生なり、是までなりやうれしやな、地「是までなりやうれしやな、かくて都に御供せば、またもや御意のかはるべき、たゞこのまゝに御いとまと、言ふつけの鳥がなく、あづま路さして行く道のやがてやすらふ逢坂の、關の戸さしも心して、明け行く跡の山見わた、花を見すつる雁金の、それは越路我はまた、あづまに歸る名残かな。

其三 羽衣

元 清 作

ワキ「聲」風早の三穂の浦回をこぐふねの、浦人さわぐ浪路かな、サレ「是は三保の松原に、はくれうご申す漁夫にて候ふ、レ」萬里の高山に、雲忽におこり、一樓の明月に、雨はじめて晴れり、げにのぞかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつゞく朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身のながめにも、心そらなるけしきかな、歌「わすれめや、山路をわけて清見がた、はるかに三保の松原に、たちつれいざやかよはん、風向ふ雲のうき浪たつと見て、釣せで人やかへらん、待てしはし春ならば吹くものぞげき朝風の、松は常盤の聲ぞかし、浪は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな、ワキ詞「われ三保の松原に、浦のけしきをながむる所に、虚空に花ふり音楽きこね、靈香四方に薫す、是たゞごご、思はぬ所に、これなる松にうつくしき衣か、れり、よりてみれば、色香たへにして、常の衣にあらず、いかさまとりてかへり、古き人にもみせ、家の寶となさばやと存じ候ふ、シテ詞「のうそ

の衣はこなたのにて候ふ、何しにめされ候ふぞ、ワキ詞「是はひろひたる衣にて候ふ程に、とりて歸り候ふよ、シテ「それは天人の羽衣とて、たやすく人間にあたふべき物にあらず、本のごとくにおき給へ、ワキ「そも此衣の御ぬしとは、さては天人にてましますかや、さらば末世の奇特にとめおき、國のたからとなすべきなり、衣をかへす事あるまじ、シテ「かなしやな、羽衣なくては飛行のみちも絶わ、天上にかへらんごとも叶ふまじ、さりごとは返したび給へ、ワキ「此御詞をきくよりも、いよ／＼はくれう力を得、本より此身は心なき、天の羽衣とりかくし、かなふまじごて立ちのけば、シテ「今はさながら天人も、はねなき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし、ワキ「地にまた住めば下界なり、シテ「どやあらん、かくやあらんごかなしめど、ワキ「はくれう衣をかへさねば、シテ「力及ばず、ワキ「せんかたも、地「涙の露の玉鬘、かざしの花もしを／＼と、天人の五衰も目のまへに、みわたあさましや。

シテ「天の原ふりさけみれば霞たつ、雲路まごひてゆくへしらすも、地「住み馴れし空にいつしかゆく雲の、うらやましきけしきかな、迦陵頻伽のなれ／＼し聲、今さらにわづかなる雁金の、かへりゆく天路をさけばなつかしや、千鳥鷗の沖つ浪、ゆくかかへるか春風の、空に吹くまでなつかしや。

ワキ詞「いかに申し候ふ、御姿を見たてまつれば、あまりに御痛はしく候ふ程に、衣をかへし申さうするにて候ふ、シテ詞「あらうれしやこなたへ給はり候へ、ワキ「しばらく承り及びたる、天人の舞樂たゞ

今こゝにて、奏し給はば衣をかへし申すべし、シテ「うれしやさては、天上にかへらん事をわたり、此よろこびに迎もさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり、たゞ今こゝにて奏しつゝ、世のうき人につたふべし、さりながら衣なくては叶ふまじ、さりてはまづかへし給へ、ワキ「いや此衣をかへしなば、舞曲をなさで其まゝに、天にやあがり給ふべき、シテ「いやうたがひは人間にあり、天に偽りなき物を、ワキ「あらはづかしや、さらばとて羽衣をかへしあたふれば、シテ「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨にうるほふ花の袖、ワキ「一曲をかなで、シテ「舞ふとかや、地「東遊の駿河舞、此ときやはじめなるらん。

地「それ久堅のあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界をさだめしに、空はかぎりもなければとて、久かたの空とは名付けたり、シテサシ「然るに月宮殿のありさま、きよくふのしゆりどこしなへにして、地「白衣黒衣の天人の、数を三五に分つて、一月夜々のあま少女、奉仕をさだめ役をなす、シテ「我も數ある天少女、月のかつらの身をわけて、假に東のするが舞、世につたへたる曲とかや、ワセ「春霞たなびきにけり久かたの、月のかつらも花やさく、げに花かづら色めくは、春のしるしかやおもしろや、天ならでこゝも妙なり天津風、雲の通ひち吹きとぢよ、少女の姿しばしとままりて、此松原の春のいろを、三保がさき月清みがた、富士の雪いづれや春のあけぼの、たぐひ浪も松風も、のどか

なる浦のありさま、そのうへ天地は、何をへだてん玉垣の、内外の神の御するにて、月も曇らぬ日の本や、シテ「君が代はあまの羽衣まれに来て、地「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌、聲そへてかすくの、しやうちやくきんくご孤雲の外に、満ちくゝて落日のくれなゐは、蘇命路の山をうつして緑は浪に、浮島が拂ふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる、シテ「南無歸命月天子、本地大勢至、地「東遊の舞の曲、シテワカ「あるひは天つみそらの緑の衣、地「または春立つかすみの衣、「色香も妙なり少女の裳、左右左さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、なびくもかへすも舞の袖、地「東あそびのかすくに、その名も月のいろびとは、三五夜中のそらに又、満願真如の影となり、御願圓滿國土成就、七寶充滿のたからをふらし、國土に是をほごし給ふ、さるほどに、時うつつて天の羽衣、浦風にたなびきたなびく三保の松原、うき鳥が雲のあしたか山や、富士の高嶺かすかになりて、天つみそらの霞にまぎれてうせにけり。

其四 小督

古名 仲國 氏 信 作

ワキ詞「これは高倉の院に仕へ奉る臣下なり、さても小督の局と申して、君の御寵愛の御座候ふ、中宮は又まさしき相國の御息女なれば、世の憚りをおぼしめしけるが、小督の局暮に失せ給ひて候ふ、君の御歎き限りなし、晝は夜の大殿に入り給ひ、夜は又南殿の床に明かさせ給ひ候ふ處に、小督の局の

御行方、嵯峨野のかたに御座候ふよし、聞しめし及ばれ、急ぎ彈正の大弼仲國を、めして小督の局の御ゆくへを、尋ねて参れとの宣旨にまかせ、唯今仲國が私宅へと急ぎ候ふ、いかに仲國の渡り候ふか
 シテ詞「誰にて渡り候ふぞ、ツキ」是は宣旨にて候ふ、さても小督の局の御ゆくへ、嵯峨野の方に御座候ふ由、聞しめし及ばせ給ひ、いそぎ尋ね出だし、此御書をあたへよとの宣旨にて候ふ、シテ「宣旨畏つて承り候ふ、さて嵯峨にては、如何やうなる處どか申し候ふ、ツキ」嵯峨にては、唯片折戸したる所こそ、聞しめされて候へ、シテ「左様の賤が屋には、片折戸と申す物の候ふ、今夜は八月十五夜にて候ふ間、琴ひき給はぬ事あらじ、小督の局の御しらべをば、よく聞き知りて候ふ間、御心安く思し召せと、委しく申し上げければ、ツキ」此よし奏聞申しければ、御威のあまり忝くも、寮の御馬を賜はるなり、
 シテ「時の面目畏つて、地」やがて出づるや秋の夜の、月毛の駒よ心して、雲井に翔れ時のまも、いそぐ心の行方かな。

ツレサシ「げにや一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲む事も、皆これ他生の縁ぞかし、ツレトモ」あからさまなる事ながら、馴れて程ふる軒の草、忍ぶたよりに賤の女の、目に觸れなる、世のならひ、あかぬは人の心かな、地「いざ／＼さらば琴のねに、立て、も忍び此思ひ、せめてや暫し慰むと、かきなす琴のおのづから、秋風にたぐへばなく虫の、聲も悲しみの、秋や恨むる戀や憂き、何をかくねる女郎花、

我も憂き世のさの身ぞ、人にかたるな此有様もはづかしや。

シテ「あら面白の折からやな、三五夜中の新月の色、二千里の外も遠からぬ、寂慮かしこき勅を受けて心もいさむ駒の足なみ、夜の歩みぞ心せよ、牡鹿なく此山里とながめける、地「嵯峨野の方の秋の空、さこそ心も澄みわたる、片折戸をしるべにて、名月に鞭を擧げて、駒を早め急がん、シテ「賤が家居の假なれど、地「もしやと思ひこ、かしこに、駒をかけよせ／＼て、ひかへ／＼聞けども、琴弾く人は無かりけり、月にやあくがれ出で給ふと、法輪に参れば、琴こそ聞わ來にけれ、峯の嵐か松風か、それかあらぬか、尋ぬる人の琴の音か、樂は何ぞと聞きたれば、夫を想ひて戀ふる名の、想夫戀なるぞうれしき。

シテ詞「うたがひもなき、小督の局の御しらべにて候ふ、やがて案内を申さうするにて候ふ、如何に此戸あけさせ給へ、ツレ」誰ぞや門に人音のするは、心得て聞き候へ、トモ「中々にどかく忍ばしあしかりなんど、まづ此扉を押しひらく、シテ「門さ、れては叶ふまじと、扉を押さへ、是は宣旨の御使、仲國これまで参りたり、そのよし申し給ふべし、ツレ」うつなやか、るいやしき賤が屋に、何の宣旨の候ふべき、門たがへにてましますか、シテ「いや如何に包ませ給ふとも、人目づゝみも洩れ出づる、袖のなみだの玉琴の、しらははかくれなきものを、ツレ」げにはづかしや仲國は、殿上の御遊の折々は、シテ

「笛仕れと召し出だされて、ッレ」馴れし雲井の月もかはらず、人も訪ひ来てあひにあふ、その糸竹の夜
 のこゑ、地「ひそかに傳へ申せこの、勅詔をば何とさは隔て給ふや、中垣の葎が下によしさらば、今宵は
 片敷の袖ふれて月に明かさん、地「處を知るも嵯峨の山、御幸たわにし跡ながら、千代のふる道たどり
 こし、ゆくへも君の惠ぞと、深き情の色香をも、知る人のみぞ花鳥の、音にだに立てよ東屋の、ある
 じはいざ知らず、調べは隠れよもあらし。

トモ調「仲國御目に懸からざらん程は、歸るまじきとて、あの柴垣の本に、露にしをれて御入候ふ、勅
 詔と申し痛はしさといひ、何とか忍ばせ給ふべき、こなたへや入れ参らせ候はん、ッレ調「げにわれも
 左様には思へども、あまりの事の心亂れに、身の置き所もしらねども、さらばこなたへと申し候へ、
 トモ「さらば此方へ御入り候へ、ッテ調「畏つて候ふ、勅詔に任せ是まで参りて候ふ、さてもかやうにな
 らせ給ひて、後は玉体おとろへ、寂慮なやましく見せ給ひて候ふ、せめての御事に御行方を、尋
 ねて参れとの宣旨を蒙り、辱くも御書を賜はつて、是まで持ちて参りて候ふ、おそれながら直の御返
 事を、賜はりて奏し申し候はん、ッレ「もとより辱かりし御惠み、およびなき身の行方までも、頼む心
 の水ぐさの、跡さへふかき御情、地「かはらぬ影は雲井より、猶殘る身の露の世を、憚りの心にも訪ふ
 こそ涙なりけれ、地「「げにや訪はれてぞ、身にしら玉のおのづから、ながらへて憂き年月も、うれ

しかりける住居かな、ッレサシ「たとへをしるも數ならぬ、身には及ばぬ事なれども、地「妹脊の道はへだ
 てなきかの漢王の其むかし、甘泉殿の夜の思ひ、たねぬ心や胸の火の、煙にのこる面影も、ッレ「見し
 は程なきあはれの色、地「なかくなりしちぎりかな、クセ「唐帝の古へも驪山宮の私語、洩れし始めを
 尋ぬるに、あだなるつゆの淺茅生や、袖に朽ちにし秋の霜、わすれぬ夢を訪ふあらしの、風のつてま
 で身にしめる心なりけり、ッレ「人の國までとぶらひの、地「哀を知れば常ならで、なき世を思ひのかす
 く、に、餘りわりなき戀心、身をくだきてもいやましの、戀慕のみだれなりとかや、是はさすがに同
 じ世の、頼みも有明の月の、都の外までも寂慮にかゝる御惠み、いともかしこき勅詔なれば、宿はと問
 はれて無し、とはいかい答へん。

ロンギシテ「是までなりやさらばとて、直のお返事たまはり、御暇申し立ち出づる、ッレ「月に訪ふ、宿り
 は假の露の世に、これや限りの御使ひ、思ひ出の名残ぞと、慕ひて落つるなみだかな、地「涙もよしや
 星合の、今は稀なる中なりと、ッレ「終に逢ふ瀬はほどあらし、むかへの舟車の、やがてこそ参らめど
 いへど名残の心とて、シテ「酒宴をなして糸竹の、地「聲すみわたる月夜かな、シテ「月夜よし、ツカ「こが
 らしに吹き、あはすめる笛の音を、地「ひきとむべき言の葉もなし、シテ「言の葉もなき君の御こゝろ
 地「われらが身までも物思ひに、立ち舞ふべくもあらぬ心、今は却りてうれしさを、何に包まん唐衣

ゆたかに袖うちあはせ、御暇申しそぐ心も、いさめる駒にゆらりとうち乗り、歸る姿のあとほるゝと、小督は見おくり仲國は、都へとてこそ歸りけれ。

其五 鉢はち木き

清 次 作

ワキ次「行方さだめの道なれば、來し方も何處ならまし、詞ことば是は一所不住の沙門にて候ふ、我此ほどは信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候ふほどに、まづ此度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候ふ、道行みちゆき信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡に着きにけり。

ワキ詞「急ぎ候ふほどに、上野の國佐野のわたりに着きて候ふ、あら笑止や、又雪の降り來りて候ふ、此所に宿を借らばやと思ひ候ふ、いかに此屋の内へ案内申し候ふ、ツレ詞「誰にてわたり候ふぞ、ワキ」是は修行者にて候ふ、一夜の宿を御かし候へ、ツレ「安き御事にて候へども、主の御留守にて候ふほどに、御宿は叶ひ候ふまじ、ワキ」さらば御歸りまで、是に待ち申さうするにて候ふ、ツレ「それはともかくもにて候ふ、妾は外面へ出でむかひ、此由を申さばやと思ひ候ふ。

ツレ「あゝ降つたる雪かな、如何に世にある人の面白う候ふらん、それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴毳くわんしやうを着て立つて徘徊すと云へり、されば今ふる雪も、もと見し雪にかはらねども、我は鶴毳

を着て、立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖せばき、細布衣ほそぬのころもぎ陸奥の、今日の寒さを如何にせん、あら面白からずの雪の日やな、あら思ひよらすや此大雪に、何とて是にたゝすみて御入り候ふぞ、ツレ「さん候ふ、修行者の御入り候ふが、一夜の御宿と仰せ候ふほどに、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうするよし、仰せ候ふほどに、是まで參りて候ふ、ツレ「扱その修行者は、いづくに渡り候ふぞ、ツレ「あれに御入り候ふ、ワキ」我等が事にて候ふ、いまだ日は高く候へども、餘りの大雪にて、前後を忘ぼろじて候ふほどに、一夜の宿を御かし候へ、ツレ「やすき御事にて候へども、あまりに見苦しく候ふほどに、御宿は叶ひ候ふまじ、ワキ」いや／＼見苦しきは、苦しからぬ事にて候ふ、ひらに一夜を御かし候へ、ツレ「留め申したくは候へども、我等夫婦さへ、住みかねたる体にて候ふほどに、中々御宿は思ひもよらぬ事にて候ふ、是より十八町あなたに、山本の里とてよき泊りの候ふ、日も暮れぬさきに、一足もはやく御出で候へ、ワキ」扱はしかど、おかしあるまじいにて候ふか、ツレ「御痛はしくは存じ候へども、御宿は參らせがたう候ふ、ワキ」あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ふ物かな。ツレ「あさましや、我等かやうに衰ふるも、前世ぜんせいの戒行かいぎやうつたなき故なり、せめてはかやうの人に、値遇申してこそ、後の世の便べんともなるべけれ、然るべくは御宿を參らせ給ひ候へ、ツレ詞「さやうに思しめさば、何とて以前には承り候はぬぞ、いや此大雪に遠くは御出で候ふまじ、某おつつきとめ申し候

ふべし、のうのう旅人、御宿參らせうのう、餘りの大雪に申す事も、聞ねぬげに候ふ、痛はしの御有様やな、もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行き方を失ひ、一所ひとところにたゞすみて、袖なる雪を打ち拂ひうち拂ひし給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや、駒とめて袖うちはらふ蔭もなし、佐野の渡りの雪の夕暮、かやうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野の渡り、地ち是は東路の、佐野の渡りの雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや、歌うたげに是も旅の宿、假初かひはつながら値遇の縁、一樹の蔭のやどりも、此世ならぬ契なり、それは雨の木蔭、是は雪の軒かき奮りて、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらん。

シテ調「いかに申して候ふ、お宿は申して候へども、何にても候へ參らせうする物も、なく候ふはいかに、ツレ調「折節これに、粟の飯の候ふほどに、苦しからずは參らせられ候へ、シテ「さらば其由申し候ふべし、いかに申し候ふ、御宿をば參らせて候へども、何にても參らせうする物もなく候ふ、折節これに、粟の飯のあるよし申し候ふ、苦しからずばきこし召され候へ、ワキ調「それこそ日本一の事に候ふ、賜はり候へ、シテ「のうきこし召されうすると仰せ候ふ、急いで參らせられ候へ、ツレ「心得申し候ふ、シテ「總じて此の粟と申す物は、古へ世にありし時は歌に讀み、詩に作りたるをこそ承りて候ふに今は此粟を以つて、身命しんみことを繼ぎ候ふ、げにや廬生が見し、榮花の夢は五十年、其邯鄲の假枕、一炊の

夢のさめしも、粟飯かしぐ程ぞかし、あはれやげに我もうちも寢て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、のう御覽せよかほごまで、地ち「住みうかれたる故郷ふるさとの、松風さむき夜もすがら、寢られねば夢も見ず、何思ひ出のあるべき。

シテ調「夜の更くるについて、次第に寒くなり候ふ、何をがな火に焚いて、あて參らせ候ふべきや、思ひ出だしたる事の候ふ、鉢の木を持ちて候ふ、之を切り火に焚いて、あて申し候ふべし、ワキ調「げにげに鉢の木の候ふよ、シテ「さん候ふ、某世にありし時は、鉢の木に好き數多木を、集めもちて候ひしを、かやうの体に罷りなり、いや／＼木すきも無用と存じ、皆人に參らせて候ふ、さりながら、今も梅櫻松を持ちて候ふ、あの雪もちたる木にて候ふ、某が秘藏にて候へども、今夜のおもてなしに、之を火に焚きあて、申さうするにて候ふ、ワキ「いや／＼是は思ひもよらぬ事にて候ふ、御心ざしはありがたう候へども、自然又お事世に出で給はん時の、御慰みにて候ふ間、中々思ひもよらす候ふ、シテ「いやとても此身は埋木の、花咲く世に逢はん事、今此身にてはあひがたし、ツレ「唯いたづらなる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、シテ「是ぞ誠に難行の、法の薪のこと思し召せ、ツレ「しかも此程雪ふりて、シテ「仙人に仕へし雪山せつざんの薪、ツレ「かくこそあらめ、シテ「我も身を、鳩捨人の爲めの鉢の木、切るごてもよしや惜しからじと、雪うち拂ひて見れば面白や、いかにせん先冬ふゆ木より、咲きそむる窓の梅の、

北面は雪封じて、寒きにも異木よりまづ先だてば、梅を切りや初むべき、見じといふ人こそうけれ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみに、今更薪になすべしと、かねて思ひきや、櫻を見れば春ごとに、花すこし遅ければ、此木やわぶると、心をつくし育てしに、今は我のみわびて、住む家櫻きりくべて、耕櫻になすぞ悲しき、シテ扱松はさしもげに、地枝をため葉をすかして、かゝりあれと植を置きし、其かひ今は嵐吹く、松はもとより煙にて、薪となるもことわりや、切りくべて今ぞ御垣守、衛士の焚く火はお爲めなり、よくよりてあたり給へや。

ワキ詞「近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候ふ、シテ御出でにより、我等も火にあたりて候ふ、ワキ」
 いかにも申し候ふ、主の御名字をば、何と申し候ふぞ、承りたく候ふ、シテ「いや某は、名字もなき者に候ふ、ワキ」何と仰せ候ふとも、唯人とは見給はず候ふ、自然の時の爲にて候ふ、なにの苦しう候ふべき、御名字を承り候ふべし、シテ「此上は何をかつゝみ候ふべき、是こそ佐野の源左衛門の尉常世が、なれの果てにて候ふ、ワキ」それは何とてかやうの、散々の体にはなり給ひて候ふぞ、シテ「其事にて候ふ、一族ごもに押領せられて、かやうの身となりて候ふ、ワキ」のうそれは何とて、鎌倉へ御上り候ひて、其御沙汰は候はぬぞ、シテ「連の盡くる所は最明寺殿さへ、修行に御出で候ふ上は候ふ、かやうにおちぶれては候へども、御覽候へ、是に武具一領長刀一ねだ、又あれに馬を一疋つないで持ちて候ふ

是は只今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも此具足、取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参り着到につき、さて合戦始まらば、地敵大勢ありども、一番に破つて入り、思ふ敵よりあひ、討ちあひて死なん、此身の此まゝならば、いたづらに飢につかれて死なん命、なんぼう無念の事さふぞ。

ロンギワキ「よしや身の、かくては果てし只頼め、我世の中にあらんほど、又こそ参り候はめ、暇申していづるなり、シテッレ「名残をしの御事や、始めはつゝむ我宿の、さも見苦しく候へど、しばしは留まり給へや、ワキ」留まる名残のまゝならば、扱いくたびか雪の日の、二人「空さへ寒き此暮に、ワキ」いづくに宿を狩衣、二人「今日はかり留まり給へや、ワキ」名残は宿にさまれども、いとま申して、二人「御出でか、ワキ」さらばよ常世、二人「また御入り、地」自然鎌倉に、御上りあらばお尋ねあれ、けうがる法師なり、かひくしくはなければども、公方の縁になり申さん、御沙汰捨てさせ給ふなど、いひすて、出船の共に、名残や惜しむらん。

後シテ「いかにあれなる旅へ、鎌倉へ勢の上るといふは誠か、何おびたしく上るさぞあるらん、東八個國の大名小名、思ひ思ひの鎌倉入り、さぞ見事にて候ふらん、白金物打つたる糸毛の具足に、金銀を展べたる太刀かたな、飼ひに飼うたる馬にのり、乗替中門きらびやうに、うちつれ／＼上る中に、

常世が常に替はりたる馬武具や、打物の物其ものに、あらざる氣色さぞ笑ふらん、さりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりはいさめども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや、地急げども弱きに弱き柳の糸の、シテ「よれによれたる瘦馬なれば、地うてどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひかけたり。」

ワキ「いかに誰かある、ツレ」御前に候ふ、ワキ「國々の軍勢どもは、皆々來りてあるか、ツレ」さん候ふ、悉く参りて候ふ、ワキ「其諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を着、さびたる長刀を持ち、痰せたる馬を自身ひかへたる、武者一騎あるべし、急いで此方へ來れと申し候へ、ツレ」畏つて候ふ、いかに誰かある、狂言「御前に候ふ、ツレ」君よりの御誼には、諸軍勢の中に、ちぎれたる具足を着、さびたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる、武者有るべし、急いで尋ねて御前へ、参れどの御事にて候ふ、狂言「畏つて候ふ、いかに申し候ふ、シテ」何事にて候ふぞ、狂言「いそいで御前へ御参り候へ、シテ」何と某に、御前へ参れと候ふや、狂言「中中の事、シテ」あら思ひよらすや、定めて人たがへにて候ふべし、狂言「いや／＼其方の事にて候ふ、其子細は諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者を、つれて参れどの御事にて候ふが、見申せば其方はど、見苦しき武者も候はぬ程に、扱て申し候ふ、急いで御参り候へ、シテ」何とたごへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に、参れと候ふや、狂言「中々の事、

シテ」扱は某が事にて候ふべし、畏つたると御申し候へ、狂言「心得申し候ふ。」

シテ「げに／＼是も心得たり、某が敵人謀叛人と申し上げ、御前に召し出だされ、頭を刎ねられん爲めな、よし／＼それも力なし、いで／＼御前に参らんと、大床さして見渡せば、地今度の早打に上りあつまる兵、さら星の如く並み居たり、さて御前には諸侍、其外數人並み居つ、目をひき指をさし、笑ひあへる其中に、シテ「横縫のちぎれたる、地ふる腹巻に錆長刀、やう／＼に横たへわるびれたる、氣色もなく参りて、御前にかしこまる。」

ワキ「詞」やあいかにあれなるは、佐野の源左衛門の尉常世か、是こそいつぞやの大雪に、宿かりし修行者よ、見忘れてあるか、いで汝佐野にて申せしよな、今にてもあれ鎌倉に、御大事あるならば、ちぎれたりとも其具足取つて投げ懸け、錆びたりとも其長刀を持ち、瘦せたりともあの馬にのり、一番に馳せ参すべきよし、申しつる言葉の、末を違へずして、参りたるこそ神妙なれ、先々今度の勢づかひ全く餘の義にあらず、常世が言葉の末、眞か偽か知らん爲めなり、又當參の人々も、訴訟あらば申すべし、理非によつて其沙汰いたすべき處なり、先々沙汰の始めには、常世が本領佐野の庄、三十餘郷かへし與ふる所なり、又何よりも切なりしは、大雪ふつて寒かりしに、秘藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし志をば、いつの世にかは忘るべき、いで其時の鉢の木は、梅櫻松にてありしよな、其返報

に加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇の庄、子々孫々に至るまで、相違あらざる
 自筆の狀、安堵に取り添へ給ひければ、シテ「常世は之を賜はりて、地」常世は之を賜はりて、三度頂戴
 仕り、これ見給へや人々よ、始め笑ひしどもがらも、是ほどの御氣色さぞ羨ましがるらん。
 地「扱國々の諸軍勢、皆御いとま賜はり、古郷へとてぞ歸りける、シテ「其中に常世は、地」其中に常世
 は、よろこびの眉を開きつゝ、今こそいさめ此馬に、うちのりて上野や、佐野の舟橋どりはなれし、
 本領に安堵して、歸るぞうれしかりける。

其六 俊

寛

一名 鬼界島 元 清 作

ワキ詞「是は相國に仕へ申す者にて候ふ、扱も此度中宮、御産の御祈りの爲めに、非常の大赦行なはる
 るにより、國々の流人赦免ある中にも、鬼界が島の流人の内、丹波の少將成經、平判官康頼二人、赦
 免の御使をば、某承つて候ふ間、唯今鬼界が島へと急ぎ候ふ。

成經康頼「神を硫黄が島なれば、願ひも三つの山ならん、サシ「是は九州薩摩、鬼界が島の流人の内、
 成經」丹波の少將成經、康頼「平判官入道康頼、二人二人が果にて候ふなり、われら都にありし時、熊野
 參詣三十三度の、歩みをなさんと立願せしに、其半にも數足らで、かゝる遠流の身となれば、所願も
 空しく早なりぬ、せめての事の餘りにや、此島に三熊野を勸請申し、都よりの道中の、九十九處の王

子まで、歌「ことごとく順禮の、神路に幣を捧げつゝ、こゝとても同じ宮居と、三熊野の浦の濱木綿ひ
 とへなる麻衣のしをるゝを、只其まゝの白衣にて、眞砂を取りて散米に、白木綿花の御扱して、神に
 歩みをはこぶなり。

シテ一聲

「後の世を待たで、鬼界が島守と、地」なる身のはての聞きより、シテ「聞き道にぞ入りにける、

サシ「玉兔晝眠る雲母の地、金鶏夜宿す不萌の枝、寒蟬古木を抱きて、鳴き盡して頭をめぐらす、俊
 寛が身の上知られて候ふ、康頼詞「あれなるは俊寛にてわたり候ふか、是までは何の爲めの、御出で
 にて候ふぞ、シテ詞「早くも御覽じごがめたり、道迎の其爲めに、酒を持ちて参りて候ふ、康頼「そも一
 酒とは、竹葉の此島にあるべきかと、立ちより見れば、やは水なり、シテ「是は仰せにて候へども、
 それ酒と申す事は、もとは是れ藥の水なれば、醴酒にてなご無かるべき、康頼成經「げに〜是は理な
 り、頃は九月、シテ「時は重陽、康頼成經「所は山路、シテ「谷水の、三人「彭祖が七百歳を經しも、心を汲
 みわし深谷の水、地「飲むからにげにも薬と、菊水の心の底も白衣の、ぬれてほす山路の菊の露のまに
 我も千年をふる心地する、配所はさてもいつまでぞ、春すぎ夏たけて、又秋暮れ冬の來るをも、草木
 の色ぞ知らするや、あら戀しの昔や、思ひでは何につけても、あはれ都にありし時は、法勝寺法成寺
 たゞ喜見城の春の花、今はいつしか引きかへて、五衰滅色の秋なれや、落つる木の葉の盃、のむ酒は

谷川の、流るゝもまた涙川、水上は我なる物を、物思ふ時しもは、今こそ限りなりけれ。

「早船の心になふ追風にて、舟子やいとゞいさむらん、調いかに此島に流され人の御座候ふか、都より赦免状を持ちて参りて候ふ、急いで御拜見候へ、シテ詞「あらありがたや候ふ、やがて康頼御覽候へ、康頼何々中宮御産の御祈りの爲めに、非常の大赦行はるゝにより、國々の流人赦免ある、中にも鬼界が島の流人の内、丹波の少將成経、平判官入道康頼二人赦免ある所なり、シテ「何とて俊寛をば讀み落し給ふぞ、康頼御名はあらばこそ、赦免状の面を御覽候へ、シテ「さては筆者のあやまりか、ツキ「いや某都にて承り候ふも、康頼成経二人は御供申せ、俊寛一人をば此島に残し、申せどの御事にて候ふ、シテ「こはいかに罪も同じ罪、配も同じ配所、非常も同じ大赦なるに、一人誓ひの網にもれて、沈みはてなん事はいかに、此ほどは三人一處にありつるだに、さも恐ろしく冷ましき、荒磯島にたゞ一人、離れて海士の捨草の、波の藻屑のよるべもなくて、あられん物かあさましや、歎くにかひも渚の千鳥、泣くばかりなるありさまかな、地ヶケ「時を感じては、花も涙をそゞぎ、別れを恨みては、鳥も心を動かせり、もごよりも此島は鬼界が島と聞くなれば、鬼ある所にて今生よりの冥途なりたとひ如何なる鬼なりと、此あはれなご知らざらん、天地を動かし鬼神も感をなすなるも、人のあはれなる物を、此島の鳥獸も、亡くは我を吊ふやらん、シテ「せめて思ひの餘りにや、地「さきに讀み

たる巻物を、又引き開き同じあどを、くりかへしくりかへし、見れどもくたゞ成経康頼と、書きたる其名ばかりなり、もしも禮紙にやあるらんと、巻きかへして見れども僧都とも俊寛とも、書ける文字は更になし、こは夢か扱も夢ならばさめよくと、理無き俊寛が有様を、見るこそあはれなりけれツキ「時刻うつりてかなふまじ、成経康頼二人ははや、御船に召され候へとよ、成経康頼「かくてあるべき事ならねば、よその歎きをふりすて、二人は船にのらんとす、シテ「僧都も船に乗らんとて、康頼の袂にとりつけば、ツキ「僧都は船にかなふまじと、さも荒けなく云ひければ、シテ「うたてやな公の私といふ事のあれば、せめては向ひの地までなりとも、情に乗せて給ひ給へ、ツキ「情も知らぬ舟子ども櫓權をふりあげ打たんとす、シテ「さすが命のかなしさに、又立ち歸り出船の、詞「ともづなに取りつき引きとむる、ツキ「舟人ともづな押し切つて、船を深みに押し出だす、シテ「せん方波にゆられながら、たゞ手を合はせて船よのう、ツキ「船よといへご乗せざれば、シテ「力及ばず俊寛は、地「もとの渚にひれふして、松浦佐用姫も我身にはよも増さじと、聲を惜しまず泣き居たり。

三人ロシギ「いたはしの御事や、我等都に上りなば、よきやうに申し直しつゝ、やがて歸洛はあるべし御心づよく待ち給へ、シテ「歸洛を待てよとの呼ばはる聲も、幽なる頼みを松蔭に、音を泣きさして聞きむたり、三人「聞くやいかにと夕波の、皆聲々に俊寛を、シテ「申しなほさばほごもなく、三人「かなら

す歸洛あるべしや、シテ「それは誠か、三人なかく」に、シテ「頼むぞよ頼もしくて、地待てよ」といふ聲も、姿も次第に遠ざかる、沖つ波のかすかなる、聲絶えて船影も人影も、消れて見えずなりにけり、あと消れて見えずなりにけり。

狂言

其一 萩大名

大名罷出たるは、隠も無い大名、此うち御前に詰めてあれば、心が何とやら屈して御ざる、太郎冠者を喚び出し、何方へぞ、遊山に参らうと存する、在るかやい、くわじや「御前に、大名、汝を喚び出すは別義では無い、何方へぞ遊山に行かうと思ふが何とあらう、くわじや「は、内々は御意無うても、申上うと存する所に、一段で御ざりませう、大名、好からうな、くわじや「は、大名、何と、西山東山は何時の事、様子の違ふた所へ行きたいが、何處もどが好からうな、くわじや「誠に御意の通り、西山東山は何時の事で御ざる、されば、何處もどが好う御ざりませうぞ、はア、思ひ付けて御ざる、是よりも下京邊に心やさかたな御方が御ざる、殊の外の庭好きで御座る、是への御遊山が好う御ざりませう、大名、おう是が一段好かる、それへ向けて行かうぞ、くわじや「は、乍去是へ御ざればお歌をなされねばなりませぬ大名、それは如何やうな事を讀むぞ、くわじや「三十一文字の言の葉を、傳へた事で御ざる、大名、あ、こ

りや、なるまいに、くわじや「は、申上まする、大名、何とした、くわじや「某上京邊を通つて御ざれば、若い衆の見物に御ざらうとあつて、萩の花に付て、匂づくろひをなされたを、聞いて参りまして御ざる、御前にをすへ(教へ)ませう、大名、やい、くわじや、其庭にも、萩の花が有らうかな、くわじや「殊に亭主好きまするのが、萩で御ざりまする、大名、ふん、其義ならば、急いでをすへ(教へ)い、くわじや「畏つて御ざる、七重八重、九重とこそ、思ひしに、ごへ咲き出づる、萩の花かな、と申事で御ざる大名、ふん、してそればかりか、くわじや「はア、大名「いや、是程の事ならば讀まう程に、急いで來い、くわじや「畏つて御ざる、大名「來い、やい、冠者、して、今の歌の云ひ出しは何であつたぞ、くわじや「忘れさつしやれて御ざるか、七重八重で御ざりまする、大名「おうそれちや、して其後は、くわじや「申殿様是ではなりますまい、大名「おう、なるまいわい、急いで戻れ、くわじや「申殿様、大名「何ちやくわじや「去乍、物によそへたら、覺わさつしやれませうか、大名「よそへ物によつて、覺わうぞ、くわじや「即扇の骨によそへませう、七重八重と申時に、七本八本廣げませう、九重と申時に、九本廣げませう、ごよ咲きと申時に、皆廣げませう、大名「おう、これは好いよそへ物じやわい、やい、して又其後が有るぞよ、くわじや「はア、これは猶よそへ物が御ざる、大名「それは何によそへるぞ、くわじや「即身共をば、臍脛ばかり伸び居つて、厚く析檻なされます、其脛をば、思ひ出さつしやれませう、大名「お

う、是が一段ちや、来い、くわじや「疾と御ざりました、即これで御ざります、それに待しやれませ、大名「やい、くわじや、亭主に、大名ちや程に是へ迎へに出よといへ、くわじや「畏つて御ざる、御亭、内に御ざるか、ていしゆ「いゑ、くわじや殿、何として御ざつたぞ、くわじや「其事で御ざる、たのうだ人が此方の庭を聞き及うで、見物にて御ざる程に、表へ迎ひに出さつしやれい、ていしゆ「心得まして御ざる、はつ、これは又見苦しい所へ、御腰掛けられうと御ざります、辱無うこそ御ざります大名やい、くわじや、ありや亭主か、くわじや「はア、大名「御亭、無案内におちやる、斯う通りまするていしゆ「はつ、大名「やい、太郎冠者、床机、くわじや「はつ、大名「やい、亭主に、是へ出られいといへ、くわじや「はつ、御亭是へ出さつしやれい、ていしゆ「畏つて御座る、大名「御亭々々、聞及うだりも、甚う庭が見事でおちやる、ていしゆ「はつ、此中は手入も致さぬによつて、甚う汚穢御ざります、大名「否々、さうもおちやらぬいの、なう御亭、彼の向ふな松は女松でおちやるか、男松でおちやるか、ていしゆ「いや、彼れは男松で御ざります、大名「ふん、甚う見事でおちやる、やい、冠者、見事なな、くわじや「はつ、大名「彼の左の方へすつと出た枝を見たか、くわじや「中々、見まして御ざる、大名「銘おくせい、引切てしんに立てうに、くわじや「は、大名「は、御亭、不案内におちやる、ていしゆ「これ、くわじや「何でか御ざるぞ、ていしゆ「いや、彼の殿様に仰しやれませうには、いづれもの、御腰

掛けられては、彼の萩の花に付けて、短冊を掛けさつしやる、殿様にも遊ばしませいと仰しやれい、くわじや「心得まして御ざる、申まする、大名「何とした、くわじや「亭主申まするのには、いづれも短冊をなされまする程に、花につけて、お歌をば詠まつしやれと申まする、大名「亭主には是へ出よといへ、くわじや「はつ、大名「御亭、只今は歌を詠めと仰しやる、久しう詠まぬが、何とおちやる、一つ詠まうかていしゆ「遊ばしませう、大名「斯うもおちやるか、七重八重九重どこを思ひしに、とへさき出づる、萩の花かな、亭主「あ、是は、いかう出来さつしやれて御座ります、大名「亭主、身は歌よみで居りやるいの、ていしゆ「あ、強う出来さつしやれて御座る、大名「やい、冠者、亭主が出来たて、甚う喜ぶわ、汝は何方ぞへ行け、暇を出す程に緩りと行て寛ろいで来い、くわじや「畏つて御座ります、ていしゆ「申殿様、大名「御亭、何でおちやるぞ、ていしゆ「只今短尺に書きまする、最一度吟じさつしやれませう、大名「おう、心得ておちやる、七重八重九重どこを思ひしに、とへ咲き出づる、出づる、いや、冠者奴は、ごごもどに居るでちやまでい、ていしゆ「申殿様、御歌に冠者はいりますまい、急いで後を詠まつしやれませい、大名「して、短かうおちやるか、ていしゆ「中々字が足りませぬ、大名「したらば、出づるを幾個も書いて置きやれ、ていしゆ「いや、それではなりません、大名「はて、冠者奴が、早う戻り居らいで、ていしゆ「申殿様、急いで詠まつしやれませい、大名「こゝな奴は、諸武士に手を掛居つて、

九二
惜い奴の、ていしゆ「でも、字が足りませぬ、大名「あ、思ひ付けたわ、亭主「何と、大名「ものごと、
ていしゆ「何と、大名「太郎冠者が向膳に某が鼻の先、ていしゆ「何でも無い事、疾言はしませ。

其二 酢

薑

はじかみ賣「罷出たるは、山城の國、薑賣で御ざる、又今日も商賣に、參らうと存する、夫商人とは、
足をばかり、聲をばかりに商はねばならぬと申、先是から喚ばりませう、はじかみこん「薑、罷出た
るは、和泉の國の酢賣で御ざる、又今日も商に參らうと存する、やれさて、一段の日和に出合せた
る事かな、先づ賣ませう、すこん、はじかみ「はじかみこん、す「すこん、はじかみ「やい其所な者、耳の
邊へ寄りて、何をつこんくと云ふぞ、す「やい、其所な者、お主は又、何をはじかまるくと云ふぞ
はじかみ「や、そちが何事を云ふたどまよ、此薑賣などには、甚う系圖のある物ぢや、す「何と云ふ
ぞ、其薑賣に系圖が有ると云ふか、はじかみ「中々有る、す「少と聞きたうおぢやるの、はじかみ「いや、
知らずば云ふて聞かせう、薑賣に黄金と云ふ事有る、其上薑などには、甚う系圖の多い物ぢやが、其
方が其酢などには系圖が有るまい、す「いや、酢にこそ系圖がおぢやれ、はじかみ「何ぢや、酢にも系圖が
有ると云ふか、す「中々おぢやる、はじかみ「や、少と聞きたうおぢやるの、す「お、中々、讀んできかしやう
が、して、位に負けたらば、其方は賣子になるか、はじかみ「をんも無い事、ごちらなりとも賣子にな

らうす、す「然らば、是へ寄つて聞かせませ、昔推古天皇の御時に、一人の酢賣、禁中を賣り廻る、
其時わうるん、酢賣々々どわうるん召されしが、すの門をするりと通り、簀子椽に直と立つておぢや
る、其時、透張障子をするりと明け、するくと御出あつて、好きの御酒を下された、一つたべ、二
つたべ、三つ目に御詠歌を下された、お主是を聞かうするよ、はじかみ「急いで聞かしやれ、す「住吉の
隅に雀が、巢を懸けて、さぞや雀は、住みよかるらん、と下された、是に増したる系圖は有るまい、賣
子にならせませ、はじかみ「先づ某もお聞きやれ、昔からく天皇の御時、薑賣と召されしが、から門を
からりと通り、から椽にかしこまる、其時わうるん、唐紙障子をからりと明けて、からくと御覽有
り、辛き御酒を下されたり、一つたべ、二つたべ、三つ目にお着とて、御歌を一首下された、是へ寄
つて聞かせませ、からし、から物、から木でたいて、からいりにせんと、下された、是に増したる系
圖は有るまい、お主賣子にならせませ、す「いやはや、是も餘程の系圖でおぢやる、去乍、するこ天
皇も、からく天皇も、位は同じ事、今からは、相商に參らうす、はじかみ「お、誠に、仰る通り、酢
のいる所には薑もいらうす、さ、先づ賣らせませ、何方向けて參らうす、す「真直に、行かせませ、
はじかみ「やア、某は烏丸通りへ參らうす、す「先づ賣らしませ、はじかみ「心得ておぢやる、はじかみこん
す「すこん、はじかみ「なうくと、彼れを見させませ、甚い紙見世でおぢやらぬか、彼れは昔唐紙でお

やる程にの、す「なう、側そばに積たんだは杉原でおちやる、はじかみ「ちぢやらしませ、此見世を見さしませす」はて好よい生物せいぶつ、はじかみ「彼れを見さしませ、唐のかくらがおちやるわいの、す「立物たてものは、水牛でおちやる、はじかみ「なう、此鏡を見さしませ、はれ、甚いい大竹でおちやるの、なう、皆唐竹でおちやる、す「あけをすつかと切りて、酢筒にしたらばおちやる、はじかみ「は、餘程におしやらいで、す「いや、思ふ事が、色外に表はるるとやらで、酢筒が欲しいと思ふ事ぢやによつて、申た事でおちやる、はじかみ「なう、餘程来ておちやる、す「此處は何處でおちやる、はじかみ「お番所へ着ておちやる、彼の桃を見さしませ、す「はれ、いかい桃でおちやる、はじかみ「彼れが皆唐桃でおちやる、す「なう、是を見さしませ、杏あんでおちやる、はじかみ「なう、程無う五條河原へ着いておちやる、時の物とて、やさしや、唐薯木からいもが、いかい事おちやる、す「なう、杉菜も丈比せくらべして居るわ、はじかみ「彼れ上を見さしませあれ子供がからかふわ、す「あれは角力すまひでおちやる、はじかみ「なう、あれ川上をからげて渡るわ、す「いや彼れは、裾を濡ぬらすまいが爲でおちやる、はじかみ「なう、清水寺しみずじには、おちこなりとやら、かしきなりとやらが有るといふが、其方そなたは、望はおちやらぬか、す「いや身共も參らう、はじかみ「程無う着いておちやる、す「なう、おちこなりとやらは、すぎたと申すわ、はじかみ「其義でおちやるならば、某はせんに、一いくで、からと笑ふて、歸らうと存する、す「いや、某も、住家へ向け

てすつこも。

其三 末ひろがり

大名罷出たるは隠れも無い大名、太郎冠者たろうくわじやあるか、冠者かむ御前ごまへに、大名ねん念無う早かつた、汝を喚び出すは別なる事で無い、明日はいづれも申入うと思ふが、何とあらうぞ、冠者かむ誠は御意無うても申上うと存する處に、一段で御さりませう、大名「好からうな、冠者かむはつ、大「さうあれば引出物ひきだすものには何をか出さうな、冠「されば何が好う御さりませうぞ、大「やい思ひ付けた、下からは、世が計らはれぬ物ぢや某は末ひろがりを出さうと思ふが、何とあらうぞ、冠「好う御さりませう、大「汝は大義ながら上方へ上り、急いで求めて參れ、冠「畏つて御座る、大「急げ、冠「はつ、扱もく某が頼うたる者は、立板に水を流すやうに物を吩咐ふしけられます、先急いで參らう、左右ひだりみぎ申うちに、都さうに御ざります、やれ扱失念の致した、末廣屋を存せぬが、何と致さうぞ、ゑい、欲い物は呼ばはる態に見わて御ざる某もこれから呼ばはりませうぞ、末廣買はう、す「罷出たるは、洛中に住居する、心も直すに無い者で御ざる、何者やらごんご申程に、さはたつて(觸れて)見ませうす、なう、其方は何をわつばとおしやるぞ、冠「其のことで御ざる、田舎者で御ざれば、末廣屋を存せぬに依て、斯様に申事で御ざる、す「なう其方は、末廣と云ふ物をお見知りやつたか、冠「なう都人とも見ねぬ、知つたれば

之を買はうといふ、すり「なう〜」、誤りました、某は末廣屋の亭主でおりやるに依つて懸、に問ふで
 おりやる、冠「はて扱仕合な事で御ざる、して、末廣の出来合は御座るか、すり「中々御ざる、冠「急で
 見せさつしやれ、すり「心得て御ざる、夫に待たつしやれ、冠「は、すり「やれ扱、賣らうとは申て御ざるが
 何を賣りませうぞ、思ひ付て御ざる、これに傘が御ざる程に、之を持って賣りませう、なうなう、田舎
 人それに御ざるか、これ〜、冠「や、は、此が末廣で御ざるか、すり「中々、冠「どれ見せさつしやれ
 すり「こね（如是）御ろん（御覽）ぢやれ、冠「は、誠（まこと）に廣げさつしやれたれば、はて甚末廣（いかに）で御ざる、
 乍去（さなから）、頼うだ人が注文のおこされて御ざる程に、是に合ふたらば買ひませう、すり「さらば讀まつしや
 れ、冠「先地紙（まづ）好くとして御ざる、すり「これ〜、地紙好くとは、此紙の事（この）でおりやる、師走狐（しはすけ）の如
 く、こん〜と云ふ程張つて御ざる、冠「骨磨（ほこ）きと御ざる、すり「これ〜、骨磨きとは此骨（この）の事、信濃
 木賊（まじ）をかけて磨いたに依つて滑々（すべ）致す、冠「要元締（かた）と御ざる、すり「かなめ元締（かた）とは、斯う廣げて、
 此金（この）でもつてちつと締るに依つて、此處（この）の事で御ざる、冠「繪（え）は戯繪（ざれ）として御ざる、すり「ふん、これ
 これ田舎人（この）へ寄らつしやれい、ゑい、冠「なう〜、其方（そなた）は田舎人（この）ぢやと思ふて、打擲（うちな）めさるか
 すり「いや、打擲（うちな）ではおぢやらぬ、足下（こなた）と某（た）ど、斯うして戯る（ざ）るを以て、則（すな）戯繪（ざれ）と云ひまする、冠「扱も
 扱も注文（この）に合ふて、嬉しう御ざる、して代價（あたひ）は如何程（いかに）で御ざるぞ、すり「高直（かうぢき）におぢやる、冠「幾何程

で御ざるぞ、すり「万疋（この）でおりやる、冠「これまた高い事で御ざる、少ね（ち）ぎりませう、すり「おう、少な
 ぎは抜いてやりませう、冠「百斗（ひやくぼ）りになりますまいか、すり「なう其處（この）な人、其様（この）な下直（げぢ）な物（もの）では無い
 能うお買ひやるまいぞ、冠「申々（ま）ん、何と聞（き）かつしやれたぞ、万疋（この）の内（うち）をば、百斗（ひやくぼ）りも抜いて下（くだ）されまいか
 と云ふことで御ざる、すり「はア聞き分（わ）りました、五百（ご）百（ひやく）抜いて進（すす）しよ、冠「忝（かたじけ）なうよう御（ご）ざれ、すり「して代
 物（もの）は何處（この）で渡（わた）さつしやれまする、冠「三條（さんじょう）の布袋屋（ぶくろ）で渡（わた）ませう、すり「これは受取（うけと）りませう、冠「忝（かたじけ）なう御
 ざる、さらば〜、すり「なう〜、冠「何（なに）でか御（ご）ざるぞ、すり「其方（そなた）は定め（さ）めし主（し）持ち（もち）で御（ご）ざる、冠「中々
 すり「人の主（し）は機嫌（きげん）の好（よ）い事（こと）もあり、又（また）悪（わる）い事（こと）もある、若（わか）自然（じぜん）ども、機嫌（きげん）の悪（わる）しうおぢやるそうは（な
 らば）、斯（す）うおしやつたが好（よ）うおぢやる、冠「扱（あ）も〜忝（かたじけ）なうこそ御（ご）ざれ、すり「好（よ）うおりやつた、冠「やれ
 扱（あ）、先頼（ま）りだ者に、急（い）いで御（ご）目（め）にかけうす、殿様（だんさま）御（ご）ざりまするか、大（お）「太郎冠者（たろうかんじゃ）戻（も）つたか、冠「歸（か）りま
 した、大（お）「やら大儀（だいぎ）や、急（い）いで見（み）せ、冠「はつ、大（お）「こりや何（なに）ぢや、冠「末廣（まつひろ）で御（ご）ざりまするか、大（お）「此
 がや、冠「はア、殿様（だんさま）のお合点（あて）が參（ま）らぬこそ道理（ことわり）で御（ご）ざりまする、斯（す）う致（いた）しますると、きつう廣（ひろ）がり
 まする、大（お）「ふん、誠（まこと）に之（これ）は甚末廣（いかに）ぢやわい、して汝（かの）れに注文（この）に合（あ）はして來（き）たか、冠「中々（この）、合（あ）せま
 して御（ご）ざる、それで讀（よ）まつしやれませい大（お）「急（い）いで合（あ）せ居（ゐ）ろ、先地紙（まづ）好（よ）しと、冠「はア、夫（この）こそ念（ねん）を遣
 ひましたれ、此紙（この）の事（こと）で御（ご）ざる、師走狐（しはすけ）の如（この）く、こん〜と云ふ程（この）張（は）つて御（ご）ざりまする、大（お）「して又

骨磨きは、冠「はつ、此骨の事で御ざる、信濃木賊をかけて磨いて御ざるに依つて、滑々致しまする
 大「要元締ては、冠「斯う廣げまして、此金で締るを以て、これが要元締てと云ふ所で御ざる、大「繪
 は戯繪は、冠「夫にこそ念のつかひましたれ、それに待たつしやれませい、や、覺わたか、大「や、こ
 れは何を仕居るぞ、冠「いや申、此系(柄)で斯様して戯るを以て、戯ると申まする、大「やい其處な奴
 して汝は知らぬが定か、冠「は、いや存じませぬ、大「知らずばこれへ寄り居ろ、末廣とは扇の事、此
 は汝おのれ古傘ふるかさを買ふてうせ居り、いや末廣で候の、戯繪で候の、某が前へは叶ふまい、退居ろ、やれ扱
 憎い奴かな、冠「誠に頼うだ人の云はるれば、此はさし傘ちやげなものを、ひよんな事を致した、乍
 去、都の者も皆まではぬきませなんだ、機嫌直しをおすへ(教へ)てくれた、先急いで申て見ませうす
 難いゑいかさかさをさすならば、かすがやんま、上これもかみのちかひと、人がかさをさそなら、おれ
 もかさささうよ、中げにもさあり、やよ、げにもさうよの、いゑい、上かさをさすならば春日やんま
 これも神のちかひと、人がかさをさそなら、おれもかさささうよ、げにもさあり、やよ、げにもさう
 よの、やよげにもさうよの、大「いかにやいかにや太郎冠者、買物に抜かれて囃物を爲ることも、せ
 んだいの曲者、身が前へは叶ふまい、中げにもさあり、やよ、げにもさうよの、買物には抜か
 れたが、先此方へこげ入つて、鰻の鮓をばゑいやつと頬張て、ようか酒を飲めかし、中げにもさあり

やよげにもさうよの、何かの事はいるまい、人がかさをささうなら、おれにもかささせやれ、ひやろ
 ひやろ、ほつはいひやろひい。

其の物語は、冠「はつ、此骨の事で御ざる、信濃木賊をかけて磨いて御ざるに依つて、滑々致しまする
 大「要元締ては、冠「斯う廣げまして、此金で締るを以て、これが要元締てと云ふ所で御ざる、大「繪
 は戯繪は、冠「夫にこそ念のつかひましたれ、それに待たつしやれませい、や、覺わたか、大「や、こ
 れは何を仕居るぞ、冠「いや申、此系(柄)で斯様して戯るを以て、戯ると申まする、大「やい其處な奴
 して汝は知らぬが定か、冠「は、いや存じませぬ、大「知らずばこれへ寄り居ろ、末廣とは扇の事、此
 は汝古傘を買ふてうせ居り、いや末廣で候の、戯繪で候の、某が前へは叶ふまい、退居ろ、やれ扱
 憎い奴かな、冠「誠に頼うだ人の云はるれば、此はさし傘ちやげなものを、ひよんな事を致した、乍
 去、都の者も皆まではぬきませなんだ、機嫌直しをおすへ(教へ)てくれた、先急いで申て見ませうす
 難いゑいかさをさすならば、かすがやんま、上これもかみのちかひと、人がかさをさそなら、おれ
 もかさささうよ、中げにもさあり、やよ、げにもさうよの、いゑい、上かさをさすならば春日やんま
 これも神のちかひと、人がかさをさそなら、おれもかさささうよ、げにもさあり、やよ、げにもさう
 よの、やよげにもさうよの、大「いかにやいかにや太郎冠者、買物に抜かれて囃物を爲ることも、せ
 んだいの曲者、身が前へは叶ふまい、中げにもさあり、やよ、げにもさうよの、買物には抜か
 れたが、先此方へこげ入つて、鰻の鮓をばゑいやつと頬張て、ようか酒を飲めかし、中げにもさあり

其三 謝川文學

其三 徳川文學

100

江戸時代文學の特徴は多種多様と云ふ點に在るが殊に此期の創作とも謂ふべきは戯曲である。戯曲はもと室町時代の能に系統を引いた人形芝居と云ふ偶人劇に合せて作つた一種の劇詩で其作句の用意も謠曲と頗る相似たものであるが近松が世話物を出して以後は全く獨特の發達をして文詞の婉轉に加ふるに人情の委曲を悉くし徳川時代中流下流の士女に最も強い感化を與へたものである。近松の戯曲と共に當代第一を以て推さるゝもの西鶴馬琴の小説、芭蕉の俳句、眞淵宣長の古典、香川景樹の短歌などがあるが何れも長篇多種にして限りある紙面に掲載することが出来ぬから今は唯その中二三の雅文と俳文とを擧ぐることにした。

雅文は又一に中古文又は擬古文と云ふ。王朝時代に發達した物語体の文章をまねたもので其長所は優美婉曲と云ふ點にあり其短所は冗長蕪雜と云ふ點にある。徳川時代元祿の初期古典派の物與と共に此文の作者が非常に増して中にはその簡結漢文を凌駕するものすらあるやうになつた。

俳文は俳句を作る心ばへして作つた散文のことで委しくは俳散文と謂ふべきである。スケッチ風の着筆を以て短篇ものではあるが氣のきいた言ひまはしに富んで頗る仙趣を帯びたものがある。芭蕉が興

の細道に胚胎して其角の類柑子となり也有の鶉衣に至つて其精妙に達した。

(一) 雅文 俳文

芳宜園大人を祭る詞

村田 春海

こゝに、文化の五とせ九月八日、平春海、謹みて、芳宜園の大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焼きて、うなねつきて申さく。あはれ、悲しきかも。君はわれに、十といひて一とせのこのかみにおはするが、今そのかみを思ひいづるに、君はまさに盛の齡におはしてわれはまだ童にてぞ侍りける。常に、縣居の庭に物まなびに行きかひたるとき、あしたに參るとは君の御佩刀のしりへにしたがひ、ゆふべに罷るとは、君の御袖のもとに籠りて、相うるはしみまつれること、親子、同胞にも、何かことならむ。書讀むとは、君を師とも尊み、歌作るとは、われをおとごひの列にぞ教へ給ひける。中頃にして、君はつかへの道にいとなくおはし、われは世のさがかがづらひて、自ら疎き方にもすごしつるを、君つかへを退き給ひて後は、われも同じ街に移り住めば、花をたづぬとは、われ道しるべをなし、月を思ふとは、君が船にあひのり、憂きことも共に憂へ、嬉しきふしも共に喜びて、世にありふる等のまめごとも、あだごとも、かたみに隔なく心を

交せること、今に二十年。その初をくり返し數ふれば、あひ友たること、すでに五十年にぞ餘りける。さるを、今おくれたてまつりて、いつの世にかあひ見む。いづれの時にか言問はむ。常なきは人の身のならひぞと知るも、これをいかでか歎かざらむ。かゝるを誰かはよく堪へむ。あはれ、悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々にくだり行けるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてて、古にかへり、青雲の高き心しらしを求め、しづはたのあやあるみやびごとを尊みいへれど、株を守り、舟にきだつくるもがら、かれに泥み、こゝにひかれて、よくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心を起して、あまねく諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙に靡きて、古ぶりの歌世に盛になりたるは、まことに、君の力によりてなり。

そのみづからよみ出で給へる歌を見るに、古きしらべ、新しき姿、とりどりにそなはらざるはなし。その古を寫せるは、藤原、寧樂の御世におよび、後のたくみにならへるは、堀河、鳥羽の御時にくだらず。心に思ふことは、口に盡さざることなく、目に觸るゝものは、言葉にのせざることなむあらざりける。これを見て、高きも、みじかきも、賞でたふとまざる人なし。また、ことこのみの人は、その名を君に知られては、身の面おこしとおもひて、世にもほこり、君のひと歌を得ては、「價なき寶にもかへじ。」といひてぞ、深くよろこびける。然るを、今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなり。

ぬるは、わがごちの歎のみかは、大かたの世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむかゝるを誰かは慕はざらむ。あはれ、悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にも、さやかに聞き召し、天がけりてもはるかに見そなはせと申をす。

石 濱 の 雨

橘 千 蔭

八月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に行きてやどりぬ。有明の月の匂も、霧立ちわたる曙のさまも、ところから世にも似ぬものから、ここは、雨のそは降る日なむ、ことにはあはれ深かりける。もとより芽喜ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の、三つ、四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろ／＼と散るもあはれなり。水の面は動くともなくて、鏡のごとくなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮び、かつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。水脈の一すぢは、さしひく潮にもまじらはで、どはに縹の色に流れいにて、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落來るならむ。打向ふ岸の榛原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひまびまより、長き堤の見わたるに、堤の遠なる梢は、やう／＼に淡墨もてかき消ちたらむが如く、いとしも遙けきは、ただなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。こゝかしこより、鳥の飛行きつゝ、罽の鶯の、翼おもげに起出で、河の瀬のまこ

もにおり立てば、みさこの群れきて、水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より、筏師の筏、笠著て、棹を筏の上によこたへ、おのれ拱たむかきて、思ふ事なげにて居り、筏は、水のまに／＼流れゆくもしづけし渡守舟さしだせば、大がさかたぶけて渡り行く人の、やがて堤を歩くありさまも、繪によく似たり。すべて一日の中に、筑波根より吹きおろすかと思へば、沖よりも風かよひきて、岸の木立も、長き堤も、あるは現れ、あるは隠れて、かぎりなき青海原に向ひたらむやうに覺ゆるをりもありけり。かくて、やゝ夕暮近くなりゆけば、むら鳥の、おのがじし時もとむるに、雁の一つら、二つらわたり行くなど、いはむかたなし。暮れはてても、猶もゆく水の色のみどほくのこりて、川ぞひ小田にはへるみくまりの神の御火の、海の漁火ともいふべく、かすかに見ねわたるもあはれなり。

秋ふけてこさめそばふる隅田川誰が墨がきのすさびなるらむ

奥の細道

一出立

芭蕉

こごし元祿二とせにや。奥羽長途の行脚ちんぎゃく、只かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髪ちんぎゃくの根をかさぬといへども、耳にふれて、いまだ目に見ぬ境、もし生きて歸らばと、定なきたのみの末をかけ、その日やうやく、草加くさかといふ宿にたどり著きにけり。瘦骨の肩にかゝる物、まづくるしむ。ただ身すがらにと

たちいでたるを、紙子一衣は夜のふせぎ、浴かた、雨具、墨、筆のたぐひ、あるは、さりがたきはたけ盛なごせられたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

二松島

心もとなき日數かさなるまゝに、白川の關にかゝりて、旅心さだまりぬ。「いかで都へ。」と、便もどめしもことわりなり。中にもこの關は、三關の一にして、風騒の人心をささむ。秋風を耳に残し、紅葉をおもかげにして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそろひて、雪にも越ゆるこ、ちぞする。

それより、野田の玉川、沖の石を尋ね、鹽竈の浦に入相の鐘を聞く。五月雨の空いさゝか霽れて、夕月夜幽に、離が島も程近し。蟹かにの小舟漕こぎつれて、魚わかづ聲々に「綱手かなしも。」とよみけん心もしられて、いとあはれなり。早朝、鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしき、彩椽いろはさらびやかに、石の階九仞に重り、朝日の影玉垣をかがやかす。かゝる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、我が國の風俗なれといと貴し。神前に古き寶燈あり。かねの戸びらに、面に「文治三年、和泉三郎寄進。」とあり。五百年前のおもかげ儼今日の前にうかびて、そぞろに珍し。かれは義勇忠孝の士なり。佳名、今にいたりて慕はずといふことなし。誠に、人は能く道を勤め、義を守るべし。

名もまたこれに従はん。日既に午に近し。船を借りて、松島に渡る。その間二里餘、雄島の磯に著くともく事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ、洞庭、西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數をつくして、敬つものは天を指し、偃すものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重にたゞみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉、潮風に吹きたわめられて、屈曲おのづから撓めたるが如し。ちはやぶる神のむかし、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、何れの人か、筆を揮ひ詞を盡さん。

雄島が磯は、地續きて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、松の木蔭に、世を厭ふ人もまれに見えて、落穂、松かさなど打ちけぶりたる草の庵しづかに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく、立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたまる。江上に歸りて、宿を求むれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寝すること、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

三 平 泉

平泉へと心ざし、あねはの松、緒絶の橋なごき、傳へて、人跡稀に、雉兔、芻蕘の往きかふ道、そ

こともわかず。つひに路ふみたがへて、石の巻といふ港に出づ。「こがね花咲く。」とよみて奉りたる金華山、海上に見わたされ、數百の廻船、入江につごひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ちつづきたり思ひかけず、かゝる所にも來れるかと、宿からんとすれど、更にかす人なし。やうやく、まごしき小家に一夜をあかして、あくれば、又しらぬ道まよひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まの萱はらなごよそ目に見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。その間廿餘里程とおぼゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を残す。まづ高館にのぼれば、北上川、南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐるて、高館の下にて、大河に落入る。泰衡が舊跡は、衣が關を隔てて、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見たり。さても、義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となれり。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠うちしきて、時のうつるまで、涙を落しぬ。

夏草やつはものごもが夢の跡。

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す七寶散失せて、珠の扉風にやぶれ、黄金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新

たに圍みて、薨を覆ひ、風雨を凌ぐ、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨のふり残してや光堂。

百 蟲 譜 (蟲の品さため)

横井也

蝶の花に飛びかひたる、やさしきもののかぎりなるべし。それも啼く音の愛なれば、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。」蛙は古今の序に書かれてよ、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池にどんで翁の目覺したれば、このものこと更にも誇りがたし。

蟬はたい五月晴に聞きそめたる程がよきなり。や、日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちすされば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かす。このものばかり初蟬といはるゝこそ大きな手柄なれ。やがて死ぬけしきは見えず。」とこのものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。螢は類ふべきものもなく景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすたく。五月の間は、只この物の爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕へられて油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその真似すべからず。茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。つくづくばふこ

といふ蟬はつくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。」と世の諺にいへりけり。哀れは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すぞ。蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の誇となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。

蟻は明暮に忙しく世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて、止ます。いつか槐安の都を逃れてその身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩すべからず。

螭螂の斧をもたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原、吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人に似たり。

促織、鈴蟲、轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲、その木にもよらで、いかでかく名をつきたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名ありて、松をからし、人にうとまる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕べ、始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく残りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やりたく里の煙など、且は風雅

の道具ともなれり。蚊蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話にはいかに團扇のひまなかりけん

母に書きのこす

大 高 源 吾

一、私事此の度江戸表へ下り申し候存念は、かねても御物語申し上候通り、一筋に殿様の御憤を察し奉り、御家の御耻辱を雪ぎ申したき事にて御座候。かつは士の道をも立て、忠のため命を捨て、先祖の名をも顯し申すにて御座候。勿論大勢の御家來にて御座候へば、如何程か御厚恩の士も御座候處、さしての御懇意にも遊ばしくだされず、人竝の私儀にて御座候へば、此節大抵に忠をも存じ、ながらへてそもじ様御存命の間御奉養仕り罷り在候ても、世の謗もあるまじき身共にて御座候へども、なまじひに、御側近き御奉公相勤め、御尊顔拜し奉り、朝暮の儀今以て片時も忘れ奉らず候。

誠に大切なる御身を棄てさせられ、忘れ難き御家をも思し召し離れ、御鬱憤遂げられ候はんと思し召しつめられ、相手を御討損じ、剩へ淺ましき御生害遂げられ候段、御運の盡きられ候事とは申しながら、無念至極、恐れながら其の時の御心底推量り奉り候へば、骨髓に徹り候ひて、一日片時も安き心御座なく候。

されども御短慮にて、時節と申し、所と申し、一方ならぬ御不調法故、天下の御憤深く、御仕置に仰せ付けられ候事に御座候へば、力及び申さざる事、全く天下へ御うらみ申し上ぐべき様御座なく候故

御城は仔細なく差上げたる事に御座候。これ天下に對し奉り、異儀を存じ奉らぬ故にて御座候。併しながら殿様御亂心にも御座なく、上野介殿に御意趣御座候由にて、御切付なされたるばかりにて候へば、其人はまさしく敵にて、御主人の御命を捨てさせられ候程の御憤に御座候かたきを、安穩にさしおき申すべき様、昔より唐土、我が朝にも武士の道にあらぬ事にて候。

それ故早速敵の方へ取りかけ申すべき處、大學様御閉門にて候へば、御免なされ候時分、もしや殿様の御跡少しにても仰せ付けられ、上野介殿方にも何とぞ品も付き候うて、大學様御外聞よく世繼も遊ばし候様にも罷り成候はば、殿様こそ右のごほりに候とも、御家は残り申すにて候。然らば我等出家沙門となり、又は自害仕り候うても、御憤は休め候はんと、此の時節まで口惜しき月日をも送り候所に、其の甲斐なく安藝の國へ御座なされ候。閉門御免と申す名ばかりにて御座候。

最も年月過ぎ候はば、何とぞ御世に出でさせられ候事も御座あるべく候はんか。よし左様に御座候とも、此の儘にて殿様御跡は絶わ申したる事に御座候へば、此の上前後を見合せ申すは臆病の仕る所武士の本意ならぬ事にて御座候。

此の上は天下へ御訴訟申し上げ、何とぞ相手方へも御手あて下り、大學様にも世間廣く御とりたて遊ばされ下さるる様に、一命にかけ御歎き申し上げ、是非御取上御座なく候はば、其の時、相手方へは

とりかけ申すべき由、頻りに相談の衆も御座候。此の儀も一理ある様には御座候へ共、なかなか左様の徒黨がましき事仕るべき道理と存じ申さず候。其の上、御願ひ申し上げ、御取上御座なきに付きて相手方へ取懸け申す段、偏に天下を御恨み申し上候に等しく御座候。然れば以ての外儀、大學様を初め奉り御一門様も、御爲よろしからぬことに候へば、一筋に殿様の御憤を晴し奉り候より外御座なく候。段々右申し上候如く、武士の道を立てて御主のあだを報い申すまでにて、全く天下へ對し奉り御恨み申し上候にて御座なく候。然れども如何なる思召御座候うて、天下へ御恨み申し上候も同前にて、吾吾ごもの親、妻子へ御崇御座候とも力に及び申さず候。萬一左様の事になり候はば、かねての通り尋常に御覺悟なさるべく候。御早まりて、御身をわれと御過ち候事など、くれぐれもあるまじき事にて御座候。よくよく、必ず必ず左様に御心得なされ度候。

世の常の女の如く、彼是ど御歎の色も見わさせられ、愚にもおはしました候はば、如何ばかり氣の毒にて心も引かれ候はんが、常の御覺悟のほどに御座なされ候うて思し切り、却りてけなげなる御勤にも預り候事、扱扱今生の仕合、未來の説、何事か是に過ぎ候はんや。天晴我兄弟は士の冥利に相叶ひたる事と、淺からぬ本望に存じ奉り候。

さきさきの首尾の程、御心に掛けさせらるまじく候。私三十一歳、幸右衛門二十七歳、九十郎二十三歳、何れも屈強のものごもにて候。容易く本望を遂げ、亡君の御心をも休め奉り、未來閻魔の廳の金札のみやげにも供へ申すべく候まま、御心安く思し召し、只御息災にて何事も時節を御待なさるべく候。御齡もいたう御傾きなされ、幾程あるまじき御身に、嘸御心細く思し召し、たよりあらん方も乏しく月日を御送りあそばし候はんぞ存じ奉り候へば、如何ばかり心愛く候へども、其の段力に及び申さず候。時に臨みては、主の命に背き、父母を肩に引懸け、如何なる山の奥、野の末にも隠れ、又は主君の爲には父母の命をも失ひ申す事、義といふものもだし難き例に候。これ等の道理暗からぬぞもじ様にておはしました候へども、筆に任せ申し残し候。

九十郎母とお千代へも、時時仰せ附けられ候うて、愚かに悲しみ申さぬ様に、互に御力を添へさせられ下さるべく候。幸かな、御法體の御身にて候へば、此の後いよいよ以て佛の御勤のみにて、うきもつらきも御まぎれまじし候うて、未來の事朝夕に御忘なく、世も穩かになり候はば、寺へも御節お参りあそばされ下さるべく候。一つは御歩行御養生にもなり申すべく候。乳母にもあきらめ申す様に仰せ下されたく候。めでたくかしく。

九月五日

大高源吾

(二) 戯曲

曾根崎心中 (札所廻り)

近松門左衛門作

實にや安樂世界より、今此娑婆に示現して、我等が爲めの觀世音、仰ぐも高し高き屋に、登りて民の賑ひを、契りおきてし難波津や、三ツづ、十ウと三ツの里、札所／＼の靈地靈佛、廻れば罪も夏の雲熱くろしとて駕籠をはや、をりはの乞目三六の、十八九なる顔世花、今咲出しの初花に、傘は被すとも召さすとも、照る日の神も男神、除けて日負はよもあらし、頼みありける巡禮道、西國二十三所にも向ふと聞くぞ有難き、一番に天滿の大寺、此御寺の名も古りし、昔の人も氣のとほるの、大臣の君が掃竈の、浦を都に堀江漕ぐ、汐汲み舟の跡絶わす、今も救世の櫓拍子に、法の玉銚をい／＼、大阪巡禮胸に木札の普陀落や、大江の岸に打つ波に、白む夜明の、鳥も二番に長福寺、空に眩き久方の、光に映る我影の、あれ／＼走れば走る、これ／＼又留れば留る、振のよしあし見る如く、心も嘸や神佛照らす鏡の神明宮、拜み廻りて法住寺、人の願ひも我如く、誰をか戀の祈りぞと、仇の悋氣や法海寺東は如何に大經寺、草の若芽も春過ぎて、遅れ咲きなる榮種や罌粟の、露に憊る、夏の虫、おのが妻戀ひ優しやよしや、彼地へ飛びつれ、此地へ飛び連れ、彼地やこち風ひた／＼／＼、羽と羽とを袷

の袖、染めた模様を花かとして、肩にとまればおのづから、紋に揚羽の長泉寺、さて善道寺りつたう寺天滿の札所残りなく、其方にめぐる夕立の、雲の羽衣蟬の羽の、薄き手拭着き日の、貫ぬく汗の玉造稻荷の宮にまよふとの、關はことわり御佛も、衆生の爲の親なれば、是ぞ小長谷の厚德寺、四方に眺めの果しなく、西に船路の海深く、波の淡路に消ぬすも通ふ、沖の潮風身に染む鷗、汝も無常の烟に咽ぶ、色に焦れて死なふなら、しんぞ此身は成次第、さて實に好いけいでん寺、縁に引かれて又何時か此處に高津のへん妙院、菩提の種や上寺町の、長安寺より清安寺、上りやすなく下りやちよこ／＼上りつ下りつ谷町筋を、歩みならはす行きならはねば、所躰くづをれア、耻しの、もりて裳裾がはら／＼／＼、ばつと翻るを打掻き合せ、緩みし帯を引締め／＼、しめて絆はれ藤の柵、十七番に住願寺是からいくつ生玉の、本誓寺ぞと伏拜む、珠數に繋がん菩提寺や、はや天王寺に六字堂、七千餘卷の經堂に、經讀む鳥のときぞとて、餘所の待つ宵きぬ／＼も、思はで辛き鐘の聲、こんこん堂にかう堂や、萬燈院に灯す火は、影も輝く蠟燭の、しん清水にしはしとて、懸て休らふ逢坂の、關の清水を汲み上げつ、手に掬ひ上げ口嗽ぎ、無明の酒の酔さます、木々の下風ひや／＼と、右の袖口左の袖へ、通る烟管に燻る火も、道の慰み熱からず、吹きて亂る、薄烟、空に消ては是も亦、行衛も知らぬ相思草人忍ぶ草道草に、日も傾きぬ急がんと、又立出づる雲の脚、時雨の松の下寺町に、信心深きしんかう

寺、覺らぬ身さへ大覺寺、さてこんな寺大蓮寺、廻り／＼て是ぞはや、三十番にみつ寺の、大慈大悲の頼みにて、かくる佛の御手の糸、白髪町とよ黒髪は、戀に亂る、妄執の、夢を覺さんばくらうの、此處も稻荷の神社、佛神すいはのしるして、薨竝べし新御靈に、拜みおさまるさしもぐさ、草のはす花世にまじり、三十三に御身をかね、色で導き情で教へ、戀を菩提の橋となし、渡して教ふ觀世音、誓ひは妙に三重有難し、立ち迷ふ浮名を餘所に漏らさじと、包む心の内本町、焦る、胸の平野屋に、春を重ねし雛男、一ツなる口桃の酒、柳の髪もどく／＼と、呼ばれて粹の名取川、今は手代と埋木の生醬油の袖したるき、戀の奴に荷はせて、得意を廻り生玉の、社にこそは着きにけれ。

曾根崎心中 (道行血死期の霜)

近松門左衛門作

此の世も名残夜も名残、死に行く身を譬ふれば、仇が原の道の霜、一足づゝに消れて行く、夢の夢こそ哀れなれ、あれ數ふれば曉の、七ツの時が六ツ鳴りて、残る一ツが今生の、鐘の響きの聞き納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名残と蹴上ぐれば、雲心なき水の音、北斗は冴わて影映る、星の妹春の天の川、梅田の橋を鶴の、橋と契りて何時までも、我と和女は夫婦星、必ず添ふと絶り寄り、二人が中に降る涙、河の水嵩も増さるべし、向ふの二階は何やとも、覺束情最中にて、未だ寢ぬ火影聲高く、今茲の心中善惡の、言の葉種や繁らん、聞くに心も吳羽鳥、あやなや昨日今日までも

餘所に言ひしが明日よりは、我も噂の數に入り、世に誑はれん、誑は誑へ、誑ふを聞けば、どうで女房にや持ちやさんすまい、いらぬものぢやと思へども、實に思へども歎けども、身も世も思ふ儘ならず、何時を今日とて今日が日まで、心の舒し夜半もなく、思はぬ色に苦しみに、如何した事の縁じややら、忘るる暇はないわいな、それに振捨て行ふとは、遣りやませぬぞ手にかけて、殺して置いて行かんせな、放ちはやらじと泣きければ、唄も多きに彼の唄を、時こそあれ今宵しも、誑ふは誰ぞや聞くは我、過ぎにし人も我々も、一ツ思ひと絶り付き、聲も惜ます泣き居たり、平常は左もあれ此夜半は、せめて暫は長からで、心も夏の夜のならひ、命追はゆる雞の聲、明けなばうしや天神の、森で死なんと手を引いて、梅田堤の小夜鶉、明日は我身を餌食ぞや、誠に今歲は此方様も、二十五歳の厄の年、妾も十九の厄年とて、思ひ合ふたる厄崇り、縁の深さの驗しかや、神や佛にかけ置きし、現世の願を今此處で、未來へ回向し後の世も、猶しも一ツ蓮ぞやと、爪繰る珠數の百八に、涙の玉の數添へて、盡きせぬ哀れ盡きる道、心も空も影暗く、風しん／＼たる曾根崎の、森にぞ辿り着きにける、彼處にか此處にかと、拂へば草に散る露の、我より先きにまづ消れて、定めなき世は稻妻か、それかあらぬかア、怖、今のは何といふものやらん、オ、あれこそは人魂よ、今宵死するは、我のみとこそ思ひしに、先立つ人もありしよな、誰にもせよ、死出の山の伴ひぞや、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

の聲の中、あはれ悲しや、又こそ魂の世を去りしは、南無阿彌陀佛と稱ふれば、女は愚に涙ぐみ、今宵は人の死ぬる夜かや、淺ましさよと涙ぐむ、男涙を潜然と流し、二ツ連れ飛ぶ人魂を、餘所の上と思ふかや、正しう御身と我魂よ、なに喃ふ二人の魂とや、はや我々は死したる身か、オ、常ならば、結びとめん繋ぎとめんと歎かまし、今は最期を急ぐ身の、魂の所在を一所に栖まん、道を迷ふな違ふなと、抱き寄せ肌を寄せ、かつばと伏して泣き居たる、二人の心の不便なる、涙の糸の結び松、椈欄の一樹の相生を、連理の契に擬へ、露の憂き身の置き處、サア此處に極めんと、上着の帯を徳兵衛も、初も涙の染小袖、脱いで懸けたる椈欄の葉の、其玉帯今を實に、浮世の塵を掃ふらん、初は袖より剃刀出し、若しも道にて追手のかかり、別れくになるとても、浮名は棄じと心懸け、剃刀用意いたせしが、望みの通り一所に死ぬる此嬉しさといひければ、オ、神妙頼母しし、左程に心落付くからは、最期も案ずる事はなし、さりながら今際の時の苦患にて、死姿見苦しといはれんも口惜しし、此二本の連理の木に、身軀をきつと結びつけ、潔く死ぬまいか、世に類ひなき死様の手本とならん、如何にもと淺ましや淺黄染、か、れとてやは抱ひ帶、両方へ引張りて、剃刀取つて、サラ／＼と帯は裂けても主様と妾が間はよもさけじと、控と坐を組み二重三重、動がぬ様に慥と締め、能ふ締つたか、チ、締めましたと、女は夫の姿を見、男は女の軀を見て、這は情なき身の果ぞやと、はつと泣き入るばかりなり、ア

、歎かじと、徳兵衛顔振り上げて手を合はせ、我れ幼少にて誠の父母に離れ、叔父といひ親方の苦勞となりて人となり、恩を送らす此儘に、亡き跡までも兎や角と、御難儀かけん勿躰なや、罪を許して下されかし、冥途に在ます父母には、追付け御目にかゝるべし、迎へ玉へと泣きければ、お初も同じく手を合せ、此方様は羨ましや、冥途の親御に逢はんとある、妾が父様母様は、健で此世の人なれば何時逢ふ事のあるべきぞ、便りは此春聞きたれども、逢ふたは去年の初秋の、初が心中取沙汰の、明日は在所へ聞わなば、幾許りかは歎きをかけん、親達へも兄弟へも、是から此世の暇乞ひ、せめて心が通じなば、夢にも見わてくれよかし、懐かしの母さまや、名残惜しの父様やと、しやくり上げく、聲も惜まず歎くにぞ、夫もわつと叫び入り、流涕憧るゝ心意氣、こころせめて哀れなれ、何時まで言ふて詮もなし、はや／＼殺して／＼と、最後を急げば心得たりと、脇指するりと抜き放し、サア只今ぞ、南無阿彌陀佛彌陀佛といへども有繋此年月、愛し可愛いと締めて寝し、肌にながあてられふかど、眼も暗らみ手も顫ひ、弱る心を引直し、取直しても猶顫ひ、突くとはすれど切先は、彼方へ外れ此方へ反れ、二三度閃めく劍の刃、あつとばかりに喉笛に、ぐつと通るか南無阿彌陀、南無阿彌陀、南無阿彌陀佛とくり通し、縦通す腕先きも、弱るを見れば両手を伸べ、斷末魔の四苦八苦、哀れといふも餘りあり、我とても後れうか、息は一度に引取らんと、剃刀取つて咽喉に突き立て、柄も折れよ刃

も碎けよと、わぐりくり／＼目も眩めき、苦しむ息も曉の、血死期につれて絶え果てたり、誰が告ぐることは曾根崎の、森の下風音に聞こえ、取傳へ、貴賤群集の廻向の種、未來成佛疑ひなき、戀の手下となりけり。

著者曰く此の曾根崎心中は元祿十六年の作にして近松が心中物の始めなり。後に豊竹座にて外題を「お初天神記」として興行せしが其時は末の文句を左の如く改めたり。これは曾根崎の相對死に男は疵淺くして命助かりたりといふが實説なる爲めなり。

我とてや後れふか、夫婦 蓮托生と、眼を閉ち唱名する所に、數多の提灯星の如く、天満屋夫婦 久右衛門、念佛の聲に駆け集り、ヤア徳兵衛ちやと聞くよりも、既に自害と見わけけるを、左右に絶つて押しむる、イヤなふお初に近付く命、殺してたべと身をあせるを、久右衛門聲をあげ、ヤレ待つてくれ徳兵衛、お初は最早息絶わたか、しなしたり去りながら、九平次が印形のたくみ、お上へ露現の上からは、お初が最期に及びしも、聞き届け給ふべし、先づ立歸へれと引立て行く、死なぬ取沙汰、死んだ沙汰、初が最期場此の社、誰がいふとなく口すさみ、言ひ傳へ聞き傳へ、名を曾根崎の松影に、未の代までも留めたり。

天の網島 (中之巻)

近松門左衛門作

福徳に天満神の名を直ぐに天神橋と行き通ふ所も神のお前町、營む業も紙店に紙屋治兵衛と名を付けて、千早振程買ひに来るかみは正直商賣は所がらなり老舗なり、良人が炬燵に轉寝を枕屏風で風ふせぐ、外は十夜の人通り見世と内とを一掃めに女房おさんの心配り、日は短かし夕飯時市の側迄使ひにいて、玉は何にして居る事ぞ此三五郎めが戻らぬ事、風が冷めたい二人の子供が寒からふ、お末が乳の呑みたい時分も知らぬ、阿房には何が成る辛氣な奴ちやと一人言、母様一人戻つたと走り歸へる兄息子、ア、勘太郎戻りやつたかお末や三五郎は何んとした、宮に遊んで乳呑みたいとお末のたんと泣きやりました、左様こそ／＼こりや手も足も釘になつた、父様の寝て御座る炬燵であつて暖まりや、此阿房めどふせふと待ち兼ね見世に駆け出づれば、三五郎唯一人のら／＼として立歸へる、こりや愚鈍お末は何處に置いて来た、ア、ほんに何處でやら落してのけた、誰れぞ拾たかしらん迄、何處ぞ尋ねて来ませうか、おのれまあ／＼大事の子を怪我でも有つたら擲ち殺すと、喚めく所へ下女の玉お末を脊なかにおふ／＼最愛しや辻に泣いて御座んした、三五郎守りするならろくにしやと、喚めき歸へれば、ア可愛いや／＼乳呑みだからふのと、同じく炬燵に添乳して、是れ玉其阿房め覺へる程打擲しや／＼と云へば三五郎かぶりふり、いや／＼たつた今お宮で密柑を二ツづ、食はせ、私も五ツ食ふたと、阿房の癖に輕口だて苦笑ひするばかりなり、ヤ阿房にかゝつて忘りよとした申し／＼おさん様、西の方か

ら粉やの孫右衛門様と、伯母御様伴れ立つてお出でなされます、是はく夫なら治兵衛殿起こそ、ノ
 ウ旦那殿起きさしやんせ、母様と伯父様が伴れ立つてござるげな、此短い日に商人が晝中に寝た振り
 を見せては又機嫌が悪るからふ、おつとまかせとむつくと起き、算盤片手に帳引寄せ二一天作の五く
 つちんがさつちん、六ちんがにつちん、七八五十六に成る、伯母打ち伴れて孫右衛門内に入れば、ヤ
 兄者人伯母様是はよふこそく先づこれへ、私は只今急な算用いたし掛り四九三十六多三六が一多八
 分で二分の勘太郎よお末よ、婆々様叔父様お出でちや煙草盆持つておじや、一三が三夫おさんお茶上
 げましたやと、口ばやなり、いやく茶や煙草も呑みには來ぬ、是れおさんいかに年若いとて二人の子の
 親、結構な斗りみめではない、男の性の悪いは皆女房の油断から、身代破り夫婦別れる時は男はか
 りの耻ぢやない、ちと目をあいて氣に張りを持ちやいのと云へば、伯母様愚かなこと、此の兄をさへ
 欺す不覺悟者女房の異見など暖かに、ヤイ治兵衛此の孫右衛門をぬくくご欺し、起請迄かやして見
 せ十日も立たぬになんちや請出す、エ、汝はナア小春が借錢の算用か置きおれと、算盤押取り庭へ瓦落
 理と投げ捨てたり、是は近頃迷惑千萬、先度より後今橋の間屋へ二度、天神様へ一度ならでは敷居より
 外出ぬ私、請出す事は扱置き思ひ出しも出すにこそ、云やんなく夕部十夜の念佛に講中の物語、曾根
 崎の茶屋紀伊國屋の小春といふ白人に、天滿の深い大盡が外の客を追ひ退け、直ぐに其の大盡が今日明

日に受出すとの取ざた、賣買高い世の中でも金と愚鈍は澤山なといろくの評判、此方の親父五左衛門
 殿常々名を聞きぬいて、紀伊國屋の小春に天滿の大盡とは治兵衛奴に極まつた、噂の爲には甥なれど
 此方は他人娘が大事、茶屋者請出し女房は茶屋へ賣りおらふ、着類着そげに疵付けられぬ間に取り返
 へしてくれふと、沓脱ぎ半分下りられしをなふ騒々敷い神妙にも成ることを、明かさ聞らさ聞き届け
 て上のごと押し宥め、此孫右衛門同道した、孫右衛門の咄しに、今日は昨日の治兵衛でない、曾根
 崎の手も切れ本人間の上々と聞けば跡からはみかへるそもいかなる病ぞや、其方の父親は伯母が兄最
 愛しや光譽道清往生の枕を上げ、髻なり甥なり治兵衛がこと頼むとの一言は忘れねど、其方の心一ツ
 にて頼まれし効ひもないわいのと、岸波と伏して恨み泣き、治兵衛手をうち、ハア、よめたく取沙
 汰の有る小春は小春なれど、請け出す大盡大きに相違兄貴も御存じ、先日暴亂れて踏まれた身すがら
 の太兵衛、妻子眷族持たぬ奴、金は在所伊丹から取寄せる、とつくに彼女めが受出すを私に押へら
 れ、此度時節到來と受出すに極まつた、我ら存知も寄らぬ事と云へばおさんも色を直し、假令私が佛
 でも男が茶屋者請出す、其最負せふ筈がない是許りは此方の人に微塵も詐はない、母様證據に私が立
 ちますと、夫婦の詞割符も合ひさては左様かと手を打つて伯母は心を安めしが、ム、物には念を入れ
 うこと先づく嬉敷いとてもに心落付くため、かたむくろの親父殿疑ひの念なきやうに誓紙書かすが

合點か、何が扱千枚でも仕らふ、いよく満足則ち道にて求めしと孫右衛門懐中より、熊野の午王の村鳥比翼の誓紙引きかへ、今は天罰起請文小春に縁切る思ひ切る、偽り申すにおいては上は梵天帝釋下は四大の文言に、佛揃へ神揃へ紙屋治兵衛名をしつかり血判をすへて差出す、ア、母様伯父様のお蔭で私も心落付き、子中なしても意に見ぬ堅め事皆喜悅んで下さんせ、ヲ、尤もく此の氣に成れば堅まる商事も繁昌しよ、一門中が世話かくも皆治兵衛爲めよかれ、兄弟の孫共可愛いさ、孫右衛門おじや早ふ歸へつて親父に安堵させたい、世間がひへる子供に風ひかしやんな、是も十夜の如來のお蔭是から成り共お禮念佛、南無阿彌陀佛と立歸へる心ぞ直ぐに佛なる、門送りさへそこく敷居も越すや越さぬ中、炬燵に治兵衛又ころり被ぶる蒲團の格子縞、まだ曾根崎を忘れずかと呆れながら立寄つて蒲團を取つて引退くれば、枕につたふ涙の瀧身も浮くばかり泣きわたる、引起し、引立て炬燵の櫓につき居顔つくく、打詠め、あんまりちや治兵衛殿、夫程名殘惜しく誓紙書かぬがよいはいの一昨年の中の亥の子に炬燵明けた祝義とて、まあ爰で枕並べて此のかた女房の懐中には鬼が住むか蛇が住むか、二年と云ふ物巢守して、漸々母様伯父様のお蔭で、睦まじい夫婦らしい寝物語もせふ物と、樂しむ間もなく眞に酷いつれない左程心残らば泣かしやんせく、其の涙が蜺川へ流れて小春の汲んで呑みやらふぞ、エ、曲もない恨めしやと、膝に抱き付き身を投げ伏し口説き立て、ぞ歎きけ

る、治兵衛眼を押し拭ひ悲しい涙は目より出で、無念涙は耳から成り共出るならば云はずと心も見すべきに、同じ目より溢る、涙の色の變らねば、心の見ぬは尤もく、人の皮着た畜生女に名残りも絲瓜もなん共ない、意恨有る身すがらの太兵衛金は自由妻子はなし、請出す工面しつれ共其時迄は小春めが太兵衛が心に随はず、少しも氣遣ひなされな假令こなさんと縁切れ添はれぬ身に成りたり共、太兵衛奴には請出されぬ若し金せきで親方から遣るならば物の見事に死んで見しよと、度々詞を放ちしが是れ見や退いて十日も立たぬうち太兵衛奴に請出ださる、腐れ女の四足めに、心は夢めく、残らね共、太兵衛めがいんげんこき治兵衛身代往着いての、金に手詰つてなんぞと、大阪中を觸れ廻り問屋中の突き合ひにも、面をまぶられ生耻かく胸が裂ける身が燃ゆる、エ、口惜しい無念な熱い涙、血の涙、ねばい涙を打越へ熱鐵の涙の溢るゝとごうと伏して泣きければ、はつとおさんが興ざめ顔、ヤア夫なれば最愛しや小春は死にやるぞや、ハテサテなんば利發でも流石町の女房ぢやの、あの無心中者なんの死なふ、疾をすへ薬呑んで命の養生するはいの、いや左様でない私が一生云ふまいとは思へ共、隠し包んでむざく殺す其罪も怖ろしく、大事の事を打明ける小春殿に無心中芥子程もなけれ共、二人の手を切らせしは此のさんが機關、こなさんが浮かくと死ぬる氣色も見ぬし故、あまり悲しき女は相見互ひ事、切れぬ所を思ひ切り良人の命を、頼むくとかき口説いた文を感じ、身にも命にもかへぬ大

事の殿なれど、引かれぬ義理合ひ思ひ切るとの返事私や是れ守りに身をはなさぬ、是程な賢女がござんどの契約違へ、おめく太兵衛に添ふものか、女子は我人一むきに思ひ返へしのないもの死にやるはいのく、ア、ア、ひよんな事サアサア何卒助けてく、騒げば良人も敗亡し、取返へした起請の中しらぬ女の文一通兄貴の手へ渡りしは、おぬしからいた文な、夫れなれば此小春死ぬるぞ、ア、悲しや此人を殺しては、女どしの義理立たぬまづござん早ふ行て何卒殺して下さるなど、夫に縋り泣き沈む、夫とても何とせん半金も手附を打ち繋ぎとめて見る計り、小春が命は新銀七百五十匁呑まさねば此の上に止むる事成らず、今の治兵衛が四ツ三貫匁の才覺、打ちみしやいでも何處から出る、なふ仰山な夫れで濟まばいと安しと、立つて簞笥の小抽匣明けて惜氣もないませの、紐付袋押開き投げ出す一包治兵衛取上げ、ヤ金か然かも新銀四百目こりや何様してと、我置かぬ金に目覺むる計りなり、其の金の出所も跡で語れば知れること、此十七日岩國の紙の仕切銀に才覺はしたれども、夫は兄御と談合して商賣の尾は見せぬ、小春の方は急なことをこに四四の一貫六百匁と、ま一貫四百匁と大抽匣の銷明けて簞笥をひらりと飛八丈、京縮緬の明日はない良人の命しら茶うら、娘のお末が兩面の紅絹の小袖に身を焦す、是を曲げては勘太郎が手も綿もない袖なしの、羽織も交せて郡内の仕末して着ぬ淺黄裏、黒羽二重の一張裏み定紋丸に蕙の葉の、のきも退れもせぬ中は内裸でも外錦、男鉾

の小袖迄さらへて物數十五色、内端に取つて新銀三百五十匁もや貸さぬと云ふことは、無い物迄も有る顔に良人の耻と我義理を、一ツに包む風呂敷の中に情けを籠めにける、私や子供は何着いでも男は世間が大事、請出して小春も助け太兵衛とやらに一分立てて見せて下さるせと、云へ共始終差俯向きしく泣いて居たりしが、手附渡して取りとめ請出して其後、圍ふておくか内へ入るるにしてから其方は何んど成ることぞと云はれてはつと行き當り、アツア左様ぢや、ハテ何んどせふ子供の乳母か飯焚か、隠居成り共しませふとわつと叫び伏し沈む、餘りに冥加恐敷い此治兵衛には親の罰天の罰佛神の罰は當らず共、女房の罰一ツでも將來はよふない筈免してたもれと、手を合はせ口説き歎けば、勿躰ない夫を拜むことかいの手足の爪を剝しても、皆良人への奉公紙問屋の仕切銀、何時からか着類を質に間をわたし、私が簞笥は皆明け殻夫れ惜しい共思ふにこそ、何云ふても跡へんでは返へらぬ、サアく早ふ小袖も着かへて莞爾り笑ふて、往かしやんせと、下に郡内黒羽二重縞の羽織に沙綾の帯金拵らへの中脇差今宵小春が血に染むとは佛や知召さるらん、三五郎爰へと風呂敷包肩に負はせて供につれ、銀も肌身にしつかと付け立出づる門の口、治兵衛は内にお居やるかと毛頭巾取つて入るを見れば、南無三寶舅五左衛門、是は扱折も折よふお歸へり被成たと夫婦は顛倒狼狽へる、三五郎が負ふたる風呂敷振ぎ取つてごつかと居り尖り聲、女郎下にけつからふ、智殿是は珍らしい上下着飾り脇差

羽織天晴れよい衆の金遣ひ、紙屋とは見ぬ新地へのお出か御精が出ます、内の女房いらぬ物おさに暇遣りや、伴れに來たと口針有る苦がい顔、治兵衛は兎角の言句も出す、爺様今日は寒いによふ歩行しやんす、先づお茶一つと茶碗をしほに立寄つて、主の新地通ひも最前母様孫右衛門様お出でなされて、段々の御異見熱い涙を流し、誓紙を書いたの發起心、母様に渡されしがまだ御覽被成ぬかヲ、誓紙とは此のことかと懐中より取出し、阿房狂ひする者の起請誓紙は方々先々書出し程書きちらす、合點が往かぬと思ひ／＼來たれば案の如く、此態でも梵天帝釋か此手間で去狀書けど、寸々に引きさいて投げ捨てたり、夫婦はあつと顔見合せ呆れて詞もなかりしが、治兵衛手をつき頭をさげ、御立腹の段尤も共お詫び申すは以前のこと、今日の只今より何事も慈悲と思召し、おさんに添はせて下されかし、誓へば治兵衛乞食非人の身と成り、諸人の箸の餘りにて身命は繋ぐ共、おさんは急度上に据へ憂るめ見せず辛い目させず、添はねばならぬ大恩有り、其譯は月日も立ち私の勤め方身上持直しお目に懸くれば知る、こと夫迄は目を塞いでおさんに添はせて給はれど、はら／＼溢す血の涙壘に喰ひ付き詫びければ、非人の女房には猶ならぬ去狀書け／＼、おさんが持參の道具衣類數改めて封つげんと、立寄れば女房あわて、着物の數は揃ふて有る、改むるに及ばぬと駈け塞がれば、突退けぐつと引出し、コリヤごふちや又引出してもちんがり有りたけこたけ、引出しても、繼切れ一尺あらばこ

を葛籠長持衣裳櫃、是程から成つたかと舅は怒の眼玉も据り、夫婦が心は今更に明けて悔敷き浦島の、炬燵蒲團に身を寄せて火にも入りたき風情なり、此風呂敷も氣遣ひと引解き取散らし、さればこそ／＼是も質屋へ飛ばすのか、ヤイ治兵衛女房子供の身の皮はぎ、其金でおやま狂ひ活胸胸賊め女房共は伯母甥なれど此五左衛門とはあかの他人、損をせふ好味がない孫右衛門に斷り兄が方から取返へす、サア去狀／＼と七重の扉八重の鎖、百重の圍みは通る、共遁れ方なき手詰の段、ヲ、治兵衛が去狀筆では書かぬ是れ御覽せ、おさんさらばと脇差に手をかくる、絶り付いてなふ悲しや、爺様身に誤り有ればこそ段々の詫言、あんまり利運過ぎました、治兵衛殿こそ他人なれ子供は孫可愛ふは御座らぬか、わしや去狀は受け取らぬと、良人に抱き付き聲を上げ泣き叫ぶこそ道理なれ、よい／＼去狀いらぬ女郎こいと引き立てる、いや私や往かぬ厭も厭れもせぬ中を何の恨みに晝日中、夫婦の恥は晒さぬと泣き詫びれ共聞き入れず、此上に何の恥町内一杯喚めいて行くと、引き立つれば振り放し小腕とられ丁々ど、踰跟く足の爪先に可愛いや確と行きあたる、二人の子供が目を覺まし、大事の母様なせ伴れ行く祖父様め、今から誰れと寝やうぞと慕ひ歎けば、オ、最愛しや生れて一夜も母が肌を放さぬもの、晩からは爺様と寝ねしや、二人の子供が朝ぶさ前忘れず、必ずくは山吞せて下されなふ悲しやど、云ひ捨つる跡に見捨つる子を捨つる、簀に夫婦の二股竹永き別れど。

天の網島（名ごりの橋づくし）

近松門左衛門作

一三〇

走り書き、謠の本は近衛流野郎帽子は若紫、惡所狂ひの身の果ては斯うなり行くこと定まりし釋迦の教へも有ることか、見たし憂き身の因果經、明日は世上の言草に紙屋治兵衛が心中と、仇名散り行く櫻木に、根彫葉ぼりを繪双紙の版摺る紙の其中に有る共しらぬ死神に、誘はれ行くも商賣に疎き報ひと觀念も、とすれば心ひかされて歩行み悩むを道理なる、頃は十月十五夜の月にも見ぬ身の上は、心の闇の驗かや、今置く箱は明日消ゆる果敢なき譬への夫れよりも、先へ消わ行く闇の中最愛し可愛いと締めて寝し、移香も何と流れの蜷川、西に見て朝夕渡る此橋の天神橋は其昔、菅相丞と申せし時筑紫へ流罪れ給ひしに、君を慕ひて太宰府へたつた一飛び梅田、橋後老松の縁橋、別れを歎き悲しみて跡に憧る、櫻橋、今に咄しを聞き渡る一首の歌の御威徳、かゝる尊き荒神の氏子と生れし身を持つて、其方も殺し我れも死ぬ元とは問へば分別の、あの可憐な貝殻に一杯もなき蜷橋、短かさ物は我々が此世の住居秋の日よ、十九と廿八年の今日の今宵を限りにて、二人命の捨て所爺と婆々との末迄も、まめで添はんと契りしに、丸三年も馴染まいで此災難に大江橋、あれみや浪花小橋から舟入橋の濱傳ひ是迄來れば来る程は冥途の道が近付くと、歎けば女も絶り寄りもう此道が冥途かと、見かはず顔も見ぬ程落つる泪に堀川の橋も水にや浸るらん、北へ歩行ば我宿を一目に見るも見歸へらず、子供の行

衛女房の哀れも胸に押包み、南へ渡る橋柱數も限らぬ家々を、いかに名付けて八軒家、誰れと伏見の下り舟着かぬうちにと道急ぐ、此世を捨て、行く身には聞くも恐ろし天満橋、淀と大和の二川を一つ流れの大川や、水と魚とは伴れて行く我も小春と二人連、一ツ刃の三ツ瀬川手向けの水に受けたやな、何か歎かん此世でこそは添はず共、未來は云ふに及ばず今度の、づつと今度の其先きの世迄も夫婦ぞや、一ツ蓮の頼みには一夏に一部夏書させし、大慈大悲の普門品妙法蓮華京橋を、越ゆれば到る彼の岸の玉の臺に法を得て、佛の姿に身をなり橋衆生濟度が儘ならば、流れの人の此後は絶へて心中せぬやうに、守りたいぞと及びなき願ひも世上の世迷ひ言、思ひやられて哀れなり、野田の入江の水煙り山の端白くほの、と、あれ寺々の鐘の聲こうく、斯うしていつ迄か、とても存命はてぬ身を最期急がん此方へと、手に百八の球の緒を泪の玉の繰りませて、南無阿彌島の大長寺藪の外面のいさゝ川、流れ漲る樋の上を最期所と着きにける、なふ何時迄うかく、歩行ても、爰ぞ人の死に場とて定まりし所もなし、いざ爰を往生場と手を取り土に坐しければ、さればこそ死に場は何處も同じことと云ひながら、私しが道々思ふにも二人が死に顔並べて、小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば、おさん様より頼みにて殺して呉れるな殺すまい挨拶切つと取り替せし其文を反古にし、大事の男を唆かしての心中は流石一坐流れの勤めの者義理しらす偽り者と、世の人千人萬人よりおさん様一人の下げし見、

恨み嫉みも嘸ぞと思ひ遣り、未來の迷ひは是れ一ツ、私しを此處で殺してこなさん何處ぞ所をかへつ
いと脇でと、うち靠れ口説けば俱に口説き泣き、ア、愚痴なこと計りおさんは男に取りかやされ、暇
を遣れば他人と他人、離別の女になんの義理道すがら云ふ通り、今度のくすんと今度の先きの世迄
も夫婦と契る此二人、枕を並べ死ぬるに誰れが譏り誰れが嫉む、サア其離別は誰れが所爲私しよりこ
なさん猶愚痴な、身體があゝの世へ伴れ立つか所々の死にをして譬へ此身體は鳶鳥につゝかれても、二
人の魂付き纏わり地獄へも極樂へも連れ立つて下さんせと、又伏し沈み泣きければ、ヲ、夫れよく
此身體は地水火風死ぬれば空に歸へる、五生七生朽ちせぬ夫婦の魂放れの驗合點と、脇差すばと抜き
はなし元結際より我黒髪ふつゝと切つて、是れ見や小春此髪の有る内は紙屋治兵衛と云ふおさんが良
人、髪切つたれば出家の身、三界の家を出で妻子珍寶不隨者の法師、おさんと云ふ女房なければおぬ
しが立てる義理もなしと、泪ながら投出す、ア、嬉しふござんすと小春も脇差取り上げ洗ひつ漉いつ
撫で付けし、醋や惜しげも投島田はらりと切つて投げ捨てる、枯野の芒夜半の霜俱に亂るゝ哀れさよ
浮世を逃れし尼法師夫婦の義理とは俗の昔、逆ものにとさつぱりと死場も替へて山と川、此の樋の上
を山と准らへ和女が最期場、我は又此流れにて縊ぐる最期は同じ時ながら、捨身の品も所も替へてお
さんに立て抜く心の道、其抱へ帶此方へと、若紫の色も香も無常の風に縮緬の此世彼の世の二重まで

り、樋の粗木にしつかと括り先きを結んで、狩場の雉子妻故我れも首締め縊る毘結び、我と我身の死
拵へ見るに目も呉れ心くれ、こなさん夫れで死なしやんすか所を隔て死ぬれば側に居るも少しの間、
此處へくくと手を取り合ひ又で死ぬるは一思ひ嘸ぞ苦痛なされうと、思へば最愛しいくくと止めかね
たる忍び泣き、首くゝるも喉突くも死ぬるに愚かの有る物か、よしなき事に氣をふれ最期の念を亂さ
ず共、西へくくと行く月を如來と拜み目を放さず、只西方を忘りやるな心残りの事有らば云ふて死に
や、何もないくゝこなさん定めてお二人の子達の事が氣にかゝる、アレひよんな事云ひ出して又泣か
しやる、父親が今死ぬる共何心なくすやノと、可愛いや寝顔見るやうな忘れぬは是ればつかりと岸
破と伏して泣きしづむ、聲も争ふ群鳥栖はなれて鳴く聲は、今の哀れを問ふやとていと涙を添へに
ける、なふあれを聞きや二人を冥途へ迎ひの鳥、午王の裏に誓紙一枚書く度びに、熊野の鳥がお山に
て三羽づゝ死ぬると、昔より言ひ傳へしが我と其方が新玉の歳の始めに起請の書き初め、月の始め月
頭書きし誓紙の数々、其度事に三羽宛殺せし鳥は許多ぞや、常には可愛いくくと聞く今宵の耳へは其
の殺生の恨みの罪、むくひくくと聞くゆるぞや、報ひとは誰故ぞ我ゆる辛らき死をどぐる、免して呉
れと抱き寄れば、いや私故と締め寄せて顔と顔とをうち重ね、泪に閉づる鬢の髪野邊の嵐に氷りけり、
後ろに響く大長寺の鐘の聲、南無三寶長き夜も、夫婦が命短か夜と早や明け渡る晨鐘に最期は今ぞと

引寄せて、跡迄残る死顔に泣顔残すな残さじと、莞爾と笑顔のしろじろと霜に凍へて手も慄ひ、我れから先きに目も眩み刃の立てども泣く涙、ア、急くまい〜早ふ〜と女が勇むを力草、風誘ひ來る念佛は我れに勸むる南無阿彌陀佛、彌陀の利劍とぐつと刺され引き据へても反り返へり、七顛八倒こはいかに切先咽喉を外づれ、死にもやらざる最後の業苦俱に亂れて苦しみの、氣を取り直し引寄せて鏝元迄差通したる一刀、刺り苦しき曉の見果てぬ夢と消え果てたり、頭北面西右脇臥に羽織打着せ死骸を繕ひ、泣いて盡させぬ名残りの袂見捨て、抱へ帯を手繰り寄せ、首に毘を引掛くる寺の念佛も切廻向、有縁無縁乃至法界平等の聲を限りに樋の上より、一蓮托生南無阿彌陀佛と踏みはづし暫時苦む生瓢、風に揺らるゝ如くにて次第に絶ゆる呼吸の道、いきせきとむる樋の口に、此世の縁は切れ果てたり、朝出の漁夫が網の目に見付けて死んだヤレ死んだ、出逢へ〜と聲々に言ひ廣めたる物語、直ぐに成佛得脱の誓ひの網島心中と目ごこに涙をかけにけり。

丹波與作 (道中双六)

近松門左衛門作

これ〜御覽せうたしやんせ、是こそ五十三次を、居ながら歩む、ひざくりげ馬、はゐしる道中双六南無諸佛ぶんしんと、書いた六字を六角の投子は櫻木花の都をまん中に思ひ〜のしるしを置いて、さらば此方から打出の濱、大津へ五里爰で矢橋の舟賃が、出舟召せ〜旅人の、乗りおくれじとごさ

草津、お姫様より先づ姥が餅、一口二口みな口ごちやう踊りこへ、坂へ越すのも投子次第、投子をふれ〜、ふるや鈴鹿を跡に下がれば負けまいとせきにせきより龜山に、煙草火うちもの石薬師、たつと桑名の舟渡し、宮へ上がれば池鯉鮒へ四里の、宿にころりは岡崎女郎しゆ〜、岡崎女郎しゆと、もつれ寝よやれ藤川に、思ひ〜の君待ち受けて解く前垂の赤坂や、吉田二川白須賀さよいと越へて、手はん御座るか振袖にヤ此この荒居今され、舟に召せ〜始召せの始々濱松まで、舞坂三里ナ馴見附けの泊りと聞けば、誰れも惜まぬ縞の財布の袋井や、のり掛川を飛びおりて、機嫌笑顔やサアにつ坂の蕨餅、腰なは何んぞ日本一の大井川、投子に無の字を打出せば水の出花の八十川の、島田金谷に二日のよごみ、仕合せよしの旅すご六里、七里八里もた〜一足に、さきへ〜と咲きかゝりたる、藤枝岡部瀬戸のそめ飯、うつの山邊のとうだんご、所々の名物買ふておあしつく〜つく手鞠子にひいふうみいよ、ふちう江尻にすつとん〜、とんと打つたる興津なみ、松原はるゝ膏薬買ふて、月をすひ出せ清見寺、由井蒲原や吉原の花の蒲焼名物の、鰻のはたへぬまづの宿、三島こゆれば箱根へ三里、投子目次第にせきこゆる、悪い目うてば手はんをどりに元の京へ立歸へる、がつてんかヲ、のみこんだ、小田原うゐらう大磯平塚藤澤の、さはりもなしに双六の、さいさきも宜し門出よし、道中早めてごつかはと急ぐ程が谷神奈川こへ川崎をこへ品川こへ、まづ先駈けのお姫様、一番勝ちに勝色の花のお江

戸に着き給ふ、一のうらは双六の幸ひあり喜びあり、慰み有りける道中と、どつと奥にぞ入り給ふ。お傍の衆に囁かれて幼稚心の姫君、斯ふ面白い東都とは今迄おれは知らなんだ、サア〜往ふはや往ふ、ヤア御座らふとおつしやるか、そりや目出度いわ〜、又もや御意の變らぬ間に、行列揃へど立騒ぐ、お乳の人は勇みをなし、左様ならま一度大殿様お袋様とお盃、是れも馬子殿おかけじや出来いた〜、其方には禮いふ褒美やる、其處に待ちや〜とさざめき渡り奥に御供し入りにけり、馬方は遂に見ぬ金の間をうそ〜と、覗き廻れど庭の外踏みもならぬ備後表、エ、此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ、大名の家よりも此方の家がけつこで御座ると、獨言して居たりけり、お乳の人は大高にお菓子さま〜ふんかうに盛入れ、ごれ〜三吉其處にか、まあ〜其方はけな者じや、道中双六お目にかけて夫故に姫君様お江戸へ御座ると御意なさるる、お上にも御機嫌、これは御前のお菓子難有ふいただきや、お錢三筋買いたい物買やや、殊に其方は通しちやげな道中すがらも用あらば、お乳の人の重の井に逢ふといや、見れば見る程よい子ぢやに馬方させる親の身は、能く〜で有らふと最と念比の詞の末、三吉つく〜聞きすまし、由留木殿の御内お乳の人の重の井様とはお前か、そんなら己れが母様と抱きつけば、ア、こは慮外な、おのれが母様とは馬方の子は持たぬと、挽ぎ放せばむしやぶりつき、引きのくれば絶りつき、なんの無い事申しませふ、わしが親はお前の昔の連合ひ、此の御家中に

て番頭伊達の與作、其子は私、此方様の腹から出た、與之助はわしぢやわいの、父様は殿様のお氣に違ふて、國をお出なされたは三ッの時でおろ覺へ、沓掛の姥が咄しには、母様も離別とやらで殿様に御奉公此方を姥が養育し、父様に逢はせたふ思へども甲斐もない、母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人の重の井様と尋ねよと、念比に教へて姥はおれが五ッの年、久しう痰を煩らうてあげくに鳥羽の祭禮に往て、餅が咽につまつてつゝ死んでのけました、在所の衆がやしなひで漸々馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公します、これ守袋を見さしやんせ何んの嘘を申しませふ、お前の子に紛れはない外に望みは何んにもない、父様を尋ね出し一日なりとも三人一所に居て下され、みごと沓を打ちます、此の草鞋も私が作った、晝は馬を追うて夜は沓打ち草鞋作り、父様母様養ひませふ、父様と一ツに居て下され、拜みまする母様と取付き抱きつき泣き居たり、お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我子の與之介、守袋も覺へ有り、飛びついて懐に抱き入れたく氣はせげども、アツア大事の御奉公養ひ君のお名の疵、偽つて叱らふかイヤ可愛げにさうもなるまい、まあちよつと抱きたいア、ごふせふと、百色千色の憂き涙双つの眼にはたまちかね、咽び沈みて居たりしが、いや〜我子ながらも賢しい者、偽つて實とせず、母の心のきたない者と蔑しまるゝも情けなし、譯を語つて合點させ耻しめて返へさん物と、涙のごうて氣を静め、爰へ來い與之介と、引寄せて兩手を採り、扱

も大きくなりやつたの、迎も成人せふならば、侍らしう何故じんじやうにも育たぬぞ、顔の道具手足迄母は斯うは産みつけぬ、美しい黒髪を此やうに剃下げて、手足は山のこけ猿ぢやほんに氏より育ちぞと、又さめくと泣きけるが、これ物をがてんしや、腹から産んだはうんだれども、今では子でも母でもない、淺ましく成りさがつたを嫌うて云ふではさらくない、爰の譯をよふ聞きや、母はもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓たがひに若氣の戀風に、擦れつもつれつ一夜が二夜と度重なり、通はせ文をお次ぎに落し小姓目附に拾はれ、武家の作法と云ふ内に殊にお家は御法度きびしく、御家老衆の評定父も母も御成敗と極りしを、御前様のお身にかへお命かけての御訴訟、殿様の御慈悲にて科を許され其上に、表だつて夫婦になされ與作殿は段々に、奏者役番頭千三百石迄お取立、追腹程の御恩の家其間に其方を設け、上には姫様御誕生、御内證のよしみにて、母が乳を上げまし首尾さへよければ、其方も今家老衆の子同然に一番と下座に下らぬ人、情けなや父様が江戸詰の山谷通ひ、大事の所を仕損ない又切腹に極まつたなれども腹を切らせては女房お家に置かれぬ、時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出ればいかごとて、母を其儘残さふため父様の命助かり、奉公構ひの御改易其時母も一所に退けば、尤も夫婦の道はたつ、お姫様の乳離れ、お苦しみをかけまし身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報せん、残つて御恩を報じてくれと、父様のことはりゆる第一は男のため、夫婦

の義理を忠義にかへて、あかの離別をしたわいの、男の子は幼うても御勘氣の末氣遣ひな、與作が子とばし云やんなやサア早ふ御門へ出や、ア、いかなる因果な生れ性、現在我子に馬追ひさせ、男の行衛も知らぬ身が母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと玉の輿にのつたとて、是が何になる事と、聲を忍びに泣くばかり、子は生れつき賢くて聞き分け有る程猶泣き入り、悲しい咄を聞ききました去りながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさる、由、御訴訟なされ下されかしと、云へばちやつと口を押へ、ア、く、勿躰ない、その乳兄弟云はぬ事、姫君様は關東へ養子嫁子にお下り、高いもひくいも姫御前は大事のもの、先きは他人の世間てい、三吉と云ふ馬追ひが乳兄弟に有るなど、ごふ障碍にならふやら蟻の穴から堤も崩れる、軽い様で重い事ひそく云うて人も聞く、先づ早ふ出てくれと泣くく云へば三吉、ア、母様あんまり遠慮過ぎました、先づ云うて見て下され、未だ云ひ居るか聞き分けない、夫の事我子の事母に如才が有るものか、合點の悪い聞き分けないと制する内に奥よりも、お乳の人はごにぞ、御前から召しますと呼ばれば、あれ聞きや人が来る出てたもと、手を取つて引出す不便や三吉しくく涙、頬冠りして目をかくし沓見まつて腰につけ、見すばらしげな後影こりやま一度こちらむきや、山川で怪我しやんな、雨風雪ふり夜道には腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで煩はぬ様にしてたも、毒な物喰はず

に腹や痲疹の用心しや、可愛いの躰やいたくしや、千三百石の代取が何んの罰ぞ詰責ぞ、式代の段ばこに身を投げ伏して歎きしが、懐中の有合せ壹歩十三服紗につゝみ、是れたしなみに持つて居やと涙ながらに渡さるゝ、三吉見返へり恨めしげに、母でも子でもないならば、病ふと死ふといらぬおかまひ、其一步もいらぬ馬方こそすれ伊達の與作が惣領じや、母様でもない他人に金貰はふ筈がないエ、胴慾な母様覺へて居さつしやれと、わつと泣き出す其の有様、母は魂消白入りて、養ひ君お家の御恩思はずば、扱一人子を手放して、なんの遣ふぞ奉公の身の淺ましやと、悶へこがれて歎きける、時に奥口ざやめて早や御立ちと姫君の、御與昇あげ行列立、お乳の人の乗物をひらづけにこそ昇寄せけれ、お乳はさあらぬ顔つきして、姫君のお伽に最前の馬方を此乗物に引きつけ、お慰みに謠はしや、畏まつたと宰領どもこりや、其處なじねんじよめ、謠ひ居らふごきごつなく、ヤア此奴はほへをるか何んちやこりや忌々しいと、握り拳を二ツ三ツいたゞきながら泣聲に、坂はてるく鈴鹿はくもる、土山あひの、あひの土山雨がふる、ふる雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ三重雨やどり。

鎗の權三重帷子 (上之卷一節)

近松門左衛門作

歸れば跡は門の戸を、さすが數寄者の庭の面、若葉の樹立物古りて、爐路はの暗き燈籠の、火影宿か
る熊笹の、露は螢か、哇の聲の置く、菅屋が軒に音信れてしよろく、流れ水の音、夜も森々と更け

にけり、おさるは椽先に、家内は寝入る、ぼつしりと、何を思ふと咎め人の、無きが我屋の取得にて涙も袖に落ち次第、エ、思案する程妬ましい、大鉢の男を可愛い娘に添はせうか、我身が連れ添ふ心にて、吟味に吟味、思ひこふた稀男なればこそ、大事の娘に添はするもの、恪氣せず置ふか、晝の婆々めが吐し頬、お雪様と權三様と内證しやんとしめてある、ゑゝ、腹が立つ妬ましい恪氣者とも法界とも、言ひたか言へ、傳授も瓢箪も何んのせう、臺子も茶釜も糸瓜の皮、エ、恨めしい腹立つやと、身を椽桁に打ち付けて、翻す涙の袖半、絞る茶巾の如くなり、ハアウア、思へば、恪氣も因果か病か是程恪氣深うては、我男を手放して海山隔て、能ふ置くぞ、能々お主は怖いもの、皆心の氣隨から、姑が聲の恪氣とは悪名の種、さらうと思ひ忘れうと拂へども猶胸焦がす、涙は癖となりけり、契約なれば笹の權三、供をも具せず、靜かに門を叩く音、内にも答へず走り出で、誰ぢや、笹野とばかりに明くる戸を、入るより早くはたとめ、直ぐに數寄屋へくと手燭片手に傳授の箱、二人忍びし有様は、人の疑ひあるべしと、我身に見ねぬ障子一重、明けて數寄屋に入りけり、是は繪圖の巻物、祝言、元服、出陣の臺子、是れみすの中の茶の湯の圖、誠の眞の臺子とは、此行幸の臺子の圖、三幅對三ツ具足、壺飾りの品々、印可の巻許しの巻、これを讀めば口傳入らず、心靜かに緩々とお讀みなされませ、權三戴き繰返へし、讀めば世間も靜まりて、蛙の聲も更け渡る、折しも川側伴之丞、四斗入

の明檜下人に持たせ、市之進が屋敷屏の廻り、うそく耳をそばだて小聲になり、イヤ波介、内には能ふ寝たぞ、おさるが寝間へ忍び込み、口説きおふせ、積る念を晴らし、色の上にてたらしこみ、眞の臺子傳授の巻物してやり、權三めにうつそりさせ、若し人が起きあふても女家隸、口へ砂でも頬張らせ、いきばねを揚げさすな、それ鏡突き抜け、まつかせと踏みつくれば、底も鏡もすつぽりと抜けたるを、枳穀垣にくんぐつと、葉山繁山繁けれど、茨障らす思ひ入る、抜穴道とぞなりてけり、おのれは四方見合せ、跡から来いと伴之丞、そろりくと這ひ潜り、庭に出づれば數寄屋の内に燈火の、影は障子に男と女、忍び逢ふ夜のさゝめ語、領き合ふて顔と顔、寄せてしつぽり濡れの露、寝て仕舞ふたか未だ寝ぬか、染みくうまい花盛り、伴之丞も氣は上づり、裾はお留守を念かけて、先陣越された宇治川に、膝ふりくくの流れ武者、喉を潤かし立ちけるが、權三が聲にて、ハア誰れぞ庭へ来たさうな、ハテ晝さへ人の來ぬ處、夜更けて誰れが來るものぞ、イ、ヤ今まで鳴きたる蛙がびつしやりと鳴き止んだ、ア、蛙も些と寝まいでは、きよろくせすと先づ巻物とも讀ましやんせ、あれ又蛙が鳴きますといふ中に波介樽を潜つて庭の内、主従一所に立ちやすらふ、あれ又びつしやり鳴き止んだ、どうでも誰れぞあるは定、鳥渡吟味と、刀押取出んとす、これ遣らぬ、三方は高塚、北は茨垣、犬猫も潜らぬに人の來る筈がない、獨りしての氣遣ひ、さてはお前と私斯うして居るを、妬む女子が喚き

に來る其覺わが御座んすの、是は迷惑、左様の覺わ微塵もない、いや有るいやある、媒人が口を添へればツイ埒の明く様に、内證しやんとしめてある、エ、くくく女の身の慕なさは、表ばかりに眼がくれて、胸の中を知らなんだと、わつとばかりの腹立ち涙、これ宵からくくく燃え返へるを、姑が聲の格氣と浮名がいやさに、笑顔作つて懐の袋、ふつつりと緒が断れた、これ見よがしの其帯は、定紋の三ツ引と裏菊と、小じたたる引並べ、誰れが縫ふた、誰れが遣つた、噛み断つて退ふと飛びかゝり武者振付く、ハテ此帯は様子がある、ヲ、様子が無うては、様子といふが妬ましい、互ひに泣くやら叩くやら、帯ぐるくくと引き解き、曇みかけて擲り捨て、エ、嫌らし手が穢れたかと、手繰つて庭にひらりと投げ、拾へといはぬばかりなる、思ひの闇を詮方なき、二人の影はばらく髪、如何にしても此態、帯解いても居られすと、庭に出でんとする處を、ア、くくく帯に名残り惜しいか、不承ながら此帯なされ、一念の蛇となつて、腰に巻き付き離れぬ、と引解いて投げ出す、權三餘りに勃として二重廻りの女帯致した事御座らぬと、同じく庭に投げ出す、隙さす捨ひ伴之丞聲を立て、市之進女房笹野權三不義の密通、數寄屋の床入り、二人が帯を證據、岩木忠太兵衛に知らすと、言ひ捨て抜け出て出づる聲、南無三寶伴之丞、弓矢八幡逃がさじと、刀引抜き障子蹴破り飛んで出で、燈籠の火の影薄く探がし廻れば、波介が狼狽へ廻るを慥と捉へ、伴之丞は何んとした、私を捨て、出られた、エ

せめておのれを冥途の供と、肝のたばねをぐいぐい、抉ればぎやつとばかりにて、二刀にぞ留りける、直ぐに逆手に取直し、弓手の小脇に突込む處を、おさゝの絶つて、こりや何うぞ、不義者は伴之丞、身に曇りないお前が何んの過まり死なふとは、ア、愚かな、二人が帯を證據に取られ、寝亂れ髪の此の態、誰れに何んと言譯せん、最う侍が廢つた、此方も人畜の身となつた、エ、く、無念やと泣きければ、さてはお前も妾も人間はづれの畜生になつたか、如何なる佛罰、三寶の冥加には盡き果てた淺ましい身に成り果てたか、はあつとばかりに撞と伏し、消え入るやうに歎きしが、エ、是非もない最早此の二人は生きても死んでも廢つた身、東に御座る市之進殿、女房を盗まれたと後指をさうれては、御奉公は愚ろか、人に面合はされまい、とても死ぬべき命なり、唯二人が密夫といふ、不義者に成り極めて、市之進殿に討れて、男の一分立て進んせて下されたら、なふ忝なからふ、と又伏し沈むばかりなり、いや是れ不義者にならず、此儘で討れても市之進殿の一分立て、死後に我々曇りない名を雪げば、二人も共に一分立つ、如何にしても、密夫に成り極まるは口惜しい、ヲ、いとしや口惜しいは尤もなれど、跡に我々名を清めては、市之進は女敵を討ち過まり、二度耻といふもの、不肖ながら今此處で女房ちや夫ちやと一言いふて下され、思はぬ難に名を流し、命を果たすお前もいとしはいとしいが、三人の子を産した廿年の馴染には、妾や換ねぬぞと、わつとばかり歎きくづをれ見わけ

れば、權三も無念の男泣き、五臟六腑を吐き出だし、鐵の熱湯が喉を通る苦しみより、主のある女房を我が女房といふ苦患、百倍千倍無念ながら、斯う成り下つた武運の盡き、是非がない、權三が女房、お前は夫、エ、く、く、忌々しい、と絶り合ひ、泣くより外の事ぞなき、サア家内の眼の覺めぬ内夜も短かし、早や立退かん、と引立つれば、可愛いや三人の小兒が、母が今此處で、住み馴れた此の屋敷を退くとも知らず、何事か夢に見て、すやく寝入る寝顔に、暇をひをと泣きければ、エ、未練な、市之進に首尾能ふ討る、よ、より、浮世の願ひ何がある、と引立て門を明けんとすれば、門外に提灯人足、靡くはた、大音上、岩木甚平、笹野權三に逢ひに來た、誰れも臥さつてけつかるか、明けよ、と呼ばはつたり、ハア、悲しや、弟の甚平門からは出られぬ、裏門はなし、扉高し、飛んづ押しつうろつく間に、家内は起きる、門は叩く、前後に眼を付く茨垣、ヤア悪人めが抜穴、我身に神の御利生と、二人手を組む生死の巷、命の界四斗樽に、六道四生と詰まつて動かれず、跡へも先きへも酒樽と、共に逆様さかどんぶり、轉ろく頃は曉月の、時は夜明けの七ツがしら二ツ頭に足四本、胴は一ツの酒樽に、歩む無明の酒の酔、是れぞ冥途に通ひ樽、契りは借老同穴と、一ツ棺に一ツ穴、何處ぞに埋んで桶の輪と、言はねど物が言はせ樽。

唄「筒井筒、井筒の水は濁らねど、今は涙に掻き濁す、月も袂に掻き曇る、晨の雲、夕の霜、仇しが浦の空穂船、身を無きものぞ知りながら、愛し憎しの戯れも、少時此岸彼岸の、假の現の假橋や、藻に埋まるゝ牡蠣船の、苦の隙間の燈火の、風を待つ間の影よりも、明日まで待たぬ我が命、我と失ひ二親の、育てし御恩は如何にせんと、歩みもやらず泣き居たり、送り迎ひの色駕籠も、少時途絶は何國にも、馴染の寝入花、我身は今宵散り果つる、名残盡きせぬ濱川の、此處は竹田か夜は何時ぞ五ツ六ツ四ツ千日寺の、鐘も八ツか七ツの芝居、二人が噂世話狂言の脚色の種となるならば、我を紺屋の片岡に何とか思ひ、染川は、臺詞に泣いてくれよかし、包む袂の飛驒之丞、二個遣ひの手品にも斯かる姿振寫すとも、此思ひをばよも知らじ、去歲のお島の心中の、其の井筒屋に我が今、重ね井筒と篠塚に、いはれ岩井の半四郎、憂ひ臺詞の菖蒲草、露のおごしも御身と我が、積る涙の雫かや、西に嵐の吹き晴れて、空は牙わても我々は、戀慕の間に暗がりに、よしなき事を仕出して、東の果てに名を流す、それに劣らぬ歎きぞと、最と思ひに吳竹の節を習ひし淨瑠璃も、餘所の事よと慰みしが、今身の上以降る霜の、一足づゝに消ね失せて、死に行く身の情きなや、あれ見返へれば人聲の、我れを尋ねて高津の町を、急ぎ遁るゝ鰐口や、頼みをかけし御經の、此の三界の衆生は、皆是れ我が子と聞く

時は、親諸共に至るなりけり、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、五逆の提婆は天王如來、龍女も成佛する時は、煩惱菩提となるぞ頼母し、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、六萬九千三百八十四文字を、只此の七字に納りて、大蔓陀羅や蔓陀羅雪、雨にも風にも詣ふて来て、朝に現世夕は後世、此世彼世の二面、今宵一ツの檜の葉の、影は浮世の塵芥、共に命の捨場ぞと、大佛殿の勸進所、身を捨つる藪となりけり、涙に迷ふ其中にも、男は有繋男にて、なふ世間を聞けば、女先立ち、男は跡に死損ひ、見苦しき沙汰に逢ふ、無念の上の死耻ぞや、先づ我れからと脇指を抜かんとすれば抱き付き、なふ待つて下さんせ、今死ぬる身をいひながら、大事の良人が目の前で、朱に染まつた躰を見れば、氣も狼狽へ目も暮れて、如何してか死なれうぞ、なから死して耻さらし、此方様の死骸の帯解き、紐解き打返やし、詮議のあるを、じろくごそもや見て居られうか、妾から先きにと手を持ち添へ、我見に差し當て忍び泣き、男は力涙に迷ひ、及物持つ手も弱々ど、女の際に伏し轉び、覆ひ重なり泣き居たり、石の鳥居の彼方より女の泣く聲、子の泣き聲、南無三寶我が家の提灯、女房、子供、家來ども、見付けられては情けなし、小長谷の方で死ぬまいか、と立ち上らんせせし處へ、ハヤ道傍まで尋ね来て、間は僅か半町に、足るや足らずも因果の隔て、百里も同じ如くにて、近き甲斐なき千賀の鹽竈身を焦すこそ哀れなれ、妻のお辰は宵よりの涙と霜に袖凍り、物

言ふ方もなき中に、あれ／＼夜明けも近付くか、鴉がいかう齧くわいの、外の欠落走者と違うて、明日尋ねよとはいはれぬ、死に出た心中なれば、疾くに命は最う無い人、淺間しや悲しやな、女房子の無い人ならば、殺すまい死ぬまいものと、嘸ぞや最期の悔み言、お房が恨みも思ひやる、思へば妾があるゆゑに、人二人殺すよな、位牌に對うて言譯ない、冥途の旅を連れ立たんと、下人が指いたる脇差に、取付く處をもぎ放し、これは一興、此子は最愛しふ御座らぬか、と止むれば小一郎、母様死んで下さるな、と嘆く聲さへ身に沁みて、野邊の霜風小夜嵐、丁稚の三太もうろ／＼と涙、心中といふものは、いかふ寒いものちやとて、共に袖をぞ絞りける、徳兵衛嘯きて、月は傾く東は白む、躊躇うて今の間に見付けられんは淺間し、いざ何事も、宵よりいふた通りぞや、應と首肯くばかりにて、涙に物をいはずつ、夫の膝をしつかと押へ、仰向き待ちたる口の内、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經を、一つ蓮華にと、ぐつと突貫く一刀、わつと叫びし一聲の、あはれ果敢なき最期なり、今のは何處ぢや、サア知れた其處か、此處か、いや／＼南に聞けた、と御の響きは氣も付かず、皆生玉へご走りける、見付けられじと徳兵衛島の中を西東、此處に屈み、彼處に忍び、今は嬉し一所にと、房が死骸を尋ね寄る、道も心も埋れ井戸、踏み外してくわつばと落ち、水の哀れや汲み上げて、重ね井筒の心中と、御法の水をぞ湛わける。

朝顔日記

(宿屋の段)

近松半二作

朝顔殿召しまする、朝顔殿／＼と呼び立つる、むざん成るかな秋月の、娘深雪は身につもる、歎きの敵の重なりて、時失ふ目なし鳥、杖柱とも頼みてし、淺香はもろく朝露と、消へ残りたる身一ツを、道に捨ても椽先の、飛石さぐる足元も、危ぶき木曾の丸木橋、渡りぐるしき風情にて、やう／＼座して手をつかへ、召しましたは此お座敷でござりますか、拙いしらべもお笑ひ草、おはもじさまやと會釋する、顔も深雪が馴れの果、不便の者やとせぐりくる、涙吞込み控へ居る、岩代は夫共しらす、サア見ぐるしい其さまで、我々が目通りへうせせば、聞き及んだ朝顔めな、エキキリ／＼立つてうせおらうアイヤ／＼岩代氏、さうもぎどうに仰せられな、此方に呼び寄せたればこそ、思ひがけのうアイヤ思ひがけのうきた者を、呵るは武士の情に有らず、コリヤ／＼女太義ながら、其朝顔とやらの歌、ササ早くうたうて聞かせいと、望む心は千萬無量、知らぬ岩代頼ふくらし、扱々駒澤氏にはイヤモきつい御執心、コリヤ／＼目くら何成りとも、エ、諷へ／＼、サ、早く／＼、ハイ／＼／＼諷ひまするでござりますと、こがる、夫の有るぞとも、しらぬ目くらの探り手に、戀ゆへ心盡し琴、誰かは憂を斗爲吟の、糸より細き指先に、さす爪さへも八ッ橋の、やつれ果てたる身をかこち、涙に曇る爪しらべ露のひぬ間の朝がほを、照らす日かげのつれなきに、哀れ一むら雨のはら／＼とふれかし、ム、夫を慕

ふ音律の、我々が身にも思ひやられて、思はずも感涙いたした、のふ岩代殿、いか様琴といひ器量さ
いひ、イヤモ中々感心仕る、イヤナニ朝顔とやら、そこは定めてひわるで有らう、身共が傍で今一曲
サア、所望だ、アイヤ岩代殿、もふゆるしておやりなされい、去迎は駒澤氏、身共が望を留め
さつしやるは、ソリヤ意地の悪いと申す物、イヤさうではござらねど、彼も定めて勞れませうと存じ
て、ハ、ア然らば曲は止めにして、コリヤ、女、そちも腹からの非人でもあるまい、身の上嘶しも
又一興嘶して聞かせ、サ、どうだ、ハ、ハ、ハ、よう問ふて下さります、お詞にあまへお嘶し申すも
耻づかしながら、元私は中國生れ、様子有つて都の住居、一年宇治の螢狩に、こがれ初めたる戀人ご
語らふ間さへ夏の夜の、短い契りのほいはいわかれ、所尋ぬる便りさへ、思ふに任かせぬ國の迎ひ、親
々にいざなはれ難波の浦を船出して、身を盡したる憂き思ひ、泣いて明石の風待ちに、たま／＼逢ひは
逢ひながら、つれなき嵐に吹き分けられ、國へ歸れば父母の、思ひも寄らぬ夫定め、立つる操を破ら
じと、屋敷を抜けて數々の、憂き目をしのぎ都路へ、登つて開けば其人は、あづまの旅と聞く悲しさ
又も都を迷ひ出で、いつかは廻り逢坂の、關路を跡に近江路や、美濃尾張さへ定めなく、戀し／＼
に目を泣潰し、物のあいろも水どりの、陸にさまよふ悲しさは、いつの世いか成る報ひにて、重ね／＼
の歎きの數、憐れみ給へど斗にて聲をしのびて歎きける、ア扱て哀れなはなし、併し男日照もない世

界に、エ、氣のせまい女だな、イヤもふしゆんだ話して氣がめいつた、寢酒でもたべ氣を晴らさう、
イヤナニ女暇をくれる立歸れ、ハイ、有難ふござります、左様なればお客様、もふお暇申します、
ヲ、朝顔とやら太義で有つた、初めて聞いた身の上ばなし、もし其夫が聞いたならば、嘸満足に思ふ
で有らふ、ノウ岩代殿、左様、ハ、ア是はマア御深切なお詞、有難ふ存じますと、杖探り取り立
てながら、虫がしらすか何とやら、耳に残りし情の詞、名殘惜しさに泣く／＼も、心は跡に探り行く

艶容女舞衣 (酒屋の段)

ころは入相の鐘に散り行く花よりも、あたら盛りを獨寝の、お園を連れて爺親が、世間構はぬ十徳に
丸い天窓の光さへ、子故にくらむ黄昏時、主の妻は火をどもし、表をしめにいそ／＼と出合ひ頭に、
ホ、是は、宗岸様、そちらに居やるはお園ちや無いか、アノ母様お替りもござりませぬかと、いふ
挨拶もごこやらに、疵持つ足の踏み途さへ、低き敷居も越へかぬる、宗岸は、遠慮なく、半兵衛殿お
宿にかど、娘を連れて打通れば、妻は門の戸引立て、サア、先お上りなされませと、奥底もなき詞
の中、それと聞くより半兵衛が、一間を出るし／＼顔、娘を連れて逝れたからは、こちの内には用は
ない筈、何の爲にござつた事と、針持つ詞に妻は氣の毒、イヤもう人様に、追従云はぬ偏屈なこちの
人、必ずお氣にさへられて下さります、此間は嫁女が歸つて居られました、いかいお世話でござりま

せふ、ナンノ／＼半兵衛殿の立腹はみな尤も、三勝とやらに心奪はれ、夜泊り日泊りして、女房を嫌ふ半七、所詮末の詰らぬ事と、無理に引き立て逝だのは、娘にひけを取らすまい爲めおれが氣迷ひ、それから思案をするに付き、唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫌はれうがどうせうが、男の方から追ひ出す迄、戻すと云ふ理屈はない筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひと、悔んでも跡の祭り、圖めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も進まねば、もし病が起らふかと、見て居る親の心は聞、おれも天滿に年古う住んで居れば、人に理屈もいふ者なれど、誤りは詫びねばならぬと、年寄の頬押し拭うて來ました、何角の事は了簡して、今までの通り嫁ぢやと思つて下され、コレ頼みます御夫婦と、誤り入つたる挨拶に、お圖もうち／＼手をつかへ、父様の逸轍で、無理に連れられ歸りしが、一旦殿御と極まつた半七様、嫌はれるは皆私が不調法、ぐどんに生れた此身の科、今から随分お氣に入る様に、致しませう程に、やつぱり元の嫁娘と、おつしやつて下さりませおふたり様と、跡は詞も涙なり、ヲ、何のママそつちさね其心なら、こつちはかはらぬ嫁姑、ノウ親父殿そふぢやないか、イヤさうぢやない、昔唐にも例がある、太公望とやら云ふ人の妻、夫に隙取り月日を経て、詫言に來りし時、鉢の水を大地に明けさせ其水を鉢へ入れよ、元の如く夫婦にならんと、太公望がいはれたと、日外講釋で聞いて來た、それとちやうど同じ事、こなたの方から無理隙取つて、今さら嫁と思へとは、いつ迄云ふても返らぬ事、口詞

ヲかすと、早ふ連れて逝しやれ／＼と、にべもしやくりも納戸口、顔を背けて居たりける、ヲ其腹立は尤々、重々不調法は此天窓にめんじ、れうけんしてどうぞ嫁に、いやでござる、悴めは勘當したれば、嫁といふべきものもないはず、サアそれもこらしめの爲め當座の勘當、イヤ當座でない七生迄の勘當、ム、其又七生迄勘當した半七が代りに、こなたは何で繩にかゝつた、ヤア、サア半七とは親でも子でもないこなたが、けふ代官所で何の爲めに、縛られて戻らしやつたと、思ひも寄らぬ宗岸が詞に悔り驚く女房、嫁も俱々立寄つて、肌押しぬがせば半兵衛が、小手をゆるめし羽がいじめ、ノウ情なや何故と、嫁はうろ／＼女房も、取り付き歎けば宗岸が、イヤまだ驚く事が有る、聲の半七は人殺し、御尋ね者に成つたわいのと、聞くより二人は又悔りそれは、何故だうした譯、様子を聞かしてコレ／＼半兵衛殿と、問へどもさらに返答は、さし打伏いて詞なし、宗岸涙の目をしばたき、一昨日の晩、山の口で善右衛門を殺したは菫屋の半七と、噂を聞いたときは驚くまいか、悔りせまいか、ひざ腰も抜け果てしが、おもへば／＼不孝者、よい時に勘當さつしやつて、親に難儀のかゝらぬは、まだ此上の仕合せと、思つたは他人の了簡、違つたこなたの縛り繩、科極まつた半七が命、一日なりとも延ばしたいと、人殺しの科を身に引受け、繩かゝつたこなたの心は、眞實心に子を思ふ親の誠と、知ればしる程宗岸が仕損ひ、半七の身の詮義、こなたも勘當してしまひ、おれも娘を取り戻したら、親にかゝ

る首繩もなく、よい事したと世間から、譽める人も有らうが、親と成り舅と成るが、大てい深い縁か
いのふ、斯ういふ時宜に成つた時は、譽められたるより笑はれるが親のしひ、片時も早ふと連れて來
た心はの、一旦嫁におこしたれば、半七がいやがるなら、ハテ尼にしてなど此内で、御夫婦の亡き後
の、香花なりともとらして下され、コレ手を合はして頼みます、詫言が叶はねば、引き放されもしつ
き詰めて、短慮な心も出しおろかど、案じ過して夜の目も合はず、母親はなしたつた一人、あいつ
を思ふおれが因果、こなたの繩目も半七が、科人に成つたら猶可愛いかる、譬へ又た勘當が定めても、
久理切つたが誠でも、眞實親子の肉縁は、切るに切られぬ血筋の親、おれもこなた程はなけれども、
娘は可愛い、まして勘當はせぬ娘、愚痴など人が笑はふが、おりや可愛い不便にござる、コレへ聞
き入れてたへ半兵衛殿と、是迄泣かぬ宗岸が、こらへにこらへしめた涙へを、たくしかけたる叫び
泣き、我強う生れし半兵衛も、舅の心根思ひやり、チ、道理ぢやへ宗岸殿と、跡は詞もないじやく
り、妻もお園も一時に、四人が泪高水に樋の口あけし如くなり、半兵衛泪の内よりもお園が顔を打守
り、何から何迄氣を付けて、孝行にしたもるこんな嫁が尋ねた連、最一人と有る物ぢやない、世間
の人の嫁鑑、半七が事は思はぬが、こなたに別る、半兵衛は、よくへ不仕合せ、いなせとむないか
へしとむない、とは思へどもこつちに置けば此儘若後家、おりやそれが可愛い、いどうござる、そ

れで詫言聞き入れぬ、了簡して呼び戻さぬ、コレ嫁女、必ずむごいと恨らんではしたもんなや、一人の
悴はお尋ね者、あすより誰を力にせうぞ、孝行にしたもつたが今では結句、うらめしいとせき上げ
せき入る、舅の背さすお園も正躰なく、伏し沈むこそ道理なり、半兵衛漸く顔を上げ、云はねばな
らぬ事もあれど、孝行な嫁女の手前、胸にせまつて云ひにくい、宗岸殿奥の間で云ひ明かさん、コレ
お園、そなたをさらへ嫌うじやない、氣にかけてたもるなや、舅殿へ咄す中暫く爰にと、三人はし
ほへ奥へ泣きに行く、心の内ぞ哀れなり、跡にお園が憂き思ひ、かゝれとてしもうば玉の、世のあぢ
きな身一ツに、結ばれ解けぬ片糸の、くりかへしたる獨言、今頃は半七様、ごにどうしてござら
うぞ、今更返らぬ事ながら、わしといふものないならば、半兵衛様もお通にめんじ、子迄なしたる
三勝殿を、とくにも呼び入れさしやんしたら、半七様の身持ちも直り、御勘當も有るまいに、思へば
へ此そのが、去年の秋の煩ひに、いつそ死んで仕まふたら、斯うした難義は出來まいもの、お氣に
入らぬと知りながら、未練なわたしが輪廻故、添臥はかなはず共、おそばに居たいと辛抱して、是迄
居たのがお身の仇、今の思ひにくらぶれば、一年前に此の園が、死ぬる心が付かなんだ、こらへてた
へ半七さん、わしや此やうに思ふて居ると、恨らみつらみは露ほども、夫を思ふ眞實心、猶彌増さる
うきおもひ、あすはどうかから父様に、又連れられて、天滿へ逝た半七様の、ひよつとしたはかない便

りを聞くなれば、思ひ死にに死ぬるであらう、逆も浮世に立たぬかくご、嫌はれても夫の内、此家で死なば後の世の、もしや契りのつなにもと、最期を急ぐ心根は、餘所の見る目もいちらしし、斯かる哀れも知らぬ子の泣き聲に目やさましけん、一間を出でて乳飲まふ、乳がのみたいおば／＼と、お園の膝により添う子の、顔見て悔り抱き寄せ、ヤアをなたは美濃屋のお通ぢやないか、爰へはどうしておじやつたぞ、ふしぎながらも抱き上げれば、半兵衛宗岸母親も、一間の内を轉るび出で、コレ／＼女、忝けない其心、障子の内で聞きたびに、拜んで斗り居たわいの、禮いふ事もたんと有れど心がせくは此子の事、美濃屋のお通といはしやつたは、半七と三勝の、アイお二人の中に出來た、お通と云ふは此子ぢやはいな、ヤア／＼親父殿きかしやつたか、ヲ、聞いて居る、其またお通をナ、何で、捨子にしてこちへおこした、こりや評が有らう、辨懐か何所ぞに、書いた物でもないか、早ふ尋ねて見やといふ内に、あくせく明るる守袋、内よりばらりと落ちたる一通、取る間遅しと封押し切りヤア何ぢや、書置の事と書いて有る、ヤア／＼コレ／＼嫁女、そなたのよい目で、よい目でちやとよみや／＼、アイ／＼、ナニ／＼十度び契りて親子となる、父の御恩は山よりも、高さこの世のおしへ、我が身にも辨まへ居り候へども、其御恩も得送らず、儘ならぬ義理にからまれて、心にもあらぬ不孝の罪、御免し下され度、候わけて母様の御養育、申しお前の事でござりましよ、お聞きなされませい、ヲ、よう聞

いて居り升はいの、聞いているのさ、障子よりもれ出づる、月はさゆれど胸の間、エ、時もときと降り稽古、そして其迹は何と書いて有るぞ、アイ母様の御養育海よりも深き御恵み、親父様の御機嫌悪い時には、蔭になり日なたになり、幾千万のお心づかひも、泡と消行行く我難義、人を殺せし身と成り候へば、思ひ設けぬ御別れ、エ、そんならやつぱり半七殿は、ヲイノウ嫁女、善右衛門を殺しましたわいのよ、ハアあの善右衛門と云ふやつが、大ていや大かた悪い奴ぢやないわいの、あんな悪者でも喧嘩両成敗、我子の命を解死人に取らるゝと、思へば／＼宗岸殿、口惜しいわいの／＼、無念にござると述懐泪、見聞くお園は以前の剃刀、なむあみだ佛と覺悟の躰、是はと驚く母宗岸、叶はぬ手にも半兵衛は、漸やう押へてコレ嫁女、年寄斗りを跡に置き、死ぬとは胴欲ぢやわい／＼、エ、是が死なずに居られませうか、放して殺して下さんせ、ヲ、娘尤もぢや／＼わいナア、老少不定の世の中と、聞き流したも今身の上、みづ／＼とした若い者、義にせまつて死ぬるとは、ノウ半兵衛殿、宗岸殿、思ひ廻せば廻はす程、チェ、口惜しいわいの／＼、鴛鴦のかた羽のとほとほと、子に迷ひ行くさよちざり、むざんやな半七は、今背限りの命ぞと、三勝伴ひしほ／＼と、心にかかる我子の顔、名残りにせめて今一度と、伴に戸口に夜の鶴、内にはそれと白髪しろがみの母、心ならねど書置を、又取り上げて讀む文章、人を殺し一日も、生きながらへる所存は無く候へ共、お通と申す娘一人ござひて、殊にかよは

き質生、不憫さあまる親心、それに心が引かされて、けふ迄ながらへんへども、所詮助からぬ身にいへば、思召しも願みず、お通を遣はしひま、私のちいさく成りしと思召され、ドレ、ばい見しやいの、エー私のちいさく成りしと思召され、御養育の御世話の程、くれぐれ頼み上げ、子を持つて親の御恩を知ると、お通が不便さいぢらしさに、御二人様の御恩の程、猶更此身にしみこたへ、有りがたく存じ奉は、又々心がかりは、親父様の御勘當、相果ては跡にても、御赦し下され様、母様宜しう御執りなし、これのみ黄泉の障りにござぬ、ヲ、道理ぢや、可愛いやと、泣聲もるゝ表には、半七が身にこたへ、かゝる歎きも我故と、思へば今更空恐ろしく、身を悔んだる男泣き、袖や袂をかみしめ、泣く音と、むる憂き思ひ、こなたはお園が、猶泣く、取上ぐる書置の、よむもはかなき世の中に、女は其家に在つて、定まる夫一人を頼みに思ふ物にひ所、其頼みに思ふ我等が身持ち、いつしかあいそらしい詞も掛けす、遂に一度の添臥もなく候へども、其色目も致さずして、夫大事と親たち大事に、辛抱に辛抱なされ候段、山々嬉しくぞんじ參らせぬ、今迄すげなう致せし事も、さらさら嫌ふではなく候へども、三勝とはそもじの見ぬ先からの馴染にて、子迄設けし中に候へば、互に退き離別も成りがたく、それ故疎遠に打過ぎ參らせぬ、併し夫婦は二世と申す事も候へば、未來は必ず夫婦にて候、ヲ、こりやまあ誠か半七様、コリヤやい娘、未來で夫婦と書いて有るかいやい

アイ、未來ぢやが、一日なりと此世で、女房にしてやりたいわい、何としてマア此半七は、善右衛門を殺しましたぞ、ドレ、娘もちつとぢや、コレおれが讀ませう、とかく不孝の我等にいへ共、死後には嗚やお二人や、宗岸様の御歎き、随分々力を付け、此身にかはつて御孝行になされ玉はるべくい、申し残したき事共は數々に候へども、涙に字生も見えがたく、あら、筆この申候、只々お通が事のみ頼み上げ、此上はながらも後のお念佛、南無阿彌陀佛、讀みもおはらす宗岸親子、又臥ししづめは半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ、初孫の顔が見たいと、心に思へど世間の義理で、是迄逢ひも見せなんだ、斯ういふ事と知つたらば、顔見ぬ内がまして有つた、あいらし盛りの此お通、半七といつしよにくらすなら、よい楽しみで有らう物、コレば、見やいの、アレ何にも知らずに、手打やあば、ばつかり、ヲイ、こりや孫よ、モウ父も母もない程に、此ば、と一所に寝いよとはいふ物の乳もなく、今から先きの寝起きにも、嗚や歎げかん、親々が知らずに居るか胴慾者、むごい心、いちらしやといふ聲もるゝ三勝が、思はず乳房を握りしめ、乳は爰に有る物を、飲ましてやりたい、顔見たい、乳がはるわいなうと身をふるはせ、かけ入らんも關の戸に、空音もならず羽振鳥、親はともに血の涙、子はやすかたの安からぬ、悲しさせまる内とぞと、一度にわつと湧き出づる、泪浪花江いづみ川に、なみだ汲み出すごとくなり、半七は齒をくひしめ、かばかり深き御情、是

非もなや勿體なや、不孝を赦されたまはれど、悔み歎けば三勝も、皆我ゆへの御事と、俱にわび入るうちに半七、いつまで泣いても返らぬくりごと、親父様の御索目なほはようほごくは身の最期、イヤ〜急がんなアおじやと、立ち上りしが今生の、わかれにせめて御顔をど、差覗けば三勝も、お通を一目と延びあがり、見れども親子隔ての關、何と千萬無量のおもひ、兩手を合せふしおがみ、おさらばおさらばといふ聲も、歎きにうづむ我家のうち、見かへり〜死に行き、身のなり果てぞあはれなる半兵衛はつと心付き、此書置の文體では、今宵さいごと極わめし半七、宗岸殿も手分けして、行衛を尋ねんサア早う〜と身づくろい、立ち出でんとする所に、思ひがけ無く表より、ヤア〜かたがた、善右衛門を殺せし科人とが、苗屋半七召捕たりと呼ばはつて、庄九郎に繩をかけ立ち出づる宮城十内、半七が殺せし今市の善右衛門は、國元にて用金を盗みし盜賊、召捕りにきたりし所、一昨夜半七に殺されし由、則ち善右衛門の同類たる庄九郎を召捕り、彼が白狀にて半七親子に科なしと、立寄つて半兵衛が繩をほごけば、四人が悦び夢ではないかと伏し拜み、コレ〜親父殿、十内殿のお情で半七が命も助かるといふ、どうぞ命の有る中に、どめて下され半兵衛殿と、あせるを聞いて十内が、何半七が死に〜いたとや、エ、をそかりし殘念〜、役目なれば心に任かせず、夜明けぬ中はやお行きやれど、十内が花も實もあるさくら井の、掟おきてやはらぐ國の名も、大和五條のあかね染、今色上

げし艶ちかすがた、其三勝がことの葉を、爰に移してとごめけれ。

奥州安達原 (袖萩祭文之段一節)

立つて入りにける、只さへくもる雪空に、心の關のくれ近く、一間に直す白梅も、無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは血筋の縁、不便やお袖はとぼ〜と、親の大事を聞くつらさ、娘お君に手を引かれ、親は子を杖子は親を、走らんとすれど雪道に、力なく〜たどり來て、垣の外面とせにア、喜しや、たれも見咎めはせなんだの、イ、エ、門口に侍士衆さむらいしゆが、いねぶつて居やしやつた間に、オ、賢こい子ぢや謙杖さまは此春から、主のおやしきにござらす、此宮さまの御所にと、聞いて何うやら斯うやら、こゝまで來た事は來たけれど、御勘當の父上母さま、殊に淺間しい此容なまで、誰れ取次いでくれる者もあるまい、お目にか〜つて御難儀の様子ようすが、どうぞ聞きたやと、さぐればさぐる小柴垣、こゝはお庭先のしほり門、戸を叩くにもた〜かれぬ、不幸のむくひ、此垣一ト重が黒がねの、門より高ふ心から、泣く聲さへも憚りて、簀戸すいどに喰ひ付き泣き居たり、謙杖はかくともしらす、垣の外に誰れやら人聲、アレ女どもはおらぬかど、言ひつゝ自身庭の面、外には夫れとなつかしき、耻づかしさもまた先立つて、おほふ袖萩知らぬ父、明けて悔くり戸をびツしやり、何の御用と侍女こしもども、濱夕も庭に立ち出で、謙杖どの何ぞいの、イヤ何でもない、見苦しい奴がうせおつた、侍女ども追ひ出せ、ば〜アンナもの

は、見る物でない、こつちへお來やれ〜と、夫の言葉に氣もつかず、何をきよ〜言はつしや
 る、犬でも這入りましたかと、何心なく戸を明けて、よく〜透せば娘の袖萩、はつと呆されてまた
 はつと、娘は聲を聞き知れど、母さまかとも得言はず、母はかわりし形を見て、胸一ぱいにふさがる
 思ひ、押し下げ〜さだめない世と言ひながら、テモ借ても〜思ひがけない、コレ〜ば、何いや
 る、イヤアアヤツバリ犬でござんした、ほんに憎い犬め、親に背いた天罰で、目も潰れたナア、神は
 とけにも見放され、定めて世に落ちぶれて、おらうとは思ふたれど、是れはまたあんまりきつい落ち
 ぶれやう、今思ひ知りおつたかと、餘所にしらすも涙聲、様子を知らねば侍女ども、さつても慮外な
 物貰ひなら仲間衆には貰ひで、お庭先へむさくろしい、とつと、出やとせり立てられ、ハイ〜ど
 うぞ御了簡なされてまちつとの間、ハテしつこい女中の口々、ヤレ待つてくれ女ども、ヤイ物貰ひ、
 おあかしが欲しくばなせ歌を唄はぬゾ、願ひのすぢも何なりと、諷うて聞かせと夫の手前、チツトの
 間など隙入れたさ、アイとはいへど袖萩が、久しぶりの母さまへ、琴の組とは引きかへて、露命をつ
 なく古糸に、皮も破れし三味線の、罰も慮外もかへりみず、お願ひまをしたたまつる、今のうき身の
 はづかしさ、父上や母さまの、お氣に背きしむくひにて、二世の夫にも引きわかれ、泣き潰したる目
 なし鳥、二人が中のコレこのお君とて、明けてやう〜十一の、子を持つて知る親の恩、知らぬ祖父

様ば、様を、慕ふ此子がいちらしさ、不便とおぼし玉はれと、跡諷ひさせき入る娘、孫と聞くより
 濱夕が、飛び立つばかり戸の透間、いだき入れたさ絶りたさが、祖父もかわらぬ逢ひたさを、隠して
 ワザとごがり聲、ヤアかましい小歌、聞きたうない、女ども、奥へいて、御客人について居よ、皆
 いけ〜、イヤサば、ナニうち〜、早う畜生めを擲き出してしまわしやれ、サ、アコレ腹立ちには
 尤もなれど夫れはあんまり、ハテ扱ておぼ、隙入るほど爲めならぬ、武士の家で不義した女郎、打き
 出すとはまだ親の慈悲、長居せば打ちはなさうか、親の恥を思ふて名を包むはまだしもと思ひの外、
 今となつて身の置き所がなさの詫び言、耻面もかまはず能くうせた、たいしは親へ頼めてに、ワザと
 其形を見せにうせたか、憎くい奴と怒りの聲、袖萩悲しさやる方なく、なんの〜誓文勿体ない、去
 りながらさう思し召しも御尤も、大恩を忘れたいたづら、我身ながら愛想のつきた、このからだ、お詫
 びまをしたとてお聞き入れが何のある、ソリヤ思ひ切つてはおりまする、お屋敷の軒までも、來られ
 る身ではなけれども、お命にかゝる一大事と、聞いて心も心ならず、顔押し拭ふて参りました、不孝
 の罰で目はつぶれる、此子を連れてこの軒では追立てられ、かしの橋では打ちた〜かる、憂き
 目に遇ふても此身の罪にくらぶれば、まだ業のはたしやうが足らぬと、未來が猶しも恐ろしい、此上
 のお願ひには娘のお君、お目見ねどまをすは慮外、只非人の子とおぼしめし、たつた一言お言葉を、

おかけなされて下されど、歎けばお君も手をあはせ、モウシ且那さま奥さま、外に願ひはさごりませぬ、お慈悲に一ト言物おつしやつて下さりませと、言ひ馴れし袖乞ひ言葉に、濱夕が可愛いやナ、子心にさへ身を耻ぢて、祖父さまともば、様ども、得言はぬ様にしおつたは、皆己れが徒行ゆる、畜生の様な腹から、見事犬猫も産みおらす、生れおつると乞食さす子を、アノ様におとなしう、産み付けざまは何事ぞ、あんまり憎ふて、おりや物が言はれぬと無言、言ふのは可愛いさの裏の濱夕、幾重にもお慈悲くと泣くばかり、謙杖猶も聲あらゝか、親が難儀に逢ふが逢ふまいが、女めがいらざる世話、おなじ姉妹でも、妹の敷妙は八幡殿の北の方と、呼ばるゝ手柄、姉めは下郎を夫に持てば、根性までが下主おんなめと、耻しめられてワツと泣き、下主下郎とはおなさけない、夫も本は筋目あるさむらひ、黒澤左中とは浪人の假りの名、別れた時の夫の文、筋目も本名も書いてござんす、コレ見ればと差出すを、取次ぐ紙の端くれも、詫びの種にもなれかしと、思ふは母より直方が、讀む文體の奥の名に、奥州阿倍貞任とは南無三寶、扱ては貞任と縁組せしかと心もそいろ、懐中の一通取り出し引き合せば借てこそ同筆、ハアはつとばかり當惑の、色目を見せじとすと立ち、穢らはしい此状、ふよ／＼以て逢ふことならぬ、サア奥、こちへ、ハテ愚圖つかすと早ふおじやと、するご言葉にせがまれて、母も是非なく立つて行く、コレ暫し、モウ逢ふとはまをさせぬ、お身の難儀の其譯を、

どうぞ聞かして下さりませ、モウシ／＼と延び上がり、見れど盲目の垣のぞき、早や暮れすぐる風につれ、折りからしきりに降る雪は、身は濡れ驚の芦垣や、中をへだつる白妙も、天道さまのお憎しみうけし此身は厭はねど、様子聞かねばなんぼでも、去なぬ／＼と泣く聲も、あらしと雪にうづもれて聞へぬ父と恨み泣き、次第々々に降りつもる、寒氣に肌も冷へきれば、持病の瘰癧のさし込んで、かつばと轉べばお君はうろ／＼、さする脊中も釘こほり、涙片手に我が着物、一重をぬいで母親に、着せてしよんばり白雪を、すくふて口にふくますれば、やう／＼に顔を上げ、オ、お君モウようござる、此又冷へることわいノ、そなたは寒うはないかや、イエ／＼わたしは温かうござります、ヨウ着て居やるか、ドレ／＼マア、そなたはコリヤ赤裸身、着物は何うしやつた、あんまりお前が寒からうと思ふて、エツエ、親なればこそこの子なればこそ、わしが様な不孝な者が、何としてそなたの様な、孝行な子を持つた、これも因果の中とて、だきしめ／＼泣くなみだ、絶へかねて襦袢ひらりと濱夕が、さつきにから皆聞いて居る、ア、ア儘ならぬが浮世ちやナア、町人の身の上ならば、若いものぢやも、徒行もせいぢや、そんな好い孫産んだ娘、ヤレ出かしたと呼び入れて、聲よ舅よと云うべきに、抱きたうてならぬ初孫の顔もろくに、得見ぬは武士に連れ添ふあさましさと、諦めていんでくれ、ヨ、と云ふ中にも奥、濱夕と呼ぶ聲に、アイ／＼そこへ参ります、娘よ孫よモウさらば、可愛いの者やと

傾城阿波の鳴戸 (順禮唄之段一節)

肝心の其刀、ありかも知れぬ其内に、若し此のことがあらわれては、これまで盡せし夫の忠義、皆むだ事となるのみか、死んだ後まで盗賊に、名をけがすのが口おしい、ぬすみ街りも身の慾にせぬ、女夫が誠を天道も、あわれみあつて國次の、刀の詮義すむまでの、夫のいのち助けてたべと、心の内に神ほごけ、ちかひは重き觀世音、ふだらくや岸打つ波はみくま野の、那智のお山にひびく瀧津瀬、年はやうくごふくの、道を加けたる笈づるは、同行二人とせるせしは、一人は大慈悲のかげたのむ、ふる里をはるく、に紀三井寺、花の都も近くなるらん、順禮に御報謝と、言ふも優しき國なまりてもしほらしい順禮衆、ごれく報謝進んせうと、盆にしらげのころざし、あい有りがたうござりますと、云ふ物がしから爪はづれ、可愛いらしい娘の子、定めてつれ衆は親御たち、國はいづくと尋ねられ、あい國は阿波の徳島でござります、お徳しま、さつても夫れはまあなつかしい、わしが生れも阿波の徳島、そして父さまやか、様と、一所に巡禮さんすのか、いわく其と様やか、様に逢ひたさ故、夫れでわし一人、西國するのでござりますと、聞いて何うやら氣にかゝる、お弓は猶も傍により、ム、父さまか、様に逢ひたさに、西國するとは何うした譯ちや、夫れが聞きたい、まあ

其親達の名は何と云ふぞいの、あい何うした譯ちや知らぬが、三ツの年にと、様、か、様もわしを、ば、様に預けて、何處へやらいかしやんしたげな、夫れでわたしは祖母さまの、世話になつて居たけれど、どうぞ父さまやか、様に、逢ひたい顔が見たい、夫れで方々と尋ねて、あるくのでござりますと、様の名は阿波の十郎兵衛、か、様はお弓と申しますと、聞いて恠くりお弓は取り付き、これく、あの父さまは十郎兵衛、か、様はお弓、三ツの年別れて祖母さまに育てられて居たとは、疑ひもない我むすめと、見れば見る程おさな顔、見おぼへのある額の黒子、やれ我が子かなつかしやと、云はんどせしがいや待てしばし、夫婦は今も捕るゝいのち、元より覺悟の身なれども、親子といへば此子にまで、どんな愛き目がかゝらうやら、夫れを思へばなま中に、名のり立てして憂き目を見んより、名のならで此儘かへすのが、かへつて此子が爲めならんと、心をしづめ余所々しく、お、夫れはまあ、年ともゆかぬに、はるくの所を、よう尋ねに出さしやつたのう、其親たちが聞いたなら、さぞ嬉しうく飛び立つやうにあらうが、まゝならぬが世の愛きぶし、身にもいのちにもかへて、可愛い子を振り捨て、國を立ち退く親御の心、よくの事であらう程に、むごい親とかならず、恨まぬがよいぞや、いわく勿体ない、何恨みませう、恨むことはなけれども、小さい時に別れたれば、と、様やか、様の顔もおぼへず、よその子供衆がかゝさんに、髪結ふて貰ふたり、夜は抱かれて寝や

しやんすを、見るとわしも母さんが、あるならあのやうに髪結ふて貰ふものと、うらやましようござんす、どうぞ早う尋ねて逢ひたい、ひよつと逢はれまいかと思へば、夫れが悲しうござんすと、泣きじやくりするいちらしさ、母は心も消ね入る思ひ、さてもく世の中に、親となり子と生るゝ程、深い縁はなけれども、親が死んだり子が先き立つたり、思ふ様にならぬが浮世、こなたも何れ程たづねても、顔も所も知らぬ親達、あはれの時は詮ない事、モ一尋ねすと國へ逝んだがよいわいの、いわく戀しい父さまや母さま、たとへ何時までかゝつてなど、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅行ちやて、何處の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり山に寝たり、人の軒の下に寝てはたゝかれたり、こわい事や悲しい事、とゞ様やかゝ様と一所に居たりや、こんなめには逢ふまい物を、何處に何うして居やしやんすぞ、遇ひたい事ちや遇ひたいと、ワツト泣き出す娘より、見る母親はたまり兼ね、オ、道理ぢやいぢらしやと、我れを忘れて抱き付き、前後正体なげきしが、是程親をしたふ子を、何とこの儘逝されう、いつそ打明け名乗らうか、いやく夫れでは此子も同じ罪、その時の悲しさを、思ひまわせば去なすが爲めと、オ、だんくの様子を聞き、我が身の様に思はれて、悲しいとも情けないとも、云ふにいはいれの事ながら、兎角いのちが物だね、まめでさへ居りや又、遇はれまいものでもないこれ仕付けぬ旅の身をいたため、わづらひでも出りや悪い、ごこを證擬たづねふより、そのはゞ様の

方へいで居るとの、追付けとゞさまや母さまが、遇ひにいてちや程に、悪い事は云はぬ、思ひ直してこれから直に、國へいで随分まで、親たちの尋ねてゆかしやるを、待つてゐるのが好いぞやと、なだめすかすを聞き分けて、あいくかたじけなふござります、お前が其様に云ふて泣いて下さりますよつて、何うやらかゝ様のやうに思はれて、わしやごこが逝にともない、ごんな事など致しませう程に、モ一シお家さま、お前のお傍にいつまでも、わたしを置いて下さりませ、エ、悲しい事を云ひ出して、又泣かすのかいの、さつきにから私も子のやうに思ふて、ここに置きたい逝しとむないと、さまく思ひ廻せども、ここに置いては何うも爲めに、ならぬ事があるによつて、夫れで難面なういなすのちや程に、聞き分けていんだがよいぞやと、云ひつゝ内へ針箱の、底をさがして豆板の、まめなとを悦ぶはなむさけど、紙に包んで持つて出で、コレ何程一人旅でも、たんと錢さいありや泊める、わづかなれ共こころざしの此金を、路金にして早ふ國へいにや、かならずく、煩ふてはしたもんなど、銀を渡せば押し戻し、嬉しうござんすけれど、金は小判と云ふものを、たんと持つておりますそんならモ一参します、かたじけなふござりますと、泣くく立つを引きとごめ、それは爾ふでも是れはわしがこころざしと、無理に持たしてちりうちらはらひ、コレもう去やるか、名残りがおしい別れとむない、コレ今一度顔をど、引き寄せて見れば見るほど胸せまり、離れがたなき憂き思ひ、夫れと

知らねごまことの血筋、名残りおしげに振り返り、何處を何うしてたづねたら、どと様や母さまに、あはれることぞ遇してたべ、南無大悲の観音さま、父母のめぐみも深き粉河寺、ほどけの誓ひたのもしきかな、泣く／＼別れゆく、あをを見おくり／＼延び上り、コレ娘、まあ一度こちら向いてたも、折角ながの海山こへ、艱難してあこがれ尋ねるいと子に、ふしぎと遇ひは遇ひながら、名乗らで歸す母が氣は、ごの様にあらうと思ふ、狂氣半ぶん、半分は死んで居るわいの、まだ長生のある子をは親ゆゑ路頭に立たすかと、其儘そこにごつと伏し、消ね入るばかり歎きしが、起きなほつてなみだをおさへ、イヤ／＼何う思ひあきらめても、今わかれては又、あふ事はならぬ身の上、たどへ難義がからばかかれ、又其時は夫の思案、程はゆくまい追ひついて、連れて戻らうそうちや／＼と、子に迷ふ道は親子のわかれ道、跡をしたふて尋ねゆく。

山崎 與治兵衛 壽の門松 (中巻ノ一節)

與次兵衛見舞として毎日淀の渡舟、梶田治郎右衛門は相親家の聲を思ふも娘の爲め、老の心を惱ませども、父淨閑は左もなく、治部殿お出で、昨日のさしかけの將基、勝負付けましよ、サア御坐れ、これは餘りな淨閑老、拙者が毎日老足を運ぶも、與次兵衛事氣遣ひさ、將基さしには參らぬ、昨日の勝負は何方らへなりと付けてお仕舞ひ／＼といへども、いや／＼馬鹿奴が事は運次第、昨日の駒動かせ

す置きました、サア御坐れ／＼、然らば勝つても負けても是一番、昨夕から盤の上とつくど見定め、工夫した相手とさすはこはもの、お手は此方か、サア遊ばせ、先づ飛車先きの歩を突きませう、ヤ此成金して遣ふでの、斯う寄りませう、淨閑頭を叩いて、ハア、南無三、此馬落ちた、深田に馬を駈落し、引けども上らず韃でとも行かぬ望月の、駒の頭も見ればこそ、むづかしゆなつたと案じける、お菊盤の側に寄り、これ父様、彼方の方が落ちれば此方も落ちる、兩方の睨み合ひで何時までも埒明かぬ、迷惑する駒は只だ一枚、淨閑様のお手には金銀が澤山ある、慾を離れて金銀さへおうちなさればこの此父様の、向ふの淨閑様の、此馬は助かる、何卒手にある金銀を打出させます様に、思案して見さしやんせ、合點か／＼と袖を引けば、治部右衛門打首肯き、オ、／＼能う智恵付けた、呑み込んだ、といへども淨閑氣も付かず、親ちやと思ふて助言いふまい／＼、又ちよつこりと歩で合ひ致すム、シテお手に何／＼、淨閑が手には金三枚、銀三枚、歩も御座る、此歩で廻はしたら未だ金銀が殖なましよ、いかい金持羨ましいか、金持とは此角が白眼んで居る、斯う寄つたらば金銀出して打たすばなるまいぞ、でも金銀は放さぬ、桂馬をあがる、治部右衛門堪に兼ね、ハテいかい吝嗇坊な澤山、金銀握りつめて何になさる、來世へ持つて往かる、か、これ御覽なされ、此飛車を斯う引けば、天にも地にも只一枚の此方に此の王が、片隅へ座敷牢の如く追ひ籠められ、今の間に落ちるが、金で

も銀でも打散らして、圍ふて見る氣は御座らぬか、我々が吝い知れた事、座敷牢へ入らうが、都詰にならうが、金銀は手放さぬ、歩あしらひでも見しらせう、此方も歩を以てふに首を提げらるゝが悔みはないか、構はぬ、先づ逃げて居ませう、コレ其内に香車の鍵を以て、鍵玉に上げらるゝが、それでも金銀出すまいか、勿躰ない事、鍵玉に上げられうが、獄門に上らうが、手前の金銀は放さぬ、と、兩馬強き慾の皮、傍でお菊は氣を揉みて、包む涙も手見せ禁、命手詰と見々にけり、治部右衛門腹立ち顔、盤中の駒掻き寄せ引攪み、淨閑が眉間へぐわらりつと投げ付けたり、お菊はつと驚ろけども、淨閑は恟ともせず、治部右衛門膝立て直し、耻を知れ淨閑、兩親家は元と他人、駒を頬へ投げ付けられ、咎めもせぬ耻知らずに、いふも國士の費ながら、將基に托せ、金銀出して暖ひ、與次兵衛命助けよといふ寓言、合點せぬお主でなし、歩に首を提げられ、鍵玉に上げられても、金銀とては出さぬとは、治部右衛門に氣を焦らせ、面白いか、可笑しいか、其方も獨子、此方も獨娘、兩方共に懸替なし、聲を子と思ふて居るか、嫁を娘と思はずか、與次兵衛が斬られたら、可愛いや菊が歎かうかと、思ひ遣つてたもらぬは、エ、さりとは恨めしい、縁組の時、婆々が留めて、小身なりとも、侍に縁組みたい、何んぼう富限者金持でも、町人とは馬が合ふまいとくれと留めた、いや、と、名に觸れた山崎淨閑、武士交りもする仁と、我一人情張つて、此頃婆々が恨み言、お主が吝い無慈悲

から、五十年添ふ爺婆々の、夫婦合ひまで不和になり、我が子の命に替へぬ金銀、さぞや親類縁者が飢死するとも構ふまい、我こそ浪人、主人持つた一家もある、物知らずと縁を組み一門の名を汚す、無念至極とばかりにて、喘き上げ、泣きければ、淨閑もしばしば目、侍の子は、侍の親が育て、武士の道を教ゆるゆゑに武士となり、町人の子は、町人の親が育て、商賣の道を教ゆるゆゑに商人となる、侍は利徳を捨て名をもとめ、町人は名をすて、利徳を取り金銀をためる、是が道と申すもの、如何なる大病難病も、病には療治種々ある、國法で取らるゝ命には、人參で行水させてもいかな、助からねど、金銀では助かる、命の買はるゝ金銀、大事の寶といふ事を與次兵衛めが知つたれば、此難儀は仕出さぬ、何程惜み貯へても、死んでは帷子一枚とは、此淨閑も知つたれども、死ぬるまで金銀を神佛と尊ぶ、是が町人の天の道、金の罰の當つた奴、未だ此上に惜氣もなう金出して、如何なる天罰大難にがな遣ひ居ろかと、可愛い程猶出しかぬる、齎い名を取る此淨閑、金銀ばかり惜むでなし、塵灰まで惜い物、たつた一人の世忤の命、惜ふなうて何とせう。

菅原 傳授 手習鑑 (寺子屋段)

竹田出雲作

一字千金二千金、三千世界の寶ぞと、教へる人に習ふ子の、中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、いたはり侍き我ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所替へ、子供集めて讀書の、器用不器用、清

書を、顔に書く子と手に書く子、人形書く子は天窓掻く、教へる人は取分けて、世話をかくとぞ見ゆにける、中に年かさ五作が息子、コレ皆は見や、お師匠様の留守の間に、手習するは大きな損、おりや坊主天窓の清書したと、見せるは十五の誕くり、若君はおとなしく、一日に一字學べば三百六十字との教へ、そんな事、書かすとも、本の清書したがよいと、八つに成る子に呵られて、ませよくと指して、嘲戯かゝるを残りの子供、兄弟子に口過す、誕くりめをいがめてやろと、手ん手に壓尺振廻す、自然天然肩持つも、傳はる筆の威徳かや、主の女房奥より立出で、又こりや例の鬭諍か、おどましや、今日に限つて連合の源藏殿、振舞にいてなれば、戻りもしれぬ、ほんに、こなた衆で、一時の間も待兼ねる、今日は取分寺入も有る筈、晝からは休ます程に皆精出して習うた、それや又嬉しや休みちやと、筆より先に讀聲高く、いろはに、此中は御人被下、一筆啓上候べく、男が肩に堺重文庫机を擔はせて、惻發らしき女房の、七つ計りな子を連れて、頼みませうと言入る、内にもそれと早悟り、此方へおはいり遊ばせと、言ふもしとやか、アイ、愛に愛持つ女子同士、来た女房は猶笑面、私事は此村はづれに、輕う暮してをる者でござりまする、此梳白者をお世話なされて下さりよかと、お尋ね申しにおこしましたれば、おこせ、世話してやろと、結構なお詞にあまね、早速連れて參りました、内方にも御子息様がござりまするぞ、どのお子でござりまするぞ、アイ是が源

藏殿の跡とりでござります、これは、よい御子様や、外にも大勢の子達、いかにお世話でござりませよ、アイ御推量なされて下さりませ、して、寺入は此子でござりますか、名は何と申します、アイ小太郎と申しまして、梳白者でござります、イ、ヤイヤ氣高いよいお子や、折悪う今日は連合源藏も振舞に參られました、是はマアお留主かいな、お待ちなら、私が呼びに參りませよ、イエ、幸ひ私も參つて来る所が有れば、其内にはお歸りでござりませう、これ三助、其持つて来た物、あなたの傍へ上げませ、アツと答へて堺重、柩に乗せたる一包、内儀の傍へ差出す、是はマア、いはれぬ事を、イヤおはもじながら此子が參つたし、此堺重は子達への土産、取弘めで下さりませと、いはねごしれし蒸物煮染、我子に世話を焼豆腐、粒椎茸の入りたるは、奔走子こそ見ゆにけれ、是はマア何から何迄、取揃へて御念の入つた事、戻られたら見ませう、イヤモほんの心計、宜しうお頼み申し上げます、コレ小太郎ちよつと隣村迄往て来る程に、おとなしうして待つて居や、悪あがきせまいぞ、御内證様、往て參じませよと、表へ出づれば、母様わしも行きたいと、縋り付くを振放し、嗜めよ、大きな形して跡追ふのか、御覽うじませ、まだ頑是がござりませぬ、ソリヤ道理いな、ドリヤ叔母がよい物やりましたよ、つい戻つてやらんせと、目でしらすれば、アイ、ついちつと一走りと跡追ふ子にも引かざる、振かへり見返りて、下郎引連れ急ぎ行く、ドリヤこちの子と近付きにと、

若君の傍へ寄せ、機嫌紛らす折柄に、立歸る主の源藏、常にかはりて色蒼ざめ、内入り悪く子供を見廻し、エ、氏より育ちといふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育ち、世話甲斐もなき役に立たずと、思ひ有りげに見ければ、心ならず女房立寄り、いつにない顔色も悪し、振舞の酒機嫌かはしらぬが、山家育ちは知れて有る子供、憎口は聞わも悪い、殊に今日は約束の子が寺入して居りまする、悪い人と思ふも氣の毒、機嫌直して、逢つてやつて下されと、小太郎連れて引合せと、差俯伏して思案の體、幼氣に手をつかへ、お師匠様、今から頼み上げますと、いふに思はず振り仰向き、急度見るより暫くは、打目守り居たりしが、忽ち面色柔らぎ扱々、器量勝れて氣高い生れ付き、公家高家の御子息といふても、おそらく耻かしからず、ハテ扱、そなたはよい子ぢやなうと、機嫌直れば女房も、何とよい子、よい弟子でござんしよが、好いとも／＼上々吉、して其連れて來たお袋は何處に、サアお前の留守なら其間に隣村迄往て來るといふて、オ、夫れもよし／＼大極上、先づ子供と奥へやり、機嫌よう遊ばし召され、夫れ皆お隙が出た、小太郎共に奥へ／＼と、若君諸共誘はせ、跡先見合し夫に向ひ、最前の顔色は常ならぬ氣相、合點の行かぬと思ふた所に、今又彼の子を見て、打つてかへての機嫌顔、猶以て合點行かず、どうやら様子が有りさうな、氣遣ひな聞かしてと問へば源藏、ホ、ウ氣づかひな筈、今日村の響應と偽り、某を庄屋の方へ呼付け、時平が家來春藤玄蕃、今一人は菅相

巫の御恩を被ながら、時平に隨ふ松王丸、此奴病みほうけながら、見分の役と見え、數百人にて追取巻き、汝が方に菅相巫の一子菅秀才、我子としてかくまふよし、訴人有つて明白、急ぎ首討つて出すや否や、但し踏ん込み、請取らうや、返答如何にと、退引きならぬ手詰、是非に及ばず首討つて渡さうと請合ふた心は、數多有る寺子の内、いづれ成り共身がはりと、思ふて歸る道すがら、あれは是れかと指折つても、玉簾の中の誕生と、菰垂の中で育つたとは、似ても似付かず、所詮御運の末なるか、いたましや淺ましやと、屠所の歩みで歸りしが、天道のひかへ強きにや、あの寺入りの子を見れば、まんざら烏を鷺共云はれぬ標緻、一旦身がはりて欺き、此場さへ遁れたらば、直ぐに河内へお供する思案、今暫時が大事の場所と、語れば女房、待たんせや、其松王といふ奴は、三の子の内の悪者、若君の顔はよう見知つて居るぞね、サアそこが一かばちか、生顔と死顔は相格のかはる物、面ざし似たる小太郎が首、よもや贖と思ふまじ、よし又夫れと願はれたらば、松王めを眞二つ、殘る奴原切つて捨て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供と胸を据ゑたが一つの難儀、今にも小太郎が母親、迎ひに來たらば何とせん、此義に當惑、指當つたは此難儀、イヤ其事は氣づかひ有るな、女子同志の口先で、ちよほくさ欺して見よ、イヤ其手では行くまい、大事は小事より願はるゝ、事に寄つたら母諸共、エ、イ、こりややい、若君には替へられぬ、お主の爲めを辨へよといふに胸する、左様でござんす、氣

弱うては仕損せん、鬼に成つてと夫婦は突立ち、互に顔を見合せて、弟子兒といへば我子も同然、さ今日に限つて寺入りしたは、あの子が業か、母御の因果か、報いは此方が火の車、追付け廻つて來ませうと、妻が歎けば夫も目をすり、せまじき物は宮づかへと、共に涙にくれ居たる、かゝる所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乗物、門口に鼻き据うれば、跡には大勢村の者、附き隨うて、申上げます、皆是れに在る者の子供が、手習ひに參つてをります、若し取違へ首討たれては、取返しが成りませぬ、何卒お戻し下されと願へば玄蕃、ヤアかましい蠅蟲奴們、うぬらが忤の事迄身共がしつた事か、勝手次第に連れ失せよと、呵り付くれば松王丸、ヤレお待ちなされ、暫くと、駕より出づるも刀を杖、憚りながら、彼等迎も油断はならぬ、病中ながら拙者めが、見分の役勤めるも、外に菅秀才の顔見しりし者なき故、今日の役目仕終うすれば、病身の願ひ御暇下さるべしと、有難き御意の趣、疎には致されず、菅相函の所縁の者、此村に置くからは百姓共もぐるになつて、銘々が忤に仕立て、助けて歸る術も有る事、コリヤやい百姓めら、さば／＼とぬかさ共、一人づゝ呼出せ、面改めて戻してくりよと、退引させぬ釘鏝、打てばひゞけの内には夫婦、豫て覺悟も今更に、胸轟かす計なり、表は夫れ共白髮の親仁、門口より聲高に、長松よ／＼と呼出せば、オツと答へて出でくるは、腕白顔に墨べつたり、似ても似付かぬ雪と墨、是れではないと赦しやる、岩松は居ぬかと呼ぶ聲に、

祖父様何んぢやとはしごくで、出でくる子供の頑是なき、顔は丸顔木みしり茄子、詮議に及ばぬ連れ失せうと、睨み付けられオ怖や、蚤にもくはさぬこの孫を、命の花落遁れしと、祖父が抱へて走り行く、次ぎは十五の涎くり、ぼんよ／＼と親父が手招き、父よ、おれは最う爰から抱れて往のと、あまへる顔は馬顔で、聲、オ泣くな、抱いてやらうと干鮭を、猫なで親がくはへ行く、私が忤は嫖緞よし、お見違へ下さるなど、斷りいふて呼出すは、色白々と瓜實顔、こいつ胡亂と引捕へ、見れば首筋眞黒々、墨か痣かはしらね共、こいつでない、突放す、其外山家奥在所の、子供残らず呼出して、見せても／＼似ぬこそ道理、土が産した斗芋、子ばかりよつて立歸る、スハ身の上と源藏も、妻の戸浪も胸を据ゑ、待つ間程なく入來る兩人、ヤア源藏、此玄蕃が目の前で、討つて渡そと請合ふた菅秀才の首、サア請取らう、早く渡せと手詰の催促、ちつとも臆せず、假初めならぬ右大臣の若君、搔首捻首にも致されず、暫らくは御用捨と、立上るを松王丸、ヤア其手はくはぬ、暫しの用捨と隙ごらせ逃支度しても、裏路へは數百人を付け置き、蟻の這出る所もない、生顔と死顔は相格がかはるなど、身替りの贗首、夫れもたべぬ、右手な事して後悔すなど、言はれてくわつとせき上げ、ヤアいらざる馬鹿念、病みほうけた汝の目玉がでんぐり返り、逆様眼で見やうはしらず、紛れもなき菅秀才の首、追付け見せう、オ、其舌の根の乾かぬ内に早く討て、とく切れと、玄蕃が權柄、ハツと計りに源藏は

胸を据えてぞ入りける、傍らに聞き居る女房は爰ぞ大事と心も空、檢使は四方八方に、眼を配る中にも松王机文庫の數を見廻し、ヤア合點の行かぬ、先達往んだ餓鬼等は以上八人、机の數が一脚多い其悴は何處にをるぞと、見咎められて戸波ははつと、イヤこりや今日初めて寺イヤ寺参りした子かござんす、何馬鹿な、オ、それ、是が則菅秀才のお机文庫と、木地を隠した塗机、ざつとさばいて云ひ抜ける、何にもせよ隙が油断の元と、玄蕃諸共突立ち上がる、こなたは手詰め命の瀬戸際奥にはばつたり首討つ音、はつと女房胸を抱き、踏ん込む足もけしとむ内、武部源藏白臺に、首桶乗せてしづく出で、目通りに指置き、是非に及ばず、菅秀才の御首討ち奉る、いは、大切な御首、性根をすゑてサア松王丸、しつかりと檢分せよと、忍びの鰐元くつろげて、虚といは、切り付けん、實といは、助けんと、堅唾を呑んで控居る、ハ、ハ、ハ、何の是れしきに、性根所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か、金札か、地獄極樂の境、家來衆、源藏夫婦を取巻きめされ、畏つたと捕手の人數、十手振つて立ちかゝる、女房戸波も身を固め、夫は元より一生懸命、サア實檢せよ檢分と、いふ一言も命がけ、後は捕手向ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰ぞ絶體絶命と、思ふ内早や首桶引寄せ、蓋引明けた首は小太郎、賈といふたら一討ちと、早抜きかける、戸浪は祈願、天道様佛神様憐み給へと女の念力、眼力光らす松王丸が、ためつすかめつ伺ひ見て、ウムこりや菅秀才の首討つたは、まがひなし

相違なしと、いふにも悔り源藏夫婦、傍らきよろ／＼見合せり、檢使の玄蕃は、見分の詞證據に、出かした出かした、よく討つた、褒美にはかくまうた科赦してくれる、イヤ松王丸、片時も早く、時平公へお目にかけん、いか様隙取つてはお咎めもいかい、拙者は是よりお暇給はり、病氣保養致したしオ、役目は濟んだ、勝手にせよと首請取り、玄蕃は館へ松王丸は、駕にゆられて立歸る、夫婦は門の戸びつしやりしめ、物も得云はず青息吐息、五色の息を一時に、はつと吹き出す計り也、胸撫でおろし源藏は、天を拜し地を拜し、ア、有りがたや忝や、凡人ならぬ我君の御聖徳が顯はれて、松王丸が眼を眺み、若君と見定めて歸つたは天成不思議のなす所、御壽命は萬々年、悦べ女房、イヤもう／＼大低の事ぢやござんせぬ、あの松王丸が眼の玉へ、菅相頭様はいつてござつたか、但し首が黄金佛ではなかつたか、似たといふても瓦と金、實の花の御運開きと、餘り嬉しうて涙がこぼれる、ハア、有りがたや尊やと、悦びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎へて見わたる門の戸たゞき、寺入りの子の母でござんす、今漸く歸りましたと、いふ聲聞くより又悔り、一つ通れて又一つ、こりやママ何と、どうせうと、妻が騒げば夫は胸すゑ、コリヤ最前言ふたは爰の事、若君には替へられぬ、狼狽者と戸浪を引退け、門の戸ぐわらりと引明ければ、女は會釋し、コレハマア／＼お師匠様でござりますか、悪さをお頼み申ます、何處に居やるぞ、お邪魔であるにと、いふを幸ひ、イヤ奥に子供と遊ん

で居ます、連れ立つて歸られよと、眞顔で云へば、オ、そんなら連れて歸りませうと、すつと通るを後より、ただ一討ちと切り付ける、女も白物ひつはづし、逃げても逃がさぬ源藏が、及するごに切り付けるを、我子の文庫ではつしと請けとめ、コレ待つた待たんせ、こりやごうちやと、反る及も用捨なく、また切り付ける文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯れ出でしはコハいかにと、不思議の思ひに劍も鈍り、進み兼ねてぞ見ねにける、小太郎が母涙ながら、若君菅秀才のお身がはり、お役に立つて下さつたか、まだか、様子が聞きたいと、いふに恟り、シテ、夫れは得心か、得心なりやこそ此經帷子、文字の幡、ウム其の元は、何人の御内證と、尋ぬる内に門口より、梅は飛び櫻はかるゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん、女房悦べ、悴はお役に立つたぞと、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す、ヤア未練者めと呵り付け、すつと通るは松王丸、見るに夫婦は二度恟り、夢か現か夫婦かと、呆れて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し、一禮は先づ跡の事、是迄敵と思ひし松王、打つてかはつた所存はいかに、いぶかしさよと尋ぬれば、オ、御不審尤も、存じの通り、我々兄弟三人は、銘々に別れて奉公、情けなや此松王は時平公に隨ひ、親兄弟とも肉縁きり、御恩請けた相亟様へ敵對、生命とはいひながら、皆是れこの身の因果、何とぞ主従の縁切らんと、作病構へ暇のねがひ、菅秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目、よもや貴殿はうち

はせまい、なれども身がはりに立つべき一子なくば如何せん、爰ぞ御恩報する時と、女房千代と云ひ合せ、二人の中の悴をば、先へ廻して此身がはり、机の敷を改めしも、我子は來たかと心の著、菅相亟には我性根を見込み玉ひ、何とて松のつれなからうぞ、この御歌を、松は難面くと、世上の口にかゝる悔しさ、推量有れ源藏殿、悴がなくば何時迄も人でなしといはれんに、持つべきものは子なるぞやと、言ふに女房猶せき上げ、草葉の蔭で小太郎が、聞いて嬉しう思ひましょ、持つべき物は子なるとは、彼の子が爲めに好い手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追うたを、呵つた時の其悲しさ、冥途の旅へ寺入りと、早や虫が知らせたか、隣村へ行くといふて、道迄いで見たれ共、子を殺さしにおこして置いてごうマア家へいなるゝ物ぞ、死顔成り共今一度、見たさに未練と笑ふて下さんな、包みし祝儀はあの子が香奠、四十九日の蒸物迄持つて寺入りさすと云ふ、悲しい事が世に有らうか、育ちも生れも賤しくば、殺す心も有るまいに、死ぬる子は媚よしと美しう生れたが、可愛いや其身の不仕合せ、何の因果に疱瘡迄、了うたことちやとせき上げて、かつばと伏して泣きければ、共に悲しむ戸浪は立寄り、最前には連合の身がはりと、思ひ付いた傍へ往て、お師匠様今から頼み上げますと、いふた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が碎ける、親御の身ではお道理と、涙添ふれば、イヤ是れ御内證、コリヤ女房も何んでほわる、覺悟した御身がはり、内で存分はわたでないか、

御夫婦の手前も有る、イヤ何源藏殿、申付けてはおこしたれ共、定めて最後の節、未練な死を致したで御座らう、イヤ若君菅秀才の御身がはりと、云ひ聞かしたれば、潔う首指しのべ、アノ逃げ隠れも致さずにナ、につこりと笑ふて、ム、ム、ム、出かしをりました、利口な奴、立派な奴、健氣な八つや九つで、親にかはつて恩送り、お役に立つは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立つては、嘸ぞや草葉の蔭よりも美しかろ、けなりかろ、忪が事が思ふに付き、思ひ出さるゝと、流石同腹同性を、忘れ兼ねたる悲歎の涙、ノウ其伯父御に小太郎が、逢ひますハイノと取付いて、わつと計りに泣き沈む、歎きも漏れて菅秀才、一間の内より立ち出で給ひ、我にかはると知るならば、此悲しみはさすまいに、可愛いの者やと御袖を、しほり給へば、夫婦ははつと、共に浸する有りがた涙、序ながら若君様へ御土産と、松王つゝ立ち、申付けた用意の乗物、早くくと呼ばれるにぞ、ハツと答へて家來共、御目通りに昇き据うる、早御出でと戸を開けば、菅相亟の御臺所、ノウ母様か、我子かど、御親子不思議の御對面、源藏夫婦横手を打ち、方々と御行衛尋ねしに、何處にか御座なされし、サレバ、北嵯峨の御隠れ家、時平の家來が聞き出し、召捕りに向ふと聞き、某山伏の姿となり、危い所奪ひ取つたり、急ぎ河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面、コリヤ、女房、小太郎が死骸あの乗物へ移し入れ、野邊の送り營まん、アイと返事の其中に、戸浪が心得抱いて來る、

死骸をあじろの乗物へ、乗せて夫婦が上衣を取れば、哀れや内より覺悟の用意、白無垢麻上下、心を察して源藏夫婦、野邊の送りに親の身で、子を送る法はなし、我々夫婦がかはらんと、立寄れば松王丸、イヤ、是れは我子に有らず、菅秀才の亡き骸を御供申す、いづれもは門火くと、門火を頼み頼まるゝ、御臺若君諸共にしやくり上げたる御涙、冥途の旅へ寺入りの、師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の川原で砂手本、いろは書く子をあへなくも、ちりぬる命是非もなや、あすの夜たれか添乳せん、らむ愛る目見る親心、劔と死出の山けふこね、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず、京は故郷と立ち別れ、鳥邊野さして連れ歸る。

玉藻前三段目 (道春館之段)

早夕陽も傾きて、無常を告ぐる鐘の音も、いと淋しき黄昏や、間毎に照らす銀獨の、光靨き白書院程もあらせす入り來る、鶯塚金藤治秀國、素胞の肩肘いかつ氣に、上坐にこそは押直る、斯くと知らせに館の後室、衣紋正しく出迎ひ、御上使様には御苦勞千萬皇子様より御誼の趣、仰せ聞けられ下さりませと、辭讓の詞に一揖し、上意の次第餘の義にあらず、皇子豫御所望有りし獅子王の劔、今日中に指し上ぐるか、左無くば娘桂姫が首討つて渡さるゝか、二つに一つの御返答、サ只今仰せ聞けられよ、ハアコハ存じ掛け無い御難題、其劔は紛失致し所々方々と尋ねれども、今に於て行方知れず、今暫

しの御用捨を、ア、イヤ夫りや成らぬ、皇子御心を掛けられし桂姫、度々催促有ると雖も、兎や角と言ひ延ばし打捨て置かるゝ事、貴族の威勢鈍きに似たりと、以ての外御漬り、劔がなくば桂姫首にして御渡し成されど、退引爲ならぬ釘かすがい、胸に必至と萩の方、途方涙に暮れ給ふ、後ろに始終桂姫、此方の間には初花が、忍んで様子立聞くとも知らず、御臺は涙を拂ひ、とても手詰めに成る上は、孰れ逃れぬ娘の命、未練の申し事ながら一通り聞いて給へ、過ぎ去り給ふ夫道春夫婦の中に子無きを憂ひ、清水の邊なる三神の社へ立願込み、三七日の參籠其歸るさに産子の泣く聲、肌上添ひしは雌龍の鍬形、由緒有る人の胤ならん、神の御告げと連れ歸り、育て上げしは桂姫、間も無く設けしアノ初花右と左に月花と詠み暮らせし姉妹を、是非に一人は無き命、殺さしや成らぬ品と成る、責めて夫が在まさば、問ひ談合も有らう物、何を言ふても身一つに、斯かる憂き目も前生の、報いか罪か悲しやと身を悔みたる御涙、止め兼ねてぞ見わけけるが、思案極めて顔を上げ、杖柱とも思ふ、姉妹、勝り劣りは無いけれども、劔で殺さば三神への恐れと言ひ、殊に義理有る姉妹、爰の道理を汲み分けて、妹の初花を代りに立て給はらば、此上も無い御情けと、云はせも果てず聲荒らげ、ム、スリヤ三神の咎は恐れ、神の御末の皇子の仰せ御用ひ成されぬか、よし夫れは兎も有れ上意を受けた某に、身代り扱とは思ひも寄らず、無益の問答聞く耳持たぬ、サア只今と詰め寄つて、いつかな境まぬ其顔色、叶は

ぬ所と胸を据ゑ、イヤのふ御上使、武士は物の哀れを知ると言ふ、自らが一つの願ひは、コレ此雙六盤、二人の命を天道の指圖に任せ、負けたる方の首を討てば、責めては夫れを定業と、諦めらるゝ事も有る、何卒此義を御了簡、コレ慈悲ぢや情けぢや聞き分けてと、義理と恩愛二筋に、傳ふ泪は雨やさめ、身に振り掛かる桂姫、母の情けの有難さ、御慈悲と云ふも口籠る、振りの袂に白雨の晴れ間は更に見わざりき、エ、様々のよまよいごと、見物爲るもまごろしけれど、ハテ何と爲う是非が無いサきりきりとお始め成され、が勝負が付くか直ぐに寂滅、ヲ、成程々々、夫れと明かさば女氣の、歎きに心掻き曇り、取り亂しては詮も無し、只餘所ながら暇乞ひ、一思ひにと云ひさして、泣くく取り出す、用意の褥四隅には櫛しきりの一本も露を待つ間や蜉蝣かげろうの、哀れ儚はかなき有様を、几張の影に采女之助、斯かる難義も我れ故と、思へど出るにも出られぬ時宜、千々に心を苦しめる、思ひは同じ母親が、是れが冥途の使ひかと、思へど痛めど急き上す、胸は子故の五月闇、文目あやめも分かれ曇り聲、娘々と呼出す、アイと返事も一樣に、斯くとは誰も白小袖、死出の晴着と姉妹が、姿も對の雪柳、萎れ出たる屠所の道、羊の歩みたどく、最後の坐にぞ押直る、一目見るより萩の方、扱は様子を聞きしかと、先を取られて今更に、兎角答も涙なる、母の歎きに掻き曇る、心は月の桂姫、漸々に顔を上げ、委細の様子は先刻にから、残らず聞いて居ました、時放れし時鳥、子で子に有らぬ自らを、此年月の御養育